ジェイムズ・ジョイス
『ユリシーズ』第十二挿話(新訳と注解)-その一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 美彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8984

ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』第一二挿話（新訳と注解）——その一

小川美彦

はじめに

およそ *Ulysses* を読み、また研究しようとする者なら、

Weldon Thornton : Allusions in *Ulysses*. An Annotated List.

Don Gifford with Robert J. Seidman : Notes for Joyce. An Annotation of James Joyce's *Ulysses*.

以上二冊の注釈書は常に座右に置くべきである。だが、これらが出たお蔭で非常に便利になった反面、それに振回される危険性も生じた。つまり鵜呑みは禁物ということだ。

訳者らはこれら両著を常時参照しつつも、他の研究書等の豊富な資料を駆使してさらに検討を加え、能うかぎりの精確を

期したつもりである。ただ今回は注解が主目的ではないので、原則として煩雑さを避けいちいち典拠は明示しなかった。

凡　例

＊印は後部に注解のあることを示す。

割注と注解に〔訳〕とあるのは「訳者の注」の意味である。そしてそれは上掲の二著の注の訂正および一部加筆、もしくは新しく書き加わえた注であることを示す。

割注に数字だけを示したのはこの第一二挿話の参考にすべきページ数を表わしている。

略字として、Du＝*Dubliners*　U＝*Ulysses*　FW＝*Finnegans Wake*　Ir＝Ireland　D＝Dublin　B＝Bloom を用いた。

注解に U 307/312 とあるのは、それぞれUの Old & New Modern Library Ed. のページ数を示す。

聖書よりの引用は原則として Douay Version の章節によるが、Authorized Version への言及は「欽定訳」と明示した。また、聖書からの引用句の訳文は英国聖書協会の文語訳を用いたが、一部訳者が手を加えたところもある。

アイルランドの人名、地名の発音については、一部の古名をのぞきすでに英語化したものは英語読みにした。

俺がちょうどアーバ・ヒル街路〔D市西部、リフィ川北岸、英国連隊（現在のコリンズ連隊）にそう〔訳〕〕の町角で、ダブリン首都警察のトロイじいさんとちょっぴり立ち話をしていると、そこへ、いやおっ魂消たのなんのって、どじな煤掃除野郎が通りかかって、道具の先っぽをあやうく俺の眼の中に突っ込みそうになった。俺はむき直ると小僧を頭ごなしにどやしつけようとしたが、見るとだれあろう、ストウニ・バタ街路〔東に向って、アーバ・ヒル街路と交わる左手の〔訳〕〕をジョウ・ハインズがぶらぶらやって来た。

——やあ、ジョウ、って俺はなあ。うまくやってるかい？　お前はあのとんまな煙突掃除野郎があやうくブラシの柄で俺の目っくり玉をほじくり出しそうになったのを見たろう？

——煤*は縁起がいいんだぜ、ってジョウはなあ。お前さんと話していたあの老耄親爺はだれだい？

——トロイじいさんは、って俺はなあ、もと巡査だったんだ。俺は天下の公道の往来を掃除道具や梯子で妨害したかどで、あん畜生をさつに突き出したものかどうか迷っているところさ。

——お前さん、こんなところでなにしているんだい？　ってジョウはなあ。

——別にたいしたことじゃないよ、って俺はなあ。むこうのチキン・レイン小路〔英国連隊の前でアーバ・ヒル街路から北へ入る。現在のアードリグ道路〔訳〕〕の角の駐屯地教会〔駐屯軍学校付属。この一劃には、他に陸軍刑務所（現在の陸軍アーバ・ヒル留置場）、陸軍病院がある〕のあたりに猛だけしい大盗人野郎が住んでるんでね——トロイじいさんはちょうどそいつのねたを提供してくれていたんだ——きゃつは茶と砂糖をごっぽりちょろまかしやがったんで、週三シルずつ支払わにゃならねえんだ、きゃつの話ではダウン郡〔北Ir、アルスター州南東部〔訳〕〕に農場があるってさ、被害者はむこうのヘイツベリ・ストリート〔D市南部、キャムデン・ストリートの西に並行して走る〔訳〕〕の近くに住むモーゼズ・ハーゾグっていう一寸法師さ。

——割礼野郎か！　ってジョウはなあ。

——そうよ、って俺はなあ。先っちょをちょっとちょん切られてんのさ。ゲラハティっていう爺の鉛管工。俺はもうこれで二週間も奴の根城を見張ってんだが、奴ときたひにゃ鏗一文出しゃしねえ。

――そいつが目下のお前さんの仕事なんだろう？　ってジョウはなあ。

――そうよ、って俺はなあ。「ああ、勇士は倒れたるかな」〔欽定訳「サムエル記」Ⅱ1―一九、二五〕。焦付きおよび不定債権の取り立て役さ。だが、なにしろ敵は一日じゅう探し回ったって絶対にお目にかかれない札つきの追剝ぎ野郎で、その痘痕面ときたひにゃお月さまでも顔負けさ。「おっさんにいってやんな」って奴はなあ、「もう一度お前さんをここへ寄越せるものなら」って奴はなあ、「寄越してみな、さあ、どうだ、そうすりゃ」って奴はなあ、「おっさんを裁判官の前に呼び出して、嘘じゃないぜ、無許可営業で裁いてもらうぜ」。そういっておいて、奴のほうじゃいまにもパンクしそうなくらい鱈腹食っていやがる！　いやはや、ちびのユダ公がかっかするのを見て笑ったの、笑ったの。「あんひとはわかしのお茶飲む。わかしの砂糖食う。なんじえならわかしの金払わノー？」

ウッド河岸通り〔リフィ川の南岸、グラタン橋とリッチモンド橋の間にある。エセックス河岸通りと並んで〔訳〕〕区〔一九〇〇年の法令によってダブリン特別区（本来の市部より広く、郊外をも含む）を二〇に分った、市の行政および選挙区の一〔訳〕〕セント・ケヴィンズ・パレイド〔D市南部、ニュー・ストリート（現在のロウア・クランブラシル・ストリートに当る部分）から東に入る小路〔訳〕〕一三号居住の商人（以下売主という）モーゼズ・ハーゾグより買われ、ダブリン市アラン河岸通り〔D市北岸、ホイットワース橋とクィーンズ橋との間にある〔訳〕〕区アーバ・ヒル街路〔25〕二九号居住の市民（以下買主という）マイクル・E・ゲラハティ殿に売り渡された非生鮮食品、即ち常衡〔一六オンスを一ポンドと定める衡量〔訳〕〕一ポンドにつき三シリングの極上茶常衡五ポンド、及び常衡一ポンドにつき三ペンスのグラニュー糖常衡三ストーン〔一ストーンは一四ポンド〔訳〕〕の買掛金債務英貨金一ポンド五シリング六ペンスを上記の買主は上記の売主に支払わなければならない。但し上記の金額は七暦日ごとに英貨正三シリングの週賦にて、上記の買主より上記の売主に支払われるものとする。尚上記の金額が一方の当事者である上記の売主、相続人、後継者、受託者、譲受人と、他方の当事者である上記の買主、相続人、後継者、受託者、譲受人との間に本日本契約書によって合意された本契約書に明記の方式によって、上記の買主より上記の売主に正当に支払われるまでは、上記の非生鮮食品は上記の買主によって入質され、担保に入れられ、売却され、もしくは他のいかなる方法によっても譲渡さ

れてはならず、上記の売主に独占帰属し、帰属し続け、またかかるものとして認められ、上記の売主によって随意処分されて然るべきものとする。

——お前さんはこちこちの禁酒主義者かい？　ってジョウがなあ。

——一杯と一杯の間は一滴も飲まない主義さ〔いつも飲んでいる〔訳〕〕、って俺はなあ。

——仲間の健康を祈念して飲まないかい？　ってジョウはなあ。

——仲間ってだれだい？　って俺はなあ。ああ、あいつか、可哀そうに、やっこさん気が狂っちまって神*のヨハネ病院に入ってるぜ。

——自家小水を飲んでるってわけかい？　ってジョウがなあ。

——そうよ、って俺はなあ。奴は酒水頭症さ。

——バーニ・カーナンの酒場〔リトル・ブリテイン・ストリートの茶、酒類卸売商。葡萄酒、ブランデー輸入商B・K・商会〕へ行ってみようよ、ってジョウはなあ。市民の奴に会わにゃならないんだ。

——うん、バーニ、わがいとしの君（マブルニーン）の酒場でいい、って俺はなあ。ジョウ、なにか*耳新しいことでもないかい？

——別に、ってジョウはなあ。ただ、シティ・アームズ・ホテル〔家畜市場に近いプラッシャ・ストリートにある。食料雑貨商ミス・エリザベス・オウダウトの経営〔訳〕〕の例の集りに出たよ。

——ジョウ、例の集りってなんだい？　って俺はなあ。

——博労が、ってジョウがなあ、口蹄疫のことで。俺はその内輪話を市民の耳に入れておきたいと思って。

そこで俺たちはリニンホール連隊〔リズバーン・ストリートにあったもとのリンネル取引所。一九一六年の武装蜂起の際に破壊された。D市砲兵連隊南分隊の駐屯地〔訳〕〕のわきを、ついで裁判所〔グリーン・ストリートに面した地方民事裁判所〕の裏手を通っていった、話に花を咲かせながら。懐ぐあいのいいときにゃジョウの奴なかなかいい男なんだが、そ

んなことはまずない。ちえっ、なんともきたねえ野郎だ、あの腹ぐれえゲラハティめ、白昼堂々ひとのものを盗みやがって。「無許可営業で」〔26〕なんて吐かしやがる。

「美わしきイニスフェイルに」理想境あり、聖なるマイカンに捧げられし邦〔カーナンの酒場は聖マイカン教区にある〕。望樓〔頂きに狭間胸壁のあるこの塔は教会の他の建物よりも古く、中世後期の作といわれる〔訳〕〕の聳え、遙か彼方より望見せらる。また、令名高き武士と諸侯なる、幾多の英傑の亡骸生きてあるとき眠りしがごとく眠る〔一七世紀に造られた地下納骨堂にはミイラ化した死体（十字軍戦士、一七九八年の叛乱の指導者たちの）が保存されている〔訳〕〕。そはまさに樂園にして、涓流はさざめき、川という川に魚満ちて、大鰈、平目、鱵、大比目魚、下顎の鍵狀に曲りたる鱈、若鮭、小鰈、鰈、諸々の雜多なる下魚、それに外の枚擧に遑なき水中王國の住人はしゃぎて廻る。西から、はたまた東から吹き來る軟風に、高くそびゆる樹々は新緑の葉を四方に靡かせる、薫りを漂わす大楓、黎巴嫩杉〔「集会書」24—一七の転用〕、丈高き篠懸の木〔同上24—一九の転用〕、薬用有加利樹〔その滲出液には強力な収斂作用があるので、咽喉カタルのうがい薬に、また下痢止めにも使われた〔訳〕〕、それに樹木界を飾る他の種々なる樹その一帶に鬱蒼と繁茂す。美わしき乙女らいと美わしき歌唄いつつ美わしき樹々の根方に坐り、たとえば金塊や、銀色に輝く魚、幾樽もの生鰊、幾網もの鰻、鱈の幼魚、幾籠もの小魚、紫色の海の珍魚、陽気な昆蟲など、ありとある美わしき物を手當り次第に弄ぶ。かくて數多の英雄、乙女らの歡心を買わんと遠路はるばる訪ね來る、エルバナからスリーヴマージイ山塊〔現在のリーシュ郡南東部にあった同名の区（ベロニイ）の南端にある〔訳〕〕まで、類い稀なる王子ら、「自由なるマンスタ州」や「正義をもって聞こゆるコナハト州」や「平坦にして滑々たるレンスタ州」や「クルアハン〔ロスコマン郡北東部、フレンチパークの南東一〇キロの現在のラスクロウガン。もとコナハト州の歴代の王の居城があったところ〔訳〕〕の國」や「名聲赫々たるアーマー〔北Irのアーマー郡の郡都。Irのカンタベリ。往時の学芸の中心地〔訳〕〕」や「ボイル〔ロスコマン郡北部の古都。一二世紀の大修道院はノルマン人、また最終的にはクロムウェル軍によって徹底的に破壊された〔訳〕〕」の氣高き地方」の諸侯の子息たる王子らが。

しかして燦然たる宮殿〔聖マイカンズ・ストリートにある市営食料（青果、魚）市場の建物〕ありて、そが輝ける水晶の屋根は、とくに遠洋漁業用に建造されたる三檣船に乗りて、涯しなき海洋を横切り來る漁夫らの眼を捉え、はたまたその國に産するなべての家畜や食用肥畜や初物の果實〔「申命記」二、一〇参照26—〕そこに陸續として到る、族長の血をひく族長なるオゥコヌル・フィッツサイモン〔フィッツサイモンは「サイモンの息子」の意。市営食料市場主任〕

割前を取り立つるなれば。そこに特大の荷馬車豊かなる地の幸を運び來る、幾籠もの花椰菜、大八車何臺分もの菠薐草、鳳梨の打切、蘭貢眞桑瓜、何貫もの赤茄子、幾樽もの無花果、何反分かの蕪葉牡丹、球形馬鈴薯と、ヨーク種とサヴォイ種の幾束もの斑色甘藍と木皿に區分けされたる地上眞珠〔古代エジプト人の玉葱に対する異称〕、玉葱と経木製平籠に盛られたる茸と皺皮南瓜と肉太の烏の腕豆、それに大麥や西洋油菜や、林檎の赤、緑、黄、褐色、小豆色なる、甘き、大ぶりの、酸き、豊熟せる、それに斑模様のもの、木箱入り苺や豊潤にして柔毛多き幾籠もの西洋酸塊や王族にふさわしき苺や莖つきたるままの木苺など。

寄越せるものなら、って奴はなあ、寄越してみな、さあ、どうだ〔26〕。やい、俺のところにきてみろ、ゲラハティ、札つきの天下御免の追剝ぎ野郎〔26〕！

しかして同じ道を、鈴つき去勢牡羊の一團を先頭に、出産用牝羊と始めて刈込まれたる當歳牡羊と仔羊らの群が續き、さらに灰色鷲鳥や未成年の食用牡牛や鼻息荒き牝馬や角を切られし仔牛や長粗毛の羊や肥育用羊やカフ〔スミスフィールド街路の家畜、穀物、羊毛販売商ロレンス・カフ父子商店出入りの博労ジョウジフ・C.〕所有の出産間近の優良牝牛や肥育用不良家畜や卵巣摘出の牝豚や醃薫肉用豚や種々様々なる品種の特出豚や安格斯郡〔スコットランド東部〔訳〕〕産の若牝牛や、大賞受賞の乳牛と肉牛と連立ちたるいまだ角の生えざる純血種の若牡牛など、無數の動物の群通り往き、しかしてラスク〔D市北々東二二・五キロの村及び教区。家畜市が年四回開かれた〔訳〕〕とラッシュ〔D市北東二四キロ、ラスク教区の海辺の港町〔訳〕〕とキャリクマインズ〔D市南東一六キロの村。古戦場、旧跡に富む〔訳〕〕の牧草地から、またソウマンド〔ノルマン人の侵入以前にIrを五分した大体現在の四州に準ずるが、マンスタは南北〕マンスタ州北部の王国。現在のティペラリ、クレア、リマリック（北部）郡に亙る地域〔訳〕〕の細流ながるる谷間から、峻險を誇るマックギリカディ山脈〔Ir南西部、ケリ郡にあるIr最高の山脈〕や底知れぬ水を湛えし堂々たるシャノン川〔キャヴァン郡のクウィルカ山の斜面に源を発し、一連の湖を縫いながらIr中央部を南に貫流してリマリック市を経て西に折れ、大西洋に注ぐ。全長二七三・五キロ、英諸島中最長〔訳〕〕の流域から、はたまたキ*アルの子孫の定住地たるなだらかなる斜面より來れる羊と豚と足取り重き牝牛の乳房を溜りにたまりたる乳汁にて張り裂けんばかりにしたる一團、皆のどすんどすん、きいきい、羊のぐるぐる、牛のべえべえ、羊のめえめえ、牛のもうもう、皆のぐうぐう、豚のぶうぶう、皆のぴちゃぴちゃ、む

しゃむしゃなどの音、時となく聞えくる。しかして最後に、幾樽もの乳酪（バター）と幾つもの固形乾酪（チーズ）と農家用小樽と仔羊の胸肉と何斗（と）もの小麥と、長楕圓形の卵が幾百幾千となく、大小様々に、淡き色と濃き色のとが混り合いたるが次々に運ばれゆく。

そこで俺たちはバーニ・カーナンの酒場〔27〕に入った。と、果せるかな、市民の奴が奥の片隅にいて、あの疥癬（かいせん）かきの雑犬の*ギャリオウエンのやつを相手に盛んにぶつぶつ呟き、市民の奴、酒が天から降ってこないものかと心待ちしていた。

——そら、奴がいるぜ、って俺はなあ、いつもの巣に鎮座して、「*あふれるジョッキ」と書類の山を脇に、民族のためにひと働きしようと。

雑犬のやつがぞっとするような唸り声をあげた。だれかこん畜生をばらしてくれたら、それこそ肉体的な善業（ぜんぎょう）になるといってもいい。こやつはいつか認可に関する召喚状をもってやって来たサントリ〔D市北郊外の教区、村。中央郵便局から北六キロ〔記〕〕駐在のお巡りのズボンの尻をずたずたに喰いちぎったそうだ。

——止まれ、名前をいえ、って奴はなあ。

——安心しろ、市民、ってジョウはなあ。ここにいるのは仲間だよ。

——よし、通りたまえ、わが仲間たち、って奴はなあ。

そういって手で眼をひとこすりしてから奴はなあ——

——天下の狀勢をどう思うかね？

義賊や*「山のロリ」ぶって。だが、さすがにジョウは立派に応対した。

——国際価格が勃躍しているようだ、って奴はなあ、手でズボンのうえから急所を撫でさすりながら。

すると、さすがに市民は平手で膝を打った、そして奴はなあ——

——万々で一戦をいたすからさ。

すると、ジョウはなあ、ズボンのポケットの中で親指を勃起させながら――

――ロシア人が世界を征服しようとしているんだ〔日露戦争（一九〇四年二月―五年九月）に言及して。Uの物語日である〕。

――おい、ジョウ、変な冗談はいい加減にしろよ、って俺はなあ、せっかく一杯やりたくなってんだ、誰がなんといおうと止められねえや。

――酒は何にするね、市民、ってジョウがなあ。

――国産ワイン〔ギネス・ビール〔訳〕〕、って奴はなあ。

――お前さんは何だい？　ってジョウがなあ。

――「*マカナスピイにおなじ」さ、って俺はなあ。

――テリ、三杯、ってジョウはなあ。ところで市民、老骨のぐあいはどうだい？　って奴はなあ。

――上々さ、君、って奴はなあ。なんだい、ギャリ〔30〕？　最後は俺たち〔Ir人〕が勝つってかい？　え？

そういうと、奴っこさんどでかい老耄犬の首筋をつかまえて、いやはや、奴ときたら息もできないくらい揉みくちゃにしたものだ。

圓塔〔Irに多く残存する修道院付属の鐘楼、望楼、避難所。九世紀末～一二世紀の作。一八～四五メートル〔訳〕〕の根元の大いなる丸石に腰掛けたる人物は肩幅廣く、胸厚く、手脚は筋肉隆々と、眼差し清純にして、頭髪赤く、雀斑夥しく、鬚房々と、口大きく、鼻は巨大に、長頭にして、声太く、膝あらわに、握力すぐれ、脚毛深くして、顔輝き、腕筋骨たくましき英雄なりき。そが肩幅は數尺におよび、巖のごとく頑強に、山のごとく巨大なる膝には肉體の露なる他の部分同然に、色と硬さにおいて針金雀枝（えにしだ）（ウレックス・エウロペウス）に類する黄褐色の刺（とげ）のごとき毛密生しいたり。鼻翼の擴がりたる大いなる鼻孔より同じく黄褐色なる剛毛突き出で、そのいかにも廣く開けたる鼻孔の洞窟のごとき小暗き空間は、野雲雀の巣を營みてあまりありと思わるる程なりき。「*涙と笑いと」の絶えず勝

利を得むと争いいたるその「眼」はすこぶる大形の花椰菜の大きさありき。温き呼氣の力強き漲流は奥深き口腔より規則正しく噴出しおり、同時にそがすさまじき心臓の音高くして激しき強健なる反響は、周期的なる共鳴を以ちておどろおどろしく轟き、大地や高き塔の頂きや、洞穴を穿ちたるなおさらに高き岩壁を揺がせ、震動せしめぬ。

この者ゆるき短袴のごとく膝まで屆きたる剝ぎたての牛皮の長き袖なし寛衣を着し、藁と藺草とを編みて作り成したる腰帶にて體の中程を絞めいたりき。その下には、腸線にて大まかに縫い合せたる鹿皮の股引を着用しおりぬ。そが下肢は地衣類にて緋色に染附けたるバルブリガン〔D市北三〇キロ、靴下製造で有名な海港〔訳〕〕の革脚絆で膝部まで包み、足には鹽もて硬くなしたる牛の粗皮靴を履き、同じく牛の氣管の靴紐にて絞めいたりき。腰帶より垂れ下りたるひと列の濱石は堂々たる體軀の動きにつれて搖れ動き、しかしてそが濱石には、疎かなれど力強き業にて、部族の守護者たる古の愛蘭土の數多き英傑、女傑の像刻まれてありき——クーフリン、百戦錬磨のコン、九人の人質のニアル、キンコラのブリアン、上王マラキ、アート・マクマロウ、ショーン・オウニール、ジョン・マーフィ神父、オウエン・ロウ、パトリック・サースフィールド、レッド・ヒュー・オウドヌル、レッド・ジム・マクダーマット、オウエン・オウグロウニ司祭、マイクル・ドワイア、フランシィ・ヒギンズ、ヘンリ・ジョイ・マックラッケン、ゴリアテ〔「サムエル記I—17に出るペリシテの町ガテの巨人。四〇日間イスラエル軍に挑戦したが、投石器の一撃のもとに子供ダビデに殺された。ゴリアテ＝英国人、ダビデ＝Ir人に擬せられている〔訳〕〕〕、ホラス・ホイートリ〔ミュージック・ホール歌手。一八九〇年代にパントマイムの役者としてDで人気があった〕、トマス・コネフ〔不明〕、ペッグ・ウォフィントン、村の鍛冶屋、月光隊長、ボイコット大尉、ダンテ・アリギエリ〔(一二六五—一三二一)。『神曲』の作者、フィレンツェの愛国者。カトリックの生んだ最大の詩人〔訳〕〕、クリストファ・コロンブス〔(一四四六?—一五〇六)。イタリアの航海者、アメリカ大陸の発見者。アメリカにはIr移民が多い〔訳〕〕、聖フルサ、聖ブレンダン、マクマホン元帥、カール大帝、ティアボールド・ウルフ・トウン、マカベア人の母親、『モヒカン族最後の勇者』〔アメリカの小説家J・F・クーパ(一七八九—一八五一)の小説(一八二一)、六〇。モヒカン族最後の若き酋長アンカスは壮烈な最後を遂げる〔訳〕〕、『カスティールの薔薇』、「ゴールウェイっ子」、「モンテカルロで胴元を倒した男」、要害を死守する男、『拒否した女』、ベンジャミン・フランクリン〔(一七〇六—九〇)。アメリカの政治家、著述家、科学者。一七七一年D市訪問中にIrとアメリカ両植民地の協力を提言した〔訳〕〕、ナポレオン・ボナパルト、ジョン・L・サリヴァン、クレオパトラ〔(前六九?—三〇)。カ

エサル、アントニウスを巧みに操った彼女はローマでは評判が悪かったが、英帝国＝ローマ帝国の立場からするとIr人にとっては好ましい人物。なおIr出身のG・B・ショーの初期の作品に喜劇「シーザとクレオパトラ」（一九八八）がある〔訳〕）、「わ*がいとしの君」、ジュリアス・シーザ（前一〇〇―四四）。五八～五〇年ガリア地方を征服してブリタニアに重大な脅威を与えた〔訳〕）、パラケルスス（一四九三―一五四一）。ドイツ系スイス人の医者、錬金術家、神秘家。プリプトン紅茶で知られるスコットランド生れのIr系実業家、准男爵。慈善家。ヨット狂、Irびいき〔訳〕）、ウィリアム・テル（一四世紀のスイス独立の伝説的英雄。英語による劇では、Bも言及するIr生れのJ・S・ノウルズ（一七八四―一八六二）の悲劇「ウィリアム・テル」（一八二）が有名〔訳〕）、マイケランジェロウ・ヘイズ（マイクル・アンジェロウ・H・（一八二〇―七七）。Irの画家、D市儀礼長。前D市長の諷刺画により名誉毀損事件を起す。戦争画に長ず〔訳〕）、ムハメッド（マホメット（五七〇？―六三二）。アラブ民族最大の英雄、救世主。右手に剣、左手に「コーラン」は有名〔訳〕）、『ラ*マムアの花嫁』、隠修士ピータ（ピエール（一〇五〇？―一一一五）。フランスの説教者。失敗に終ったパレスチナ解放の第一次十字軍（一〇九八）の指導者。当初の目的は海外に勇飛した中世Irの聖者たちの精神を受継ぐ。死後「躍英雄として祭り上げられる〔訳〕）、い*かさま判事ピータ、「黒*髪のロザリーン」、パ*トリック・W・シェイクスピア、ブ*リアン孔子、マータ・グーテンベルク、パトリッチオ・ヴェラスケス、ネ*モ艇長、*トリスタンとイゾルデ、初代プリンス・オヴ・ウェイルズ（一三〇一年立太子。後のイングランド王エドワド二世（一二八四―一三二七）。一三一四年スコットランドの征服に失敗。これが原因で翌年エドワド・ブルース（一三一八死亡）のIr侵入を招き、ために政府の威信の低下と植民地の弱体化を来した〔訳〕）、トマス・クック父子商会（一八六五年T・C・（一八〇八―九二）、T・M・C・（一八三四―九九）父子によってロンドンに設立された有名な旅行案内社。Irの神父で禁酒運動家T・マシューの影響で熱烈な運動家になる。一八四一年の禁酒運動大会開催の斜旋が彼の将来を決定した〔訳〕）、「勇*敢なる少年兵」、『キ*スのアーラ』、ディ*ック・タ*ーピン、ルードウィヒ・ベートーヴェン（一七七〇―一八二七）。Ir民謡を編曲した、合計五七曲の「Ir歌曲集」（一八一〇―三作曲）がある〔訳〕）、『金*髪娘』、よたよた歩きのヒーリ、主の*僕（しもべ）イングス、ドリ*・マウント、シドニ・パレイド、ベン・ホウス、ヴ*ァレンタイン・グレト レイクス、アダ*ム・アンド・イーヴ、アーサ*・ウェルズリ、クロ*ウカ親分、ヘロドトス（前四八四？―四二五）。ギリシャの歴史家、「歴史の父」。その「歴史」にはIrへの言及はないが、ケルト人のことは二回触れている〔訳〕）、巨*人殺しのジャック、ガウタマ佛陀（前五六〇？―四八〇？）。ガウタマは梵語形、パーリ語形がゴータマ。釈迦牟尼の氏姓。仏陀はブッダの写音、「覚者」、「悟りに到達した者」の意〔訳〕）、レ*イディ・ゴダイヴァ、『キラ*ーニイの百合』、邪*眼のバラル、シェバの女王、エイキイ・ネイグル（北アール・ストリート二五号に茶、葡萄酒、酒類商J・ネイグル商会を営む三人兄弟のひとりジョン・ジョウアキム（愛称「エイキイ」）・N・）、ジョウ・ネイグル（同上の三人兄弟のひとりジェイムズ・ジョウジフ・N・）、アレッサンドロ・ヴォルタ、ジ*ェリマイア・オウドノヴァン・ロサ、ド*ン・フィリップ・オウサリヴァン・ビア。その人物の脇には先の尖りたる花崗岩の槍横たわり、また足元には犬種族の獰猛なる獣（けもの）眠り居りて、そが激しき息遣いは定めて安からざる午睡にあるを示す。但しこの推定は、主人（あるじ）が舊石器時代の巨石を大膽に立割りたる大いなる棍棒にて、時折り強く叩きて鎭めざるを得ざりし只ならぬ呻き聲と痙攣性の身動きによりて確證せられ

ぬ。

とかくするうち、テリ〔31〕の奴がジョウのおごりのビールを三杯もって来たが、奴ときたら一ポンド金貨を出すじゃねえか、いやもう俺は自分の眼を疑っちまったさ。いやまったく、うそいつわりのない話よ。正真正銘ぴかぴかの金貨さ。

――いや、この金の出どこにはまだまだあるんだ、って奴はなあ。

――ジョウ、教会の慈善箱からくすめて来たな？　って俺はなあ。

――額に汗してさ、ってジョウはなあ。あの周到な会員〔B〕がたれ込んでくれたんだ。

――お前に逢う前に奴を見かけたぜ、って俺はなあ、ピル小路〔現在はチャンサリ・ストリートに併合〔訳〕〕とグリーク・ストリート〔チャンサリ・ストリートから北に入る通り〔訳〕〕をぶらぶら歩きながらどろんとした眼で眼の前の魚の腹をいちいち數えていたよ〔近くに市営（青果、魚）市場がある〕。

――黒色の甲冑にて身を固め〔Bは喪服を着ている〔訳〕〕、マイカンに捧げられし邦〔28〕を通り來るは誰ぞ？　ローリの嫡男なるオゥブルームそのひとなるぞ。怖るるものなし、ローリの嫡男は、萬事に周到なる御仁なれば。

プリンセズ・ストリートの老婆の仕事でだ、って市民はなあ、あの御用新聞さ。連携の誓約に忠実な例のアイルランドの国会議員連中の、まあ、箸にも棒にもかからないこの襤褸新聞を覧てみろよ、って奴はなあ。労働者の代弁紙としてパーネルが発刊した、笑わせるじゃないか、『アィアリッシュ・インディペンデント』っていうやつをな。いわゆるアイルランド一辺倒の『アィアリッシュ・インディペンデント』紙の誕生、死亡通知欄の名前を聞いてみろっていうんだ、ありがたい人物ばかりさ。それに結婚通知欄の名前もな。そういうと奴は大声で読み上げ始める――

――ゴードン――エクセタ市〔イングランド南西部デヴァンシャ郡の郡都〔訳〕〕バーンフィールド・クレスント。レッドメイン――セント・アンズ・オン・〔ザ・〕シー村〔イングランド北西部ランカシァ郡の海辺の保養地〔訳〕〕イフリのウィリアム・T・レッドメイン夫人に男児誕生。どうだいこりゃあ。え？　ライト、フリント両家。ヴィンセント、ジレット両家――ストックウェル〔ロンドンのハイドパーク東南の自治区〔訳〕〕クラッパム道路

一七九号のロウザと故ジョージ・アルフレッド・ジレットの息女ロウサ・メアリアンとの。ブレイウッド、リズデイル両家――ウスタ大聖堂〔イングランド西部ウスタシァ郡の郡都ウスタにある〔訳〕〕首席司祭フォリスト博士立会いのもとに、ケンジントン〔ロンドン西部の自治区〔訳〕〕の聖ユダ教会にて、どうだい？　死亡欄。ブリストウ――ロンドン市ホワイトホール小路。カー――ストウク・ニューイントン〔ロンドン北東部の自治区〔訳〕〕、胃炎および心臓病にて。コウバーン――チェップストウ町〔イングランド南西部マンマス郡（民族、宗教、立法上はウェイルズに属す）南東部の町〔訳〕〕の壕邸にて……

――俺はそいつを知ってるよ、ってジョウはなあ、訃報のことで〔第七挿話第六段参照〔訳〕〕。

――コウバーン。ディムジ――もと海軍本部勤務デイヴィ・ディムジの夫人。ミラー――トテナム市〔イングランド南東部、ミドルセックス郡の郡都。ロンドンの北部郊外〔訳〕〕、八五歳。ウェルシュ――六月一二日、リヴァプール市キャニング・ストリート三五号にて、イザベラ・ヘレン。どうだい、これがわが国を代表する新聞なんだからな、え、お前さん？　どうだい、これがバントリ〔Ir南部コーク郡の南西部、バントリ湾に臨む海港〔訳〕〕の狸親爺マ*ーティン・マーフィのやることなんだからな！

――まあ、ねえ、ってジョウはなあ、おみきをふたりに取ってやりながら。仕様がないさ、俺たちが出る前に奴らがやったことなんだから。市民、さあ、飲めよ。

――貴公、ありがたく頂戴するぜ、って奴はなあ。

――ジョウ、乾盃、って俺はなあ。ご列席のみなみなさまにも。

――ああ！　うまい！　もう何もいうな！　この一杯にありつけなくて腐肉みたいになっちまったさ。誓っていうが、空っぽの胃袋の底にぴちゃっと垂れるのが聞えたぜ。

しかして見よ、皆の者が歡喜の盃をひと息に飲み干すうち、神々の遣わせし御使、見目美わしき若者の日輪のごとにこやかに足早に這入り來り、しかしてその後ろを、見るからに賤しからざる足取と顔ばせしたる老人にして律法の聖なる巻物を携え、その令夫人なる類いなき名門の婦人にして女族（にょ）を代表せる美女を従えたるが通り過ぎぬ。

ちびのアルフ・バーガンが戸口からひょっこり顔を出して入ってくると、腹の皮が捩れるほど笑いながら奥のバーニ〔30〕の別室に身をひそめた。と、気が付かなかったが、隅にどっかと陣取って大鼾をかきながらべろんべろんに酔っぱらっているのは、誰あろうボブ・ドーランそのひとだった。俺は何がおっ始まったかわからなかったが、アルフはしきりに表を指さし続けていた。と、いやもう、それは誰あろう、浴室用スリッパをはき、どでかい二冊の本を小脇に抱えこんだあの妙ちくりんな老耄の道化役デニス・ブリーンそのひと、それにせかせかと夫のあとを追いかけて、プードルみたいにちょこちょこ小走りに歩く不幸で惨めな妻君だった。俺はアルフの奴が笑いすぎて死んじまうんじゃないかと思った。

——あいつを見ろよ、って奴はなあ。ブリーンだ。奴はだれかがU・P・、つまり破滅(アップ)なんて書いて寄越した葉書をもってダブリン中ほっつき廻っているんだ、訴訟を起すんだといってな。

そういうと奴はなおも腹を抱えて笑った。

——なにを起すっていうんだい？　って俺はなあ。

——名誉毀損の訴訟さ、って奴はなあ、賠償金一万ポンドの。

——うへえっ！　って俺はなあ。

雑犬のやつがただならぬ気配に気付いて、威嚇の唸り声を挙げはじめた。が、市民が脇腹に脚で一発くらわせた。

——ビ・イ・ド・ホスト〔Ir語の「だまれ」〕、って奴はなあ。

——だれのことだい？　ってジョウはなあ。

——ブリーンさ、ってアルフはなあ。奴はジョン・ヘンリ・メントン法律事務所にいってたんだが、そこからコリス&ウォード法律事務所に立寄り、そのときトム・ロッチフォードが奴に会って、からかい半分に副公安官の役所へゆかせてさ。いやはや、あまり笑ったんで脇腹が痛くていたくて。U・P・、つまり破滅(アップ)だなんて。あののっぽの奴が閻魔みたいな眼付

きでひと睨みしたもんだから、老耄のキ印め、私服を探しにグリーン・ストリートへ行ったというわけさ。

――のっぽのジョンはマントジョイ刑務所〔D市北部、北環状道路とロイヤル運河に挟まれたカウリ・プレイス街路にある。慈悲の聖母病院の北、後出のペントンヴィル刑務所をモデルに一九世紀中頃に建築。長期刑囚収容所〔訳〕〕のあの男をいつ絞首刑にするのかなあ？　ってジョウがなあ。

――バーガンかい、ってボブ・ドーランがなあ、眼をさましながら。おや、アルフ・バーガンだな？

――そうだよ、ってアルフはなあ。絞首刑だって？　いまに見せてやるから待っていろよ。おい、テリ〔34〕、ビールの小を一杯たのむ。あの老耄の間抜け野郎！　一万ポンドだなんて。あのときののっぽのジョンの眼付きときたひにゃさぞ見物だったろうよ。U・P・とはなあ……

そういうと奴は笑いだした。

――だれを笑ってるんだ、ってボブ・ドーランはなあ。いまのはバーガンか？

――大急ぎでたのむ、テリ君、ってアルフはなあ。

テレンス・オゥライアンその聲を聞きて、かの譽れ高き雙生の兄弟なる造酒の司アイヴァと造酒の司アーディローンの永久なるレダの息子のごと巧に聖なる大樽にてたえず醸せる泡立つ漆黒の麥酒を鉛玻璃の器になみなみと注ぎたるを直ちに持來りぬ。技に長けたる兄弟にて大樽の主なるかの者、忽布の水々したる實を摘取り、塊に成し、篩に掛け、搗き摧き、水に漬け、そを酸性麥芽液に混ぜ、そが麥芽液を聖なる火に掛け、日夜勞働の手を休めずなんありける。

しかしてのち汝、いかにも騎士を思わするテレンスは魚の水を得たるが如く、神酒もどきの豐御酒を手渡す、すなわち汝かの鉛玻璃の器を、騎士道の權化にして美わしきこと神々にも等しき、喉渇きたる御仁に差出しぬ。

さるほどにオゥバーガン族の若き首長なるかの御仁は、寛惠なる振舞において後れを取るを忍び得ず、よって慇懃なる仕種にて高價この上なき青銅の硬貨一枚を與えぬ。そが表には細工も絶妙に、ブルンズウィック公爵家の後裔にしてその名も

ヴィクトリアという、王者にふさわしき堂々たる女王の肖像浮出にしてありき、「最高主権者にして、神の恩寵により大不・列顕及び愛蘭土及び海外英諸領土の女王、信仰の擁護者、印度の女帝」、數多の民族を征服支配し、しかも敬愛の的なる宗主、なんとなれば白人、褐色人、赤色人、黒人たるを問わず、「日のいずるところより日のいるところまで」〔「詩篇」49―二〕その御方に親しみ、敬愛しおれるが故に。

――あのフリーメイスンめ〔B〕、何をやってやがるんだろう？　って市民はなあ、あんなに表をうろつきやがって。

――いったい何だっていうんだい？　ってジョウはなあ。

――さあ、ってアルフはなあ、丸をさっとテーブルの上に投げ出しながら。縛り首のことといえばな。お前さんが見たこともない物を見せてやるぜ。絞首刑執行人の手紙さ。ま、これを見てみろよ。

そこで奴はポケットから乱雑な手紙の束と封筒とをひとまとめにしたのを取り出した。

――ひとをかつぐつもりか？　って俺はなあ。

――ぜったいに嘘っぱちじゃないぜ、ってアルフはなあ。読んでみろよ。

そこでジョウは手紙の束を手にとった。

だれを笑ってるんだ〔37〕？　ってボブ・ドーランはなあ。

そこで俺はちょっとしたごたごたが始まろうとしているのを感じた。ボブは黒ビールが廻っているときにゃ何をやらかすか判ったもんじゃない、そこで俺はなあ、ただ座をつくろうために――

――アルフ、近ごろウィリ・マリはどうしているかい？

――知らないよ、ってアルフはなあ。俺はついさっき奴がケイペル・ストリート〔D市北岸、グラタン橋から北にのびる大通り〔訳〕〕をパディ・ディグナム〔第六挿話でグラスネヴィン墓地に葬られた〔訳〕〕と歩いているのを見かけたよ。だがなにしろ、あいつを追っかけるのに急がしくて……

——お前さんなにをした？　ってジョウはなあ、思わず手紙をテーブルの上に投げ出しながら。だれといっしょにだって？
——ディグナムとさ、ってアルフはなあ。
——パディかい？　ってジョウはなあ。
——そうよ、ってアルフはなあ。なぜだい？
——奴が死んだのを知らないのかい？　ってジョウはなあ。
——パディ・ディグナムが死んだ？　ってアルフはなあ。
——うん、ってジョウはなあ。
——たしかに俺はさ、ってアルフはなあ、まだ五分もたってないが、この俺の鼻ぐらいはっきり奴の姿を見たんだぜ。
——だれが死にやがったっていうんだ？　ってボブ・ドーランはなあ。
——じゃ、お前さんは奴の幽霊を見たんだ、ってジョウはなあ、くわばらくわばら。
——なんだって？　ってアルフはなあ。まさか！　ほんの五分……なんだっていうんだ？……ウィリ・マリも奴といっしょにだぜ、ふたりともあそこの何とか屋のそばを……それなのになんだって？　ディグナムが死んだって？
——ディグナムがどうしやがったんだ？　ってボブ・ドーランはなあ。死んだなんて、誰がいってやがるんだ？
——死んだなんて！　ってアルフはなあ。お前と同様奴も死んじゃいないさ。
——そうかもな、ってジョウはなあ。なのに連中ときたらけさ奴*をむりやり墓に入れちまったんだぜ。
——パディをかい？　ってアルフはなあ。
——うん、ってジョウはなあ。奴は天命を全うしたんだ、奴の霊の安からんことを。
——まさか！　ってアルフはなあ。

いやもう奴ときたひにゃ、寝耳に水といったところだった。

暗闇の中で幽*質の両手がはたはた浮び揺れるのが感じられた。そしてタ*ントラの祈禱が経軌次第所依の方位にむかって行なわれると、紅玉色光の淡い、だがしだいに強度を増す光輝が徐々に見えてきた。そして遂に幽質副体が頭頂と顔面から発する生*命光の放射によって出現したが、それはまさに現身そのままであった。霊界との交信は霊媒の脳*下垂体を通じて、また薦骨部と太陽神経叢から発する橙黄色の炎輝と深紅の光線によって行なわれた。霊界における所在について地上名で質問されると、ディグナムの霊はわたしはいま還*没、すなわち再生の途上にあるが、まだ幽界の下層に居るさまざまな血に飢えた魔物の手で試みられる苦難を切抜けねばならないと述べた。あの幽明の境を越えた最初の感懐はという問いに答えて、彼は以前はあたかも「鏡をもて見るごとく見るところ朧」〔欽定訳「コリントI」13―一二〕であったが、境を越えた者には霊界における進化の無限の可能性が開かれていると述べた。霊界での生活は「肉にある」〔『コリントII』10―三〔訳〕〕われわれの経験と似ているかどうかと訊ねられて、彼は現在神*界にいる、自分よりも恵まれた者に聞いた話では、彼らの住居には怛*羅法那、阿羅嚩多嚕、鉢哆賀嚕駄、波吒虞囉薩都といった近代的な屋内設備がすべて完備し、また最高の奥義に達した道士は繰返し高まる至純の悦楽に耽っていると述べた。ここで要請に応じてコップ一杯の乳糜がもって来られたが、明らかに爽快感を与えたようであった。生きている者に何か教え諭すことはないかと聞かれて、彼はいまだ幻*力に踏み迷えるすべての者は正道に醒めなければならない、なぜなら神*霊仲間のあいだでは、火星と木星が白羊宮の支配する東方舎で災いをもたらそうとしていると話されているからだと力説した。つぎに故人の方でなにか特別な要望があるかと察問されたが、それに対する答えは、「まだ肉体を棲家とする地上の友たちよ、われわれは君たちに挨拶の言葉を送る。C・K・にあまり高く吹っかけられないように注意し給え」であった。そのC・K・とは評判のいいH・J・オニール葬儀社〔北ストランド道路一六四号で葬儀社、運送業を営むハリ・J・O・〕の支配人で、故人の親しい友人であり、葬儀執行責任者であったミスタ・コーネリアス・ケラハであることが確認された。姿を消す前に、彼は親愛な

る息子のパッツィが探していたブーツの片方がいま建増し部屋の整理箪笥の下にある、ブーツの踵はまだ使えるから、底だけを張替えてもらうためにカレンの店〔メアリ・ストリートで靴製造業を営むM・C・〕へ出すよう息子に伝えてもらいたいと要望した。彼はこのことが気がかりで、常世の国におりながらどうしても心の安らぎが得られないと述べ、自分の意思が間違いなく伝えられることを切に要望した。

この件に関しては必ず実行する旨の保証が与えられ、それに対して満足の意が伝えられた。

かの人は現世の住處をあとに身罷りぬ、われら友垣の朝を照す日輪なりしオゥディグナム。原野を歩むその脚は輕やかなりき、額の晴々と輝くパトリックよ。愛*蘭土の大地よ、汝の風をもて嘆き悲しめ、しかして、おお、愛蘭土の大洋よ、汝の旋風をもて嘆き悲しめ。

——やっこさんまたきたぞ、って市民はなあ、表を眺めながら。

——だれだい？　って俺はなあ。

——ブルームだよ、って奴はなあ。あいつさっきからもう十分間もあそこを往ったり来たり立番をやってるんだ。

と、いやはや、俺は奴が面をちょいと覗かせてはまたすっとひっ込めるのを見た。

ちびのアルフ〔36〕はしたたか打ちのめされた。たしかに、そうだったのだ。

——まさか！　神よ憐み給え！　って奴はなあ。あれはてっきりディグナムだと思ったんだが。

すると、帽子をあみだにして〔挑戦的なポーズ〔訳〕〕ボブ・ドーランがなあ、例の酒の勢いでダブリンいち罰当りな悪党口調で——

——神が憐むなんて誰がいいやがったんだ？

——よくもまあそんなことを、ってアルフはなあ。

——神が憐むだと？　ってボブ・ドーランはなあ。可哀そうに、「*ウィリちゃん」、ディグナムの命を奪いやがって。

——だが、まあ、ってアルフはなあ、その話題を受流そうとして。奴はあれで立派に往生したんだよ。だがボブ・ドーランは堪りかねてがなり立てる。

——いいか、神なんてどうしようもない悪党だ、可哀そうに、「ウィリちゃん」、ディグナムの命を奪いやがって。

テリ〔37〕がそばへやって来て、奴に静かにと目くばせした、ちゃんとした酒類販売免許店ではそんな罰当りな言葉はいってくれるなというわけで。すると、ボブ・ドーランは本当の話、パディ・ディグナムのことでさめざめと泣き出す始末。

——まったくいい奴だった、って奴はなあ、すすり泣きながら。まったく非の打ち所のないいい男だった。

いやはや涙が出そうになる。見え透いたお世辞なんだが。大将はもうあのまんまと乗せられた夢遊病の淫売野郎のところへ帰ったほうがいい、ムーニっていう田舎執達吏の娘だ。お袋はハードウィック・ストリート〔オゥコヌル・ストリートを北へ、北フレデリック・ストリートから右に入る通り〕で下宿屋をやっていた〔Duの屋〔下宿〕参照〕、〔訳〕やたらに跳場のあたりをほたついていた娘、そこに下宿していたバンタム・ライオンズの話では、午前二時だというのに一糸まとわず、だれかれの見境なくみなにおおっぴらに見せびらかして。

——おどろくほど高潔で、誠実このうえない男、って奴はなあ。それなのにやっこさんはもういない、可哀そうに、「ウィリちゃん」、可哀そうなパディ・ディグナム。

しかして悲歎にくれ重き心を抱きて、件の御仁かの天くだる光の消滅を悲しみて落涙に咽びぬ。

老耄のギャリオウエン〔31〕が、またもや〔36参照〕戸口のあたりできょときょとしているブルームにむかって唸り声をあげ始めた。

——さあ、はいれよ、こいつは取って喰ったりはしないから、って市民はなあ。

そこでブルームはどろんとした眼〔34〕で犬の様子を伺いながらさっと店内に入り、テリにマーティン・カニンガムがいるかどうか訊ねる。

――いやはや、大変な代物だ、ってジョウはなあ、手紙の一通を読みながら。ちょっと聞いてみなよ。そういうと、奴は声を出して手紙を読みはじめる。

ダブリン郡ダブリン市執政長官殿

閣下、僕は世間を騒がせたあの傷ましい件に関し僕の職をお役に立てたいと思います。僕は一九〇〇年二月一二日にブートル監獄〔リヴァプールの近くの死刑囚刑務所〕で*ジョウ・ギャンの絞首刑をしました。そしてまた僕はペントンヴィル刑務所〔ロンドン北部にある死刑囚刑務所〕で……

――ジョウ、見せてみろよ、って俺はなあ。

――……ジェシ・ティルジット残〔ママ〕殺のかどで兵卒アーサ・チェイスの絞首刑をしました。また僕が助手のときに……

――すげえなあ、って俺はなあ。

――……ビリントン〔一八九九年に一週間に三人のIr人の兇悪犯を処刑したので有名〕が恐るべき殺人犯*トウド・スミスを処刑しました……

市民が手紙をひったくろうとした。

――まあ待ってくれよ、ってジョウはなあ、僕は輪綱を嵌める特別なこつを心得ています、一度嵌まると抜け出すことはできません、格別のお引立てを期待しております、閣下、僕の報酬は五ギンニズ〔ママ〕であります。

リヴァプール市ハンタ・ストリート七号

公認理髪師

H*・ラムボウルド

――やっぱりこいつも理髪尽で極悪非道な野蛮人だ、って市民はなあ。

――それにこの恥っ知らずのきたねえなぐり書きの字ときたひにゃ、ってジョウはなあ。ちえっ、こんなもの、アルフ、って奴はなあ、もう見ちゃおれねえや。やあ、ブルーム、って奴はなあ、何にするかい？

そこで奴らは酒のことでやりとりし始めたが、ブルームはいやいや、いただけません、申訳ありませんが他意はないんですから、とか何とかいろいろ並べ立てて、挙句の果てに、じゃ、葉巻を一本いただきやす、っていいやがった。いやはや、なにしろ奴は周到な会員〔34〕だからな、絶対に。

――テリ、飛びっきり上等な葉巻を一本もって来てくれ、ってジョウはなあ。

つぎにアルフは黒枠でかこんだ悔みの名刺を持って来た男がいたぞ、ってわれわれに話していた。

――あいつらはみんな、って奴はなあ、炭鉱地帯（ブラックカントリ）〔イングランド中部のバーミンガムを中心とする大炭鉱、工業地帯。とくにこの場合は貧しい炭鉱地帯〔訳〕〕出身の理髪師で、即金五ポンドとほかに旅費をもらいさえすりゃ自分の親父でも縛り首にし兼ねない連中なんだ。

さらにやっこさんはわれわれに話を続けて、下で待ち構えていて男が宙ずりになると、直ぐさま最後の止めを刺すべく踵を引張ったふたりの男がいた、奴らはそのあとで綱を小さく切り刻んで、その切れっ端をひとりに一本二、三シルで売り飛ばすんだからな。

小暗き所にて彼奴（きやつ）ばらは待つ、復讐心に燃ゆる剃刀騎士團。件の者死の輪綱を摑む――然り、斯くして流血の行為に及びし者はみな擧げて冥府へ送る、何となれば、われその行為は斷じて許さじ〔〔創世記〕9―六〔参照〕〔訳〕〕、と主のたまい給うが故に。

そこでみなは死刑について論じ始めたが、ブルームはもちろん口出しして、この問題の所以やら謂れやら、尤もらしいことを盛んに並べ立てる、と同時にその間じゅう、例の老耄犬が奴の臭いを嗅ぎ廻る、ユダ公は犬の注意を魅きつけるような一種独特の体臭を発散するということだ、言葉の意味はよくわかりませんが、抑止効果やらなにやら、くだくだと御託（ごたく）を並

べ立てる。

——死刑でも抑止効果のないものがひとつある、ってアルフはなあ。

——そりゃ何だい？　ってジョウはなあ。

——可哀そうに、首を締められてる男のいち物さ、ってアルフはなあ。

——ほんとうかい？　ってジョウはなあ。

——ぜったいに嘘じゃない、ってアルフはなあ。俺はインヴィンシブルズ結社のジョウ・ブレイディが縛り首になったとき、キルメイナム刑務所の看守長からたしかに聞いたんだ。その話では、刑の執行後綱を切って降したときに、いち物が火掻き棒みたいにぬっとおっ立っていたということだ。

——誰かがいったように、ってジョウはなあ、「死にても衰えぬ主たる慾情」だ。

——それは科学的にも説明可能ですよ、ってブルームはなあ。いいですか、それはきわめて自然な現象にすぎないのです、なぜならその原因として……

それから奴は現象とか科学とか、この現象とか、あの現象とか、舌を噛みそうな語句を並べ始める。

著名な生理学者ルイトポールト・ブルーメンドゥフト教授は、頸部脊椎の瞬間的骨折とそれに由来する脊髄切断は、広く知られたる医学上の通説によれば、必ずや人体の神経中枢に激烈な神経節性興奮を惹起するものと予想され、その結果海綿体の血液腔が急激に膨張して、即座に陰茎あるいは男根と呼ばれる人体局所への血液の流入を容易ならしめ、医学界にて頭部剝奪による臨終に際しての躍上かつ突出性病的繁殖愛好性勃起と称せられる現象を来す旨の医学的証言を開陳した。

そこで、いうまでもなく市民の奴は自分の出番をいまかいまかと待っていたので、すかさずインヴィンシブルズ結社のこと、老先輩のこと、六七年の戦士のこと、「誰が九八年を語るを怖れよう」のこと、それからジョウも一緒になって、即決

臨時軍法会議で独立運動のために絞首刑に処せられ、臓腑を抜取られ、また流刑に処せられたすべての同志のこと、新生アイルランドのこと、新生のあれや新生のこれや諸々のことを一気に駄弁り始める。新生アイルランドのことを口にするのなら、犬も新生なのを買ってくるべきだ、そうだとも。そこら中くんくん鼻を鳴らしてはくしゃみをしたり、また痂をしきりに引掻いたりしているがつがつした疥癬かきの雑犬〔30〕、するとそいつは見返りを期待して御機嫌を伺いながら、アルフに小を一杯おごってやっているボブ・ドーランのところへ行く。そこで、いきおいボブ・ドーランの奴、犬を相手に愚にもつかぬことをおっ始める——

——お手！　わんわん、お手！　可愛いいわんわん。さあ、お手！　お手！

馬鹿々々しい！　奴が握りたがっている手なんかもういい加減にしろ、アルフがやっこさんが腰掛のやつから老耄犬のやつの上に転がり落ちないようにしっかり支えていたが、やっこさんときたひにゃ愛情をもって躾るべきだとか、純血種の犬だとか、利口な犬だとか何やかやたわごとめいたことを喋り立てる——聞いていて糞うんざりだ。それからやっこさんテリに持って来るようにいいつけたジェイコブ社〔ビスケット製造販売の大手。D市ビショップ・ストリートその他に工場、事務所、販売店を持つ〔訳〕〕の缶の底から古いビスケットのかけらを二、三拾い始める。いやはや、そいつはそれを片っ端から呑込むと、もっとほしがって舌を一メートルも伸す始末。飢えた雑犬のやつ、もう缶ごと食べちまわんばかりであった。

その間にも市民とブルームは例の問題を続けて、シアズ兄弟のこと、むこうのアーバ・ヒル街路〔26〕でのウルフ・トウン〔32〕のこと、ロバート・エメットや、祖国のために身命を擲つとか、サラ・カランについてのトミ・ムア一流のセンチメンタルな調子とか、「彼女は祖国を離れてはるかな地に」とか盛んに論じあっていた。それにブルームの奴、とうぜんのことながら、おっ魂消るほど上等な葉巻〔44〕を口にオツに澄してはいるもののあのぶくぶくの顔じゃあ。幻象そのものだ！やっこさんが結婚した脂肪の塊は畳二帖敷きみたいな尻をした世にも珍妙な老耄の幻象だ。やっこさんらふたりがあそこの

シティ・アームズ〔27〕に下宿していたとき、小便おやじのバークの話では、そこにひとりの老婦人がぐうたらのいかれぽんちの甥といっしょに泊っていたが、ブルームの奴、遺言状で遺産をちっとばかりわけてもらおうと、トランプでベジーグの相手をしておべっかを使ったり、その老婦人はいつもえらく信心深い生活をしていたものだから、自分も〔ユダヤ人なのに〔訳〕〕金曜日には獣の肉を食べないようにしたり〔一九六六年二月一七日、ほとんどの国で中世以来の禁制を解除した。日本では聖金曜日のみ今でも禁止されている〔訳〕〕、なんとか彼女の気にいろうとしていたということだ。そしてある日のこと、やっこさん奴を連出してダブリンじゅうを梯子酒したことがあったが、驚いたことに、奴はへべれけに酔っぱらってやっこさんに連帰ってもらうまでぜったいに参ったとはいわなかった、それなのにやっこさんアルコールの害毒を教えてやるのが目的だったなんてぬかしやがる、それこそ三人の女連中にしてみれば、やっこさんを火炙りにしても足りないくらいだったろう、まったく妙なことを考えたものだ、例の老婦人、ブルームの妻君、それにホテルの経営者のミセス・オゥダウ。いやはや、小便おやじのバークが女連中がぶうぶういう口真似をしたり、ブルームの口癖の「だけど、いいですか？」とか、「だけど、そうはいっても」なんていうのを聞くと俺は思わず吹き出しちまったぜ。そうして案の定、困ったことに、いかれぽんちの奴それからというもの、あそこのコウプ・ストリート〔D市南岸のデイム・ストリートから北に、ファウニス・ストリートから東に入る〔訳〕〕の酒屋のパゥア〔酒類卸売商ジョン・T・P・〕のところに入浸って、週に五回も店の置物を残らず平らげて、脚が立たないもんだから辻馬車にのっかってご帰還になるということだ。それこそ幻象だ！

——「勇者を偲んで」、って市民はなあ、ジョッキをさし上げ、ブルームを睨めつけながら。

——偲んで、ってジョウはなあ。

——あなたには僕の真意がわかっていない、ってブルームはなあ。僕のいおうとしているのは、つまり……

——シン・フェーン！　って市民はなあ。シン・フェーン・アウォーン！　われらが親友はかたわらにあり、不倶戴天の敵は前方にある。

〔未完〕

注　解

頁

二五　**煤は縁起がいい（soot's luck）**　英諸島では、道で煙突掃除人に出逢ったとき、三度お辞儀をすると何かいいことがあると信じられている（Edwin and Mona A. Radford: *Encyclopaedia of Superstitions*——"Sweep" の項）〔訳〕

二七　**神のヨハネ病院（John of God's）**　D市南東郊外の町（D市中央郵便局から八キロ）Stillorgan（Ir. Sceaċ Loṙcáin *or* Cuṙ Loṙcáin=Lorcan's〔i. e. St. Laurence O'Toole's〕Church）の Stillorgan Rd. にある聖神のヨハネ精神病院（House of St. John of God）。男性患者専用。もとこの地域の領主 Allen 家の邸宅 Stillorgan House（*or* S. Castle）。一八世紀におけるD市社交界の一中心地。

なお、ポルトガル生れの聖人 St. Joannes de Deo（1495-1550; f.d. 8 March）は一五四〇年に病人のための修道会（看護修士会〔Order of Charity for the Service of the Sick〕または聖神のヨハネ病院修士会〔Ordo Hospitalarius S. Joannis de Deo; Brothers Hospitallers of St. John of God〕という）を創立し、一八八六年教皇によって病院と病人の守護聖人と定められた。聖神のヨハネ精神病院はこの修道会の経営。おそらく一八八六年以降の設立と思われる。〔訳〕

なにか耳新しいことでもないかい？（Anything strange or wonderful...?）　これは聖書によって有名になったアテネ人の特色を示す言葉。パウロが宣教にアテネを訪れたとき、アテネ人はキリスト教の新しい教義に対して好奇心といえるほどの異常な関心を示した——

For thou bringest certain strange things to our ears: we would know therefore what these things mean./(For all the Athenians, and strangers which were there, spent their time in nothing else, but either to tell or to hear some new thing.)

(King James Version——*Acts* 17 : 20-1)

ギリシア劇にこのような問いかけは多い。例えば Σοφοκλῆς（Σοφοκλεης *or* Σοφοκλέης）(i.e. Sophoclēs)（496?—406 B.C.）の Οἰδίπους ἐπὶ Κολωνῷ (i. e. Œdipus at Colonus, prod. 401 B.C.) のオイディプスの台詞 "Τί δ' ἔστι καινόν (=Is there anything new?)" (M. A. Bailly: *Dictionnaire Grec-Français* による) などくの言及。

第七挿話 'KYRIE ELEISON!' の段で展開されるイギリスをローマに、ギリシア（アテネ）を Ir（D）に擬するマックヒュー教授の主張（そういえば大陸の先住民族ケルトを駆逐したのはローマ人であった）、文芸復興運動に関係した文人たちの間でお互の作品をギリシアの文豪になぞらえる傾向（例えば Synge を Aischylos に、George Moore を Aristophanes に）、芸術の域にまで高められたIr人の巧みな話術（文字を持たなかったケルトの伝統でもある）、そして話し好き等、Uの作者ジョイスはもちろんのこと、Ir人と古代ギリシア人とを結ぶ類似点は多い。なお次の「美わしきイニスフェイルに」の注解参照。〔訳〕

二八　**美わしきイニスフェイルに（in Inisfail the fair）** James Clarence Mangan（1803-49）訳の *Prince Aldfrid's Itinerary through Ireland*（原文はIr語）の冒頭の一行から。作者の Prince Aldfrid（Aldfred, Aldfrith, Ealdfrith, *or* Eahfrith, d. 705; King of Northumbria〔685-705〕）は六七一～六年頃（在来の説は六八四年頃）に Flann Fionn（Ir. Fꞟann Fꞟonn=red-haired Flann）（*or* Fland Fina）の名でスコットランド西方の小島 Iona（St. Colmcille〔Ir. Coꞟm Cꞟte=Dove of the Church〕〔Columcille *or* Columba, 521-97; f.d. 9 June〕が五六三～五年頃に "live in exile for Christ" することをモットーに修道院を建てて以来、この島はキリスト教の学問と教育のメッカ兼前進基地になった）に遊学していたアングロ・サクソン人の学生。庶子のために、父王 Oswy（Oswin, Osui, Oswiu, Oswio, Osguid, Osweus, *or* Oswius, 612?—70）の死後いったんはノーサンブリア王国（七世紀の初期から一〇世紀の中葉にいたるまで、イングランド北部の Humber 川以北、スコットランド南部の Firth of Forth 以南の地域を支配していた王国。Dのデイン人（五四頁の「聖なるマイカンに捧げられし邦」の注解参照）の王 Ivar〔*or* Ivarr Beinlausi, d. 873〕が八六七年に征服して以来滅亡まで、代々デイン人の王が両王国を統治していた。上述のアルフリッド王の時代はとくに学芸が栄えたという）の王位を継承したが、腹違いの弟 Ecgfrith（reign 671-85）の迫害に遭い退位を余儀なくされた。アイオウナ島では St. Adamnan（Ir. Aꞟdaꞟmꞟán=dim. of Aꞟdaꞟm）（624?—704; f.d. 23 Sep.）と親しくなり、学者としても名を馳せた。

なお、問題の韻文（一二世紀の作との説あり）の本当の作者はアルフリッド王とは別の人物と考えられている。また最初にこの詩を英訳して *The Dublin Penny Journal.* Vol. I, No. 12（15 Sep., 1832）に発表した John O'Donovan（1809-61）の散文訳とマンガンの韻文訳とを比較してみると、詩の響きとしては後者の方が数段優さっているが、技巧上原詩から逸脱した個所も見受けられる。

例えば第一二聯、二行目の "Slewmargy's peak" は前行の "sleek" との押韻の都合上つけ加えられたものだが、これではマージイ山という特定の名山があるように受取られてしまう。だが実際はここでいう "Slewmargy（Ir. Sꞟaꞟb Mꞟaꞟrge=mountains

of woes——ただし問題の山なみの近くに住んでいた“Uíb Maireg〔=grandsons of Margy〕”という古代の氏族名に由来するとの説もある）とはごくごく平凡な山塊（cf. Slieve〔=Slew〕Bloom Mountains in Co. Leix）を指している。ただそれがLeix (*or* Laois) (Ir. Laoiṡ=the tribe name of the O'Mores *or* O'Moores), Carlow (Ir. Ceatharlach=a quadruple lake), Kilkenny (Ir. Cill Chainnis=the Church of St. Cainnech *or* Canice〔d. 600?; f.d. 11 Oct.〕)三郡の境にあり、また詩にあるように、D市から南東に拡がる広大な平野部を遇る前衛的な山地の南端に位置するという点で、特色があるといえばいえないことはない。

ちなみに、オウドナヴァンの訳ではただ単に“Slewmargy”とだけある。だがその注に“a mountain in the Queen's co. near the river Barrow”とあったために、その後のどのマンガンの詩集も注にこの文字をそのまま採用することになった。このことは逆にいえばこの山塊がどれほど目立たない存在であるかを物語っている。

前置きが長くなったが、あとからも度々引用されるのでここに全文を掲げておく。なおテキストは版によって細い点で相異が見られる。以下は Ed. John Mitchel: *Poems by James Clarence Mangan.* N. Y., 1859 & Ed. Kathleen Hoagland: *1000 Years of Irish Poetry.* N. Y., 1953 に依る。

I found in Innisfail the fair,
In Ireland, while in exile there,
Women of worth, both grave and gay men,
Many clerics and many laymen.

I travelled its fruitful provinces round,
And in every one of the five I found,
Alike in church and in palace hall,
Abundant apparel, and food for all.

Gold and silver I found, and money,

Plenty of wheat and plenty of honey;
I found God's people rich in pity,
Found many a feast and many a city.

I also found in Armagh, the splendid,
Meekness, wisdom, and prudence blended,
Fasting, as Christ hath recommended,
And noble councillors untranscended.

I found in each great church moreo'er,
Whether on island or on shore,
Piety, learning, fond affection,
Holy welcome and kind protection.

I found the good lay monks and brothers
Ever beseeching help for others,
And in their keeping the holy word
Pure as it came from Jesus the Lord.

I found in Munster unfettered of any,
Kings, and queens, and poets a many—
Poets well skilled in music and measure,
Prosperous doings, mirth and pleasure.

I found in Connaught the just, redundance
Of riches, milk in lavish abundance;
Hospitality, vigor, fame,
In Cruachan's land of heroic name.

I found in the country of Connall the glorious,
Bravest heroes, ever victorious;
Fair-complexioned men and warlike,
Ireland's lights, the high, the starlike!

I found in Ulster, from hill to glen,
Hardy warriors, resolute men;
Beauty that bloomed when youth was gone,
And strength transmitted from sire to son.

I found in the noble district of Boyle
(*MS. here illegible.*)
Brehon's, Erenachs, weapons bright,
And horsemen bold and sudden in fight.

I found in Leinster the smooth and sleek,
From Dublin to Slewmargy's peak;
Flourishing pastures, valor, health,
Long-living worthies, commerce, wealth,

I found, besides, from Ara to Glea,
In the broad rich country of Ossorie,
Sweet fruits, good laws for all and each,
Great chess-players, men of truthful speech.

I found in Meath's fair principality,
Virtue, vigor, and hospitality;
Candor, joyfulness, bravery, purity,
Ireland's bulwark and security.

I found strict morals in age and youth,
I found historians recording truth;
The things I sing of in verse unsmooth,
I found them all—I have written sooth.

（アンダライン筆者）

ところでIrの雅名である"Inisfail *or* Innisfail (Ir. Inir Fáil [inif fo:l]=Island of Fáil)"については、Geoffrey Keating (1570?—1645?) がその有名な FORAS FEASA AR ÉIRINN (=A Survey of Irish History) でIrの七番目の名称として触れ、語源についても説明している。すなわち彼によれば、"Fáil"は"Lia (=a large stone) Fáil"に由来し、またこの石はドルイド特有の呪術に長じた神族 Tuaṡa Dé Danann [túxə de: dánən] (=the folk of [the goddess] Dana) が生れ故郷のギリシアからペルシアを経てノルウェイに定住したとき築いた都市のひとつ Fáilias にちなんで名付けたものという。それを彼らはIrに侵入したときに持ち来り、古都 Tara (Ir. Teamhair [=a conspicuous and elevated place in plain, an assembly hill] na [=of the] Ríoṡ [g. of rí, i.e. king]) に据えた。この石はラテン語で"Saxum fatale (=Stone of Destiny) ともいわれ、土王 (Ir. árd-rí=high king) の選出にあたって、それにもっとも相応しい人物が近付くと唸りを立てて承認を与えたという。

現在古都ターラがあった丘には、往時を偲ばせるものとしては簡単な土塁が数個残っているにすぎないが、そのうち最も大きな

Ráth na Ríoṡ (=Royal Enclosure) の中の円形堡塁跡のひとつ Teach Ċormaic (=Cormac's House) の上に立つ St. Patrick 像のそばにある柱石が問題の "Ina Fáil" であるという。

なお "Inir Fáil" の英語式の綴りについては上記のようにふた通りあるが、現在では Thomas Campbell (1777-1844) が長詩 *O'Connor's Child* (1809) で使い、またマンガンが踏襲している "Innisfail" の方が一般的 (cf. *The Lake Isle of Innisfree* by W. B. Yeats)。James Macpherson (1736-96) が有名な *Ossian* (1763) において問題の雅名をおそらく英語として始めて使用したときには、原語に近い "Inisfail" の形を採用した。〔訳〕

聖なるマイカンに捧げられし邦 (the land of holy Michan) St. Michan (Michanus, Mighan, Michee, *or* Mahano, f.d. 25 Aug.) については、聖人伝に関してもっとも権威のある *Acta Sanctorum*, 67 Vols. (1643—) によって実在が否定されている (Vol. 5, p. 3)。しかしながら *Bibliotheca Sanctorum* によれば、一六世紀にD市民の間に同市生れの聖マイカンという Dane (Dan. Daner, ON. Danir, Ir. Ḋánaṁ=a native of Dania or Denmark; a foreigner) 人の司教がいたという伝説が流れていた。この伝説にもとづいて推論すると、この聖人は、Dに住んでいた Ostmen (ON. Austmenn, pl. of Austmaðr 〔=men of the East〕→Eng. sing. Ostman)、すなわちデイン人たちがキリスト教に改宗した一〇～一一世に生まれたことになる (デイン人で記録上最初にキリスト教に改宗した〔九二五年〕のはDおよびノーサンブリア〔四九頁の「美わしきイニスフェイルに」の注解参照〕王 Sitric 〔Sihtric, Sigtryg, Sigtryggr, *or* Sygtryggr, d. 926?〕である。だが彼は間もなく背教し異教徒として死んだ。次にその息子のD王 Olaf 〔Aulaf Cuaran (Ir. Amhlaoibh 〈ON. Anleifr, N. Ólafr=ancestral relic+Cuarán=of 〔the〕 sandal), Olaf Sitricson (=son of Sitric), *or* O. the Red, d. 981?〕が九四三年におなじくブリテン島滞在中に改宗した。そして翌九四四年にDに帰国後、彼に従ってノーサンブリア王国からやって来た修道士たちの力も与って、九四八年頃にはデイン人たちの改宗が実現したという。しかし名著 *The Scandinavian Kingdom of Dublin* の著者 Charles Haliday (1789-1866) によると、この改宗は部分的なもので、一般化するのは一〇四〇年頃と推定している)。しかし彼が司教であった証拠もなく、また司教区を与えられた記録もない (以上はブリュッセルの Société des Bollandistes の Pierre Devos 神父の御教示による。但し割注は別)。

ところで聖マイカン教会 (記録上の言及は一一七八年が最古) は、Richard Stanyhurst (*or* Stanihurst, 1547-1618) が *Raphael Hollingesheds* (=Holinshed 〔d. 1580?〕's) *Cronycle*, Vol. I (1577) のために寄稿したIr部 *Description and Chronicles of Irelande* (i.e. *Irish History*, 1509-47) によれば、一〇九五年ごろに、また *The Book of Obits and Martyrology of the Cathedral Church of the Holy Trinity, commonly called Christ Church, Dublin* によれば、五月一四日に聖マイカンに献堂されたという。こ

のことはキリスト教化したD在住のデイン人が勝手に自分たちの間から聖人を創り出して教会を建てたことを物語っている。

七九五年からIrの沿岸に出没しては掠奪を繰返していた“the Northmen”すなわちViking (ON. Vikingr=vik〔= small crescent formed inlet or creek, less than fiordr (=fiord)〕+-ingr〔=an early masculine ending, meaning *a man of...*〕) (Ir人はデイン人を“Dubhghoill〔Ir. Ďuḃ-ġoill=Black foreigners〕”、ノルウェイ人を“Finnghoill〔Ir. Fiṅn-ġoill=White foreigners〕”といい、彼らを総称して“Gaill〔Ir. Ġaill=n. pl. foreigners〕”と呼んでいた。なおIr語にはヴァイキングに相当する語はない）がいよいよ内陸への侵攻を開始したのは八〇七年であった。そして八一五年以降Irの各地に定住を始め、八五二年になって、Irを制覇したオゥストメンの王Olaf (Aulaff, Aulaf, Aulaiv, Amhlaeibh, Amaleff, *or* Amlevus, d. 870/71) が現在のD市南部に築城を開始し、そこに王国を築いた（オウラフよりも一〇年あるいは二〇年前にすでに築城されていたとの諸説もある）。そのデイン人がLiffey川 (Ir. An〔=the〕 Life) 北岸に村落を形成するようになったのが九四八年頃である（これはSt. Mary's del Ostmanby〔i.e. St. Mary's Abbey〕が建てられたと考えられる年。但し最近は九九八年頃とする説もある）。

その後一〇一四年にBrian Boru (B. Borumha *or* B. Boriomhe〔Ir. Ḃriain Ḃóraimhe〕〔briən bɔ:rivə〕) (926/942-1014) (七〇頁の「キンコラのブリアン」の注解参照) との有名なClontarf (〈prob. Ir. Cluain〔=a meadow〕-cairḃ〔=a bull〕) の戦いにおいて大敗して後は、Dのデイン人はそこを唯一の砦にたびたび復権に努めたが、一〇八八年の遠征を最後にIr諸王の支配下に置かれるようになる。そして一〇九八年頃になるとデイン人たちは続々とリフィ川北岸に移住を開始した。このことはD城主のIr王が異邦人の追放に踏み切ったことを物語っている。

その後幾多の変遷を経て今度は一一六九年にAnglo-Norman人の侵入が開始され、翌一一七〇年九月にDが“Strongbow” Richard FitzGilbert de Clare, 2nd Earl of Pembroke and Strigul (d. 1176) の率いるイギリス軍の手に落ちるや、デイン人の住民の大部分が彼らの王Hasculf Mac Turkill (*or* H. M. Torkil)（一説には捕えられて斬首されたという）とともにOrkney諸島を始め北方の島々に逃げのびた。そして後に残ったデイン人は北岸の一劃（以前村落のあったところ）に閉じ込められ、そこに“Ostmantown”を建設した。後にこの名称はさらに転化して“Oxmantown”になった。

ところでオックスマンタウンが占めていた地域は、東は現在のOld Church St.（現存最古の印刷地図であるJohn Speed (1552?—1629) の一六一〇年の市街図によると、この通りとMary's Laneとがちょうど交わる西側にかなりな敷地をもった聖マイカン教会があった）から西はKing's Hospitalまで、北はNorth King St.の西半分を境とする一劃であったらしい。

また聖マイカン教区が設立された時期については、*Lives of the Irish Saints.* 10 Vols. (1875-1903) の著者John O'Hanlon

(1821-1905) もリフィ川南岸の他の教区と同時代であろうというにすぎない。ではこの時期をある程度まで確定する手だてはないものであろうか？

Ir の守護聖人、修道士 (Monk) St. Patrick (Ir. Pádraic, Pádraic, Pádraig, or Pádraig; in full P. mac Calpraiṁ [=son of Calpurnius]; L. Patricius or Patritius [=patrician], 373/385?—461/463?; f.d. 17 Mar.) が四三二年に Ir 北部 Down (Ir. An Dún [=the fortress]) 郡の Saul (Ir. Sabhall [=a barn] or S. Pádraig [=Patrick's barn]) に上陸して三〇年に及ぶ布教活動を行ってのち、Ir のキリスト教は修道院を主体とし、それがまた教区教会でもあった。つまり当時の修道院、それもとくに大修道院の場合は、それを中核とする村落と考えた方がよく（事実その名の示すように、修道院は修道のために僻地に建てられることが多く、それが現在の都市や村落の発祥になった例も多い）、他国の司教に相当する大修道院長（数個所の修道院を管轄する場合もある。したがって特に "Abbot-Bishop" とも呼ばれる）を頭に、あらゆる職業の出身者から成る修道士の社会が院内に形成され自給自足の生活を営んでいたのである。

元来キリスト教は都市宗教であって、地方の聖堂責任者は都市在住司教の監督下にあり、そこに教権制度が確立していたのであるが、当時の Ir の場合は都市に相当するものはひとつもなく、したがって教権制度も Armagh (Ir. Ard Mhacha [=Macha's height]; cf. Macha=M. of the red hair [i.e. Ir. Macha Mhongruadh], wife of Neinnedh, who founded the palace of Emania [Ir. Eamhain] [=ancient capital of Ulster, now Navan Fort, near Armagh], 300 years before the Christian era) (聖パトリックが教皇 Leo I [390?—461] の認可を得て、四四四年に司教座を置いたところ。彼の孫弟子に当る St. Cormac の時代から "Bishop" を廃して "Abbot" の名称が用いられるようになった) の大修道院長座を頂点とする修道院制度で、それに基づいて各地の世俗的な長ないしは王の干渉を受けることなく、それぞれの村落が一教区として認められていたのである。

なお六世紀から九世紀にかけては、この修道院制度を基盤とする Ir のキリスト教活動の黄金時代で、すでに触れた聖コルムキルを皮切りに、遠くヨーロッパの各地に布教のため雄飛した Ir 人の修道士は、一説にはドイツに一一五人、フランスに四五人、イングランドに四四人、ベルギーに三六人、スコットランドに二五人、イタリアに一五人に及んだという。また一説には東フランスの Luxeuil (-les-Bains) の大修道院（これも Ir 人の St. Columban [L. Columbanus; Ir. Columbán, i.e. colum (or colm) =a dove+bán=white, cf. St. Colm Cille] [540?—615; f.d. 23 Nov.] が建てたもの）を足場に、ドイツのバイエルン地方だけで六二〇名もの宣教師が布教に従事したという。

ところが上王権をめぐる国内の争いに乗じてデイン人の侵略が始まると、ひとつにはキリスト教に対する敵意から、またもうひ

とつには高価な財宝を目当てに、まず各地の大修道院が掠奪の対象に選ばれIrの教権制度は文字通りの潰滅に瀕してしまった。これは物質的な打撃であるばかりでなく、全島民の精神的な荒廃にもつながる問題であった。だが一方においては、商人でもあった彼らは破壊ばかりではなくWexford (Ir. Loċ〔=a lake〕 Ġaṁan〔g. of ġaṁa=a weaver's beam〕), Waterford (Ir. Ꝑoṙt〔=a bank〕 Láṁṡe〔=a thigh, a leg〕), Cork (Ir. Corcaġ〔=a marsh〕), Limerick (Ir. Luiṁneaċ〔="a bare or barren spot of land"〕) といった地理的に恵まれた要地に港町を建設し、すでに述べたように、それまで殆んど存在を知られていなかったDublin (当時のIr人はターラからDを通ってWicklow (Ir. Cill Mantáin=St. Mantan's Church) に向う幹線道路 Ḃóṫaṙna-ġcloċ〔lit. a road of stones; Angli. Stony-batter Rd. cf. text p. 26〕がリフィ川を横切る際の丸木橋の名 Áṫ Cliaṫ〔lit. a hurdle-ford, com. the ford of hurdles〕を取って Ḃaile-Áṫ-Cliaṫ〔=Town of the Hurdleford〕と呼び、またそれと共にPoddle川とリフィ川の合流点にあった入江〔船が停泊する港になっていた〕の名 Ḋuḃ〔=a. black〕 or Ḋuiḃ〔=n. black〕-linn〔=pool〕で呼び、それをデイン人は訛ってDyflin といっていた〕もIrの中心的な都市として誕生するに至った。

このようにデイン人の侵略は海港都市の建設、文化交流等の面でプラスもあるにはあったが、何といっても聖パトリック以来の修道院を主体とする教権制度、ひいてはIr人の精神生活に対する打撃は甚大で、早晩その復興改革は必至の状態にあった。問題をDに限っていえば、その動きはキリスト教に改宗したデイン人の間から起ったのである。

一〇二八年にD王 Sitric MacAulaffe, Silki-Skegg (i.e. OIcel. silk-beard) (d. 1042) がローマへの巡礼を行ったが、これはその頃すでに慣習化していたIr諸候のローマ参りの一例である（現にシトリックは他の王たちと同道であった）。シトリックはこの巡礼行によって本家の教権制度の実状をつぶさに見聞し、教皇との密接な関係のもとに、Dにも司教管区の設立を計画した。すなわち彼は、後の初代D司教 Dunan (or Donat) (d. 1074) と協力して、まずD司教座教会の建設に着手したのである。これが The Church of the Holy Trinity（現在の Christ Church）(founded 1038—42?) であって、その敷地はシトリックによって下賜された。

だが、このようにして確立された司教管区もいわゆる「司教管区制度」(Episcopus Ordinarius; Diocesan Episcopacy) という全国的な組織にもとづくものではなく、ただD城内に限定された組織形態であったという点で例外的な性格を帯びていたことは否定できない。ただいえることは、D司教管区の設立によって特殊ではあるが教区も設定されたと推定し得るということである。

ところで英本島においては、一〇六六年の William I, the Conqueror (1027-87) による「ノルマン人の征服」以来、Canterbury の大司教 Lanfranc (1005?—89) によって国家的な教権制度の確立と、教皇庁直系の教義と典礼の定着化が精力的に進めら

れ、Irもその影響を受けるに至った。すなわち、一〇七二年にランフランク大司教は、自分の司教権が英本島のみならずIrにも及ぶことを主張したが、時あたかもDでは、一〇七四年の初代司教ダナンの死後 Patrick (d. 1084) が第二代の候補に選ばれ、さっそくカンタベリにおもむいて司教敍階式を受け、ここに正式に中央集権的な司教管区制度にもとづくD司教の誕生を見たのである（このカンタベリとDとの逸速い結付きは、英本島のノルマン人とDのデイン人とは民族的に同じであるとの意識が相互に働いたためといわれる）。

以上よりして明かなように、問題の聖マイカン教会の建設が一〇九五年であるとするならば、その教区の設立もとうぜんその頃と考えるのが自然であり、またそれだけの制度的な基盤もすでに確立していたと見てもよいであろう。

なお、すでに述べたように、D在住のオゥストメンにはデンマーク系ばかりでなくノルウェイ系も混じっていたのであるが、彼等はあくまでも少数派であって、大多数がいわゆるデイン人によって占められていた。ところが、教会の建設という点ではその少数派の方が先んじ、一〇三〇年代にはすでに南岸に、ノルウェイの守護聖人 St. Olave (i.e. Olaf Haraldssön; Olaus Olaf II) (995-1030; f.d. 29 July) にちなんで St. Olave Church を建設していた。北岸のデイン人が架空の聖人を創造してまでも自分たちの教会を建設した裏には、この前例に刺激され、後ればせながらその顰に倣った感なきにしもあらずである。〔訳〕

エルバナ (Elbana) 正しくは Eblana (*Ἐβλανα*)。アレキサンドリア生れのギリシアの有名な数学・地理・天文学者 *Κλαυδιος Πτολεμαίος* (i.e. Claudius Ptolemaeus, fl. A. D. 127-48) の八巻から成る *Γεωγραφικὴ Ὑφήγησις* (i.e. *Geography* [lit. map making guide] で言及される、*Ἰουερνία* の部族 *Ἐβλανοι* (*Ἐβδανοι*) の住む Eblana という町はプトレマイオスの地図（といってもIrとは似てもにつかぬ不完全なものではあるが）上の位置から、また北東のやや離れたところにあるとされる島 *Ἀδρου* (*Ἐδρου* or *Ὀδρου*) *ἔρημος* (=desert) がホウス岬（一〇九頁の「ベン・ホウス」の注解参照）を島と間違えたと考えられるところから、普通Dを指すといわれている。

しかし、Thomas Francis O'Rahilly (1883-1953) の高名な *Early Irish History and Mythology* (1946) では、このような地名がIrの古文書にないところから、むしろそれらに見られる Edmann のことだと考え、その位置を Louth (Ir. Lúġdach) 郡南部の中央北部にある Dunleer (Ir. Dún [=a fortress] Léime <Lann [=a church]) の近くと推定している。これはプトレマイオスの地図上の地形とも一致するし、また第一、Dそのものがプトレマイオスの時代には（しかも彼はIrのことを先人の記述にしたがって述べている）あるかないかのちっぽけな集落でしかなかったのだ（五四頁の「聖なるマイカンに捧げられし邦」の注解参照）。

ちなみに、プトレマイオスの記述するIrの地名 *Ἰουερνια* の古形は *Ἰερνη* であって、フランスのマルセーユ（当時のギリシアの植民都市 *Μασσαλία*）在住のギリシア人が貿易商やそのケルト人の隣人から得たものであるといわれている。

なお、Irの地名、国名、雅名の Ireland, Eire, Erin, Hibernia はいずれも同一語源から派生したと考えられる。すなわち *Ἰουερνία*→*Ἰουερνία* (i.e. Hiuernia)→L. Hibernia (cf. *Ἰουερνία*→L. Iverna, Iuverna (Juverna)→Iuberna) となり、また古代ケルト語の *Iveriu の縮約形であるIr語の古形 Ériu (acc. Eirinn, g. Erenn, d. Érinn〔=Erin〕)→later MIr. Eri (nom. & acc.)→OE. Iraland (*or* Yraland) (=the land of Ira〔=Eire〕)→Ireland; Ériu→acc. Eirinn (Ir. Éirinn, g. Éirne)→Éire (g. Éireann) ということになる。ちなみにウェイルズにおける Cymric 語およびフランスのブルターニュ地方の Breton 語では、Ywerddon, Iwerdon, Iverdon といい、またIrの古文書に見られるラテン語形は Hiberio *or* Iberio となっている。そしてその語源的な意味については、一説には Ériu (d. Érinn) <Iarin <Iar (Ir. iaṫ〔=a. remote; western〕)-inis (Ir. inr〔=an island〕) と説明され、また古来の神話的な解釈では、Tuatha Dé Danan（四九頁の「美わしきイニスフェイルに」および一一三頁の「邪眼のバラ」の注解参照）の女王 Eiriu の名に由来するという。〔訳〕

二九　**キアルの子孫の定住地（the place of the race of Kiar）** Kiar（Ciar; Ir. Ciar〔kiər〕〔=a. dark brown; black〕）は、淫乱なコナハトの女王 Medb (Maeve; Ir. Meadb〔mi:v〕)（六九頁の「百戦錬磨のコン」の注解参照）がもと Ulster (Ula〔<Ir. name Uladh〕-ster〔Scan. stadr=a place〕) (Ir. tlaiḋ, Cúige〔=a province〕tlaiḋ) の王で輩下の将軍としてともに戦った Fergus Mac Roy (Ir. Feargus〔<Celt. Vergustus=super-choice〕mac〔=son〕Róis) に生ませた三人兄弟の長兄。彼は後に Munster (Mun〔<Moon〔Moun〕<Ir. Muṁan+ster) (Ir. An〔=the〕Muṁa, Cúige Muṁan) に定住し、その子孫、すなわち Ciarraidhe (Ir. Ciarraiḋe; i.e. Ciar+raiḋe〔=OIr. suff. designating the tribes descended from the man's name of stem〕) (=the race of Ciar) はリマリック郡の南西部、Kerry 郡との境にある Abbeyfeale (Ir. Mainirsin〔=an abbey〕na〔=of the〕Féile〔=of the river Feale <Fial〕) 以西、Shannon 河 (Ir. An〔=the〕tSionna〔<Ptann Sionna, king of Ir.〕) と Tralee (Ir. Tráiṫ〔=a shore, strand〕-lí〔=the river Lee〕) に狭まれた現在のケリ郡北部を領有した。この地方はケリ郡でも比較的山地の少いところ。なお、キアルの子孫の領有地はやがて先述の Ciarraidhe〔kiəri〕の名で呼ばれるようになり、それがさらに拡大されて現在の郡名 Ciarraiḋe〔kiəri〕(i.e. Kerry) になった (P. W. Joyce: *The Origin and History of Irish Names of Places*)。〔訳〕

三〇　**ギャリオウエン（Garryowen）** この地名が世界的に有名になったのは、一七七〇～八〇年頃に作られ、その後国外でも広く歌

われた同名のバラードによる。リマリック市の東郊外に当るこの地区（現在でも街路名として残っている）は、"Owen's（〈Ir. Ó hEoghan=the descendant of Eoghan）garden（Ir. Sanróa; Saanróe in place names〕" の名前が示すようにもと私有地で、それが一般市民の行楽と憩いの場所として利用されるようになり、やがては "Garryowen Boys" の乱暴な悪ふざけによって特徴付けられるに至った。だが、これも歌詞に見られるように一時的なことであって、五〇年後に Gerald Griffin（1803–40）がギャリオウエンを舞台に小説 *The Collegians*（1828）を書いた頃には、この辺は昔以上に荒れ果て、ただ毎年そこで行なわれる市の日にわずかに昔日の喧噪を取戻す程度であったという。

歌詞は現在では Ed. H. Halliday Sparling: *Irish Minstrelsy* に所収のものが一般的なようだが、ここにはそれと多少異なる Thomas Crofton Croker（1798–1854）が *Popular Songs of Ireland*（1839）に収録したものから一番と最後の七番とを引用しておく。但しコーラス部については古形を残すものを同書から併記して引用する。なお注は Croker 自身のもの。またメロディーについては、Burl Ives: *Irish Songs*. N. Y., n. d., pp. 12–3 を参照のこと。

Let Bacchus's sons be not dismayed,
But join with me each jovial blade;
Come booze and sing, and lend your aid
To help me with the chorus:—
Instead of Spa* (*sic*) we'll drink brown ale,
And pay the reckoning on the nail,†
No man for debt shall go to gaol
From Garryowen in glory!
(In Garryowen we'll drink nut-brown ale,
An' score de reckonin' on de nail;
No man for debt shall go to goal
From Garryowen in glory—whu! [*a yell.*])

・　・　・　・　・　・

Garryowen is gone to rack
Since Johnny Connell went to Cork,
Though Darby O'Brien leapt over the dock
In spite of judge and jury.
Instead, &c.

*The Spa (*sic*) of Castle Connell, about six miles from Limerick, was in high repute at the period when this song was written.
† "Paying the reckoning on the nail," was a cant phrase for knocking a man on the head.

次にきわめて興味ある事実であるが、D市の J. J. Giltrap という人が飼っていた有名なアイァリッシュ・セッターがギャリオウェンという名であったことが報告されている。この犬は一八七六年生れだという（*Times Literary Supplement*, Jan. 9, 1964)——cf. "old Giltrap's dog" (U 307/312) & "grandpapa Giltrap's lovely dog Garryowen" (U 346/352).

ところでD市に一九世紀の末にかかる人物が実在したかというと、一八九八～九年現在、モーガン・ブレイス二号（おそらく現在は四法院の構内に吸収）で実際に James J. Giltrap なる人物が公認会計士を開業していたことが記録されている（*Dublin Directory, 1899*)。したがって問題の報告はかなりな信憑性があると見て間違いあるまい。〔訳〕

「あられるゾンミッキ」(**cruiskeen lawn**) これは一八世紀に酒好きなIr人によって作詞され（Stopford Augustus Brooke [1832/29–1916] の説)、Ir語の原詞の面影を残す有名な酒宴の歌 *The Cruiskeen Lawn* (Ir. An Cúirín Lán [an krú:ʃkin lɔ:n] = The Full Little Jug) の題名から。メロディーは一七世紀初期まで溯りうるスコットランドの古謡のIr版（Alfred Moffat [1866–1950] の説)。

Irのバラード集にはよく収録されている歌であり、また版によって歌詞にも多少の相異があるので、ここにはIr詩人による英語の詩華集の花といわれる Stopford A. Brooke & T. W. Rolleston: *A Treasury of Irish Poetry in the English Tongue*. London, 1900 から一番と最後の四番とを引用しておく。なおメロディーについては、Alfred Moffat: *The Minstrelsy of Ire-*

land. Fourth (Enlarged) Ed., pp. 136–7 参照セヨ。

Let the farmer praise his grounds,
Let the huntsman praise his hounds,
  The shepherd his dew-scented lawn;
But I, more blest than they,
Spend each happy night and day
  With my charming little crúiscín lán, lán, lán,
  My charming little crúiscín lán.

Grádh mo chroidhe mo crúiscín,—
Sláinte geal mo mhúirnín.
  Is grádh mo chroidhe a cúilin bán.
Grádh mo chroidhe mo crúiscín,—
Slaínte geal mo mhúirnín,
  Is grádh mo chroidhe a cúilin bán, bán, bán
  Is grádh mo chroidhe a cúilin bán.
(=Love of my heart, my little jug!
  Bright health to my darling!
  And the love of my heart, that fair-haired girl, &c.)

. . . . . .

Then fill your glasses high, . .

Let's not part with lips adry,
Though the lark now proclaims it is dawn;
And since we can't remain,
May we shortly meet again,
To fill another crúiscín lán, lán, lán,
To fill another crúiscín lán.

〔訳〕

肉体的な善業（a corporal work of mercy） 肉体的な善業（Opera misericordiarum corporalium=Corporal works of mercy）には七つある——①飢えた者に食物を与え ②渇いた者に飲物を与え ③裸の者に衣服を与え ④旅人や家のない者に保護を与え ⑤病人を看護し ⑥捕虜を慰問し ⑦死者を手厚く葬ること。いま問題になっているのは最後の善業である。これらは「マタイ」25—三五にもとづく。

なお、肉体的な善業は精神的な善業（Opera misericordiarum spiritualium）に対するものであって、これにも七つある。〔訳〕

義賊（rappareе） このIr語を語源とする語（〈ɾáꞇaиꞇe=a rapier, a short pike & ɾoꞇaиꞇe=a robber or thief, a treacherous or violent person; a rapier）はおなじくIr語を語源とする“tory”（〈tóиꞇaiꞇe=a robber, a highwayman）と並んでよく使われる（Ex. 'An Act for Explaining and Amending Two Several Acts against Tories, Robbers, and Rappareеs,1707'）。

一六四七年に公式にゲリラに対して使われるようになった“tory”は、一六四一年のアルスタの叛乱に見られるように、一六一一年から始まったアルスタ地方の植民の結果、領地を奪われ、しかももとの自分の土地で小作人として働くのをいさぎよしとしない旧地主や、Irの族長たちの護衛兵の残党が、イギリスの権力に対するいま一度の鉄槌を夢見ながら森林や丘陵地帯に立籠って義賊化した者、およびその系統に属する者をさす。

これに対し、一六九〇年ごろから文献に見られるようになる問題の“rappareе”は、名誉革命（一六八八）によってイギリスの王位を追われ、その後フランスからIrに上陸して、そこをイングランド奪還の基地にしようとした James II（1633-1701）と、その野望を阻止しようとする King William III（1650-1702）との間に戦われた一連の戦闘（一六八九—九一）によってゲリラ化したもとの地主や兵士のこと。

なお *The Nation* の編集者として有名な Sir Charles Gavan Duffy（1816-1903）のバラード *The Irish Rappareеs; A Peasant*

Ballad of 1691 は、次代の "rapparee" たちの心意気を詠ったもの。この詩にはふたつの版があるが、以下には *A Treasury of Irish Poetry* に依って作者自身の注と、第1、11聯および最後の第六聯を引用しておく——

(When Limerick was surrendered and the bulk of the Irish army took service with Louis XIV., a multitude of the old soldiers of the Boyne, Aughrim and Limerick, preferred remaining in the country at the risk of fighting for their daily bread; and with them some gentlemen, loath to part from their estates or their sweethearts. The English army and the English law drove them by degrees to the hills, where they were long a terror to the new and old settlers from England, and a secret pride and comfort to the trampled peasantry, who loved them even for their excesses. It was all they had left to take pride in.)

Righ Shemus* he has gone to France and left his crown behind:—
Ill-luck be theirs, both day and night, put runnin' in his mind!
Lord Lucan† followed after, with his slashers brave and true,
And now the doleful *keen* is raised—'What will poor Ireland do?
'What must poor Ireland do?
Our luck, they say, has gone to France. What *can* poor Ireland do?'
Oh, never fear for Ireland, for she has so'gers still,
For Remy's boys are in the wood, and Rory's on the hill;
And never had poor Ireland more loyal hearts than these—
May God be kind and good to them, the faithful Rapparees!
The fearless Rapparees!

. . . . . .

Now, Sassenach and Cromweller, take heed of what I say—

Keep down your black and angry looks that scorn us night and day;
For there's a just and wrathful Judge that every action sees,
And He'll make strong, to right our wrong, the faithful Rapparees!
The fearless Rapparees!
The men that rode at Sarsfield's side, the changeless Rapparees!

*Ríġ Seamur (=King James)=James II. †Patrick Sarsfield, Earl of Lucan.

〔訳〕

ロリ山の山 (Rory of the hill) これは Charles Joseph Kickham (1828-82) が *The Celt*, Nov. 28, 1857 に発表したバラード *Roy of the Hill* の題名およびその主人公の名。ここには主人公が武術に励む第五聯と、最後の第七聯を引用しておく——

Next day the ashen handle
He took down from where it hung,
The toothed rake, full scornfully,
Into the fire he flung;
And in its stead a shining blade
Is gleaming once again—
(Oh! for a hundred thousand of
Such weapons and such men!)
Right soldierly he wielded it,
And—going through his drill—
'Attention'—'charge'—'front, point'—'advance
Cried Rory of the Hill.

・　・　・　・　・　・

Oh! knowledge is a wondrous power,
And stronger than the wind;
And thrones shall fall, and despots bow,
Before the might of mind;
The poet and the orator
The heart of man can sway,
And would to the kind heavens
That Wolfe Tone were here today!
Yet trust me, friends, dear Ireland's strength—
Her truest strength—is still
The rough-and-ready roving boys,
Like Rory of the Hill.

なお、E. C. Brewer (1810-97) によれば、この "Rory of the Hill" は一八八〇年にIrの地主、地主に地代を払った小作人、収奪された小作人の土地を取得した者等に出された脅迫状 (Irish National Land League の認可のもとに) の筆者が署名として用いたという (*The Reader's Handbook*, 1898——'Rory o' the Hill')——これは詳しくは "Rory of the Hill, Who always warns before he kills." とも書いたらしい。

一八七九～八一年にかけては土地問題が沸騰した時期である。Michael Davitt (1846-1906) を首唱者とする the Land League of Mayo (19 Apr., 1879) が Charles Stewart Parnell (1846-91) を委員長とする the National Land League of Ireland (*or* Irish National Land League) (21 Oct., 1879) (八〇頁の「月光隊長」の注解参照) に発展解消。翌年九月一九日にはパーネルが民衆にむかって始めてボイコット戦術を提唱、その三日後、さっそく Captain Boycott (八一頁の「ボイコット大尉」の注解参照) が槍玉第一号に挙った。この事件の後脅迫状も戦術として採用されたのであろう。しかもこの書状には効果を高めるために、棺桶、骸骨、匕首などが画き込まれていた。〔訳〕

三一　「マカナスピイにおなじ」(**Ditto MacAnaspey**)　Irにおいてはアントニオとクレオパトラの情事に匹敵するほどの政治的に重

大な結果をもたらした、チャールズ・ステュアト・パーネル と Katherine（"Kitty") O'Shea (1846-1921) との不倫の仲が発覚したのを機に国論を二分したいわゆる "Parnell Split"（一八九〇—一）のときに、Mac-An-aspey（普通は "MacAnaspie" と書く。非常に珍しい姓でIrの Tyrone (Ir. Tír Eoġain=Owen's territory) 郡にしかない。時に Easpig, Aspig と省略され、また英語に訳して Bishop の形で使われる。語源的には mac an earpuig=son of the bishop で、Bishop も同じだが、宗教劇や仮装行列の役者あるいは参加者に付けられた綽名が起り。もっともイギリスの苗字学者は "Bishop" をIr名とは関係づけない）という人物が大衆の面前でパーネル擁護（反カトリック教会）の長広舌をふるった。そのために後から立った者は仕方なしにただひと言、「マカナスピイにおなじ」といったという。〔訳〕

「涙と笑いと」…「眼」(**the eyes in which a tear and a smile...**) これは Thomas Moore (1779-1852) の歌集 *Irish Melodies*, No. 1 (1808) 所収の *Erin! the Tear and the Smile in thine Eyes*（Ir語の原詩からの翻訳という）からの引用。第1聯は——

Erin, the tear and the smile in thine eyes,
Blend like the rainbow that hangs in thy skies!
Shining through sorrow's stream,
Saddening through pleasure's beam,
Thy suns with doubtful gleam,
Weep while they rise.

〔訳〕

三二 クーフリン (**Cuchulin**) *or* Cuchulain (Ir. Cú Ċulann=Hound of Culann)。Irの二大英雄叙事詩群のひとつ the cycle of Conor Mac Nessa and his Red Branch Knights に登場するアルスタ最大の英雄。アルスタ王 Conchobar (*or* Conchubar) (Ir. Conċubar) (i.e. Conor Mac Nessa) の妹 Dechtire (Ir. Deċtire) の息子。彼の実父は太陽神 Lug (*or* Lugh) of the Long Arm (*or* Hand) (Ir. Lug Lámfada) であった。

七歳のとき家を飛び出して、養父コナホル王のもとで武人としての修行を重ねる。一二歳のとき有名な鍛冶職人 Culann (Ir. Culann) の獰猛な番犬に襲われ、それを殺して以来クーフリンの名で呼ばれるようになる。

彼は超常的な力の持主で、逆上すると風船みたいに膨張してヒステリー弓状の身体曲反を起し、異常な高熱を放射するという。あるときこの発作に襲われた彼は、一頭の野生の牡鹿をつかまえて戦車のうしろに縛りつけ、同様に捕えてきた白鳥の群にそれを曳かせるとともに、右手には血のしたたる首級三個を、左手は侮蔑の mano-fica (i. e. 'fig'=a contemptuous gesture made by thrusting the thumb forth from between the first two fingers; pudendum muliebre) (一一三頁の「邪眼のバラル」の注解参照) に、ある王の居城にやって来て大音声で挑戦した。これを見た王は彼の怒張を鎮めるために、真裸の后と女官たちを遣わし、彼女らに冷水を入れた大桶を持たせてやった。すると、"The vast burst asunder about him. They thrust him into another vat and it boiled with bubbles the size of fists. He was placed at last in a third vat and he warmed it till its heat and cold were equal." という。

クーフリンのもっとも名高い武勇は二〇の物語群から成るヨーロッパ最古の叙事詩 Táin bó Cúalnge [tɔːn bɔː kúelnə] (=The Cualnge Cattle-raid or The Cattle Raid of Cooley) に詳しい。それによると、アルスタと他のIrの四邦との間で争われた長年にわたる血腥い戦闘は、腹黒いコナハトの女王ミーヴ (五九頁の「キアルの子孫の定住地」の注解参照) が数々の魔力を持ったクエルネの褐色の牡牛 (i.e. an Donn Cúalnge) を手に入れようと画策したのが原因である。彼女は、アルスタのひとびとが女神 Macha (Ir. Maċa) を冒瀆した罰として周期的に罹る麻痺性衰弱の時期を選んで攻撃を開始する。神を父とするクーフリンはただひとりこの呪いを免れ、三ケ月の間独力で敵の大群を相手に奮戦する。ミーヴは遂には牡牛を捕えるが、クーフリンは体力を恢復したコナホル王を始めとするアルスタの勇者たちの加勢を得て、コナハト軍を国外に駆逐する。

だがさしものクーフリンの命運も数年の後には尽きるときがくる。すなわち、どこまでも執拗なミーヴは彼によって殺された三人の王の息子たちを呼集め、弔い合戦の奸計を種々協議する。彼女は三人の魔女に命じて様々な幻覚でクーフリンを惑し、彼をひとり Plain of Muirthemne (Ir. Mas Muirṫeimne) におびき出して、犬の肉を食べてはならないというのにそのタブーをついに破らしてしまう。かてて加えてコナハトの三人の宮廷道化師が彼をまんまと計略にのせて、有名な the spear of Bulga (Ir. in sa(i) bulga [bolsa or boilg]) を含む三本の魔槍を奪取る。

かくて有形無形のすべての魔力に見離され、満身創痍になったクーフリンに最後の一撃が加えられる。胸からは血潮が吹上げ、もはやこれまでと悟った彼は腰帯で石柱に自らを括りつけ、弁慶の立往生そのままの姿で死ぬ。やがて一羽の大鴉が頭上に舞降り、この悲劇の英雄の両眼を喰いちぎる。彼を恐れて容易に近付けなかった王の息子たちもやっと安堵し、当時の習慣に従って首級を挙げる。高らかに轟く勝鬨三度。そのときひとりでに鞘を離れたクーフリンの剣が敵の右手を斬落す。

なお、Irのアキレウスともいうべき問題のクーフリンおよびコナホル王を歴史的な実在の人物とする説がある。それによれば彼等は紀元前五〇〇年頃に活躍した人物と推定される。だが概して神話学者はこの説を否定して、英雄叙事詩の神話的な側面を強調する。彼らによれば、Irの神話英雄伝説はインド＝ヨーロッパ時代に起源を置き、その後Irで独自の発展を遂げたものと考えている。〔訳〕

百戦錬磨のコン（Conn of hundred battles） （Ir. Conn Céadcathach〔＝lit. C., hundred-battled〕）*or* Conn the Hundred-fighter（reign 123–57, d. 157）。Ir最初の上王。早くからライヴァルの Mogh Nuadhat（*or* Nuadat）（Ir. Mhoghnuadhat）*or* M. Eogan（Ir. Eoghan）とマンスタの覇権を争い、一〇回戦いに破れてのちIrを二分し、Dと Galway（Ir. Gallmhí〈Gallt＝g. of Gall〔＝a foreigner〕）とを結ぶ、氷河の残した一聯の砂丘Esker（*or* Escir）Riada（Ir. Eiscir Riadha）を境界線としてコンは北半分を、モウは南半分を領有した（現在でもIrの北半分を"Leath Chuinn〔＝Conn's half〕"、南半分を"Leath Mhogha〔＝Mogh's half〕"という）。しかし翌年の Magh Leana（現在の Co. Offaly〔Ir. Ó Faoilghe＝the descendant of Failghe（＝O Connor Faly）〕）の中央部、Tullamore〔Ir. An Tulach Mhór＝the main hill〕のある教区 Kilbridge のことだという）の戦いで遂に宿敵を斃して後は、次第にIrの全土に支配力を及ぼしていった。

なお、現在の Prov. Connacht（〈Connachta〔Ir. Connachtha＝Conn-iochta, i.e. lit. Conn-descendants〕）はこのコンの名に由来する。元来Ir中部に居を構えていたコン族が一部西方の、現在コナハトと呼ばれている地方に進出し、彼らをコナハタと呼ぶようになった結果、その地方の名称として新たに採用されたもの。コン族の名称としてはほかに Dál Cuinn（Ir. Dál Chuinn＝the Race of Conn）というのもある。またコンの事績については、一一〇回戦った祖父の Tuathal Techtmar（*or* T. Teachtmhar）（Ir. Tuathal Teachtmhar〔＝a. legitimate〕）との混同が見られるとの説（Thomas F. O'Rahilly）がある。〔訳〕

九人の人質のニアル（Niall of nine hostages） （Ir. Naill Naoighiallach〔nēl nīvielə〕, d. 405）。この上王（reign 379–405）はコン族中最大の王であったといわれる。彼の治世における三つの大きな出来事は、①Irの統一、②ブリテン島におけるローマ帝国の支配力の低下と荒廃、③聖パトリック（五四頁の「聖なるマイカンに捧げられし邦」の注解参照）との奇縁、である。

ニアルは国内ばかりでなく国外（四〇五年に Gaul で暗殺された）にもたびたび兵を進め、国内の五邦から一名ずつ五人、Alba（Ir. Alba）、すなわちスコットランドの諸候の子弟を四名人質として取上げていたので上の如き綽名が付いたといわれている。また四〇一年頃のブリテン島遠征の折に本国に連れて来た捕虜の中に後の聖パトリックが混じっていたといわれる。彼は六年後にブリテン島に逃れ、その後ゴールの Autissiodurum（i.e. Auxerre, 64.4 km. SW of Troyes, Yonne dept.）でキリスト教の学問

と修行をおさめ、四三二年に今度は司教として布教のために運命の地Irを訪れることになる。

なお現在の O'Neill 家は、前注のコン王以来一〇二二年まで上王座を独占したコン族の主流 Ui (g. pl. of ó〔=a descendant〕) Néill (=g. of Niall) を祖とする名門。〔訳〕

キンコラのブリアン (Brian of Kincora) ゴールウェイ、Tipperary (Ir. Cíobraid Árann=the well of Ara), Clare (Ir. An Clár=the plain) 三郡に跨る Derg 湖 (Ir. Loch Deirgdeirc="the lake of the red eye" の南端、クレア郡側の町 Killaloe (Ir. Cill Dalua=the Church of St. Dalua) の北一・六キロ、シャノン川の西岸にDéal (=a river-mouth) Brúnna と呼ばれる場所がある。ここはもと Kincora (Ir. Ceann〔=a head〕 Córad〔=g. of corad, i.e. a weir], com. weir-head) の名で知られ、湖から下ってくる魚を取るためのかなり大きな堰があったことを示している。Brian Boru (Ir. Brian〔cf. brián=dim. of brí, i.e. a hill〕 Bóruma〔=g. of Bóruma)) (Ir王たちがずっと昔から四〇代にわたって罰として Leinster (Lein〔<Laighin〕-ster) (Ir. Laigin〔<laigne teachan-glaran=spears with broad greenish blue heads] or Cúige Laigean) 王から取立て続け、一時中止したことはあったが上王になったブリアンによってまた復活した一年置きの年貢も "Bóruma〔=cow-tribute〕" と呼ばれた) (五四頁の「聖なるマイカンに捧げられし邦」の注解参照) の居城はここにあった。だが現在では昔を偲ばせるものはほとんどなく、ただ円い土塁と二、三の石があるだけという。

ブリアンが生れた頃はすでにデイン人によって父祖伝来の領土の大部分が奪われていた。したがって彼の将来はその失地回復のための戦いによって特徴付けられることになる。九七六年に兄の Mahon (Ir. Mathgamain) が暗殺されてのち直ちに Thomond (Ir. Tuaid〔<tuaid=north〕 Muma〔=Munster〕) の王位に就き、九七八年にはマンスタ全域の王になる。九八四年から一〇年間は上王 Malachy (次の注解参照) との訌争に終始していたが、間もなくデイン人の活動を黙視し得ず両者が協力して共通の敵に当ることになり、九九九年にウィクロウ郡の Glenmara (Ir. Gleann〔=a glen〕 Máma) (郡北西部の Dunlavin〔Ir. Dún (=fortress) Leamain〕 の近く) の戦いで、Dのデイン軍と Mailmora or Maelmora (Ir. Maolmórda) の率いるレンスタ軍との聯合軍を撃滅するや、ブリアンはそのままDに軍を進めそこに司令部を置いた。だが情婦で後の妻 Gormlaith, Gormflath, or Kormlada (Ir. Gormlaith—メイルモーリアの妹で後出のシトリックの母親) の要請を容れて、二ケ月後にはデイン人の Sitric of the Silken Beard (d. 1029) をD王 (989-1029) として承認し全軍が引揚げてしまった。

かくて婚姻を通じて味方に引入れたDのデイン軍とレンスタ軍の加勢を得て、一〇〇二年にはターラに兵を進めて上王マラキに譲位を迫り、ついにブリアンが上王座に就くと共に六世紀間続いた Ui Neill 家 (前の注解参照) の王統も中断することになる

（ブリアンの死後、マラキは上王座に復帰する。だがそれも彼一代限り）。

上王ブリアンはなおもIr全土に兵を進めて統一を図ると同時に、デイン人によって荒廃した国土の再建に着手し、教会や修道院の復興を始め、法制や教育や土木や産業の育成に尽力した。お蔭でブリアンの治世は類例がないほどの文化的な繁栄を享受したという。

だが、この平和も何時までも続くわけではなかった。またしても夫と別れた絶世の美女、奸婦ワルムライヒの教唆もあって、メイルモーリアとシトリックの率いる聯合軍の蠢動が各地から伝えられるようになる。遂に意を決したブリアンは一〇一三年、先ずレンスタを撃ち、次いでDの包囲に向う。だが、さすがにDは要塞堅固でなかなか落城せず、世紀の決戦は翌年に持越される。

かくてIr全土はもちろんのこと、イングランド、マン島、オークニ諸島のデイン人までが加勢したデイン聯合軍と、マラキ軍を含む一族を挙げての王統軍とが一〇一四年四月二三日の聖金曜日にD城外のクロンターフで雌雄を決することになった。結果はデイン軍の潰滅的な敗北に終ったのだが、同時にブリアンもゲリラ化したデイン軍の将 Broder *or* Brodir の捨身の攻撃を受けて落命してしまった。彼の遺骸は遺言により聖パトリック縁の地アーマー（五四頁の「聖なるマイカンに捧げらし邦」の注解参照）に葬られた。〔訳〕

上王マラキ（the Ardri Malachi）（Ir. Maoilseachlann〔mwi:lsaxlin〕, d. 1023）。九七八年に名目だけの上王権を継承した。その後シトリック（前の注解参照）の妹 Maelmaire と結婚し、また彼の母は連合いの死後ノルウェイ王 Olaf Trygvesson（*or* Olaus Trygvason, 969–1000）と再婚した。九八四年から一〇年間は、前述のごとく、ブリアンその他の族長との訌争に明け暮れていたが、結局ブリアンと協力してデイン軍に当ることになり、九九九年の勝利、次いで一〇〇二年にはブリアンへの上王座の譲渡、その後は不服ながらもブリアン配下の Meath（Ir. An Mhóe〔=the central area〕）の王として上王のIr平定策に協力せざるを得なかった。

一〇一四年のブリアンの死後上王座に復帰し、以後九年間は教会や学校を建設もしたが、デイン人に睨みを利かすと共に国内の諸侯に対する苛烈な攻撃に終始したようである。〔訳〕

アート・マクマロウ（Art MacMurragh） 正しくは Art MacMurrough（*or* MacMurchad 'Kavanagh'〔Ir. Aρτ Mac Muιčadα 'Caománać']，1357–1417）。父の死後レンスタ王（一三七七—一四一七）になる。彼は気前のよさと知識と騎士道精神に富み、教会や修道院のために寄付と援助を惜しまなかった。一三九〇年ごろ Elizabeth Le（*or* De）Veel と結婚してその領地の保有を主張したが、Dのイングランド政府はマクマロウが王の主要な敵であるとの理由から認めず、それに腹を立てたマクマロウが

盛んに近隣のイングランド人の権益を犯したので、それが一因となって一三九四年のリチャード二世（一三六七—一四〇〇）の遠征となる。だがリチャード二世軍もマクマロウ軍に手古摺り、結局妥協せざるを得なくなり、問題の領地の保有も認めることになる。

その後も蠢動を続けるマクマロウを制圧するために、一三九九年にはリチャードの再度の遠征が行なわれる。だが今度もはかばかしい戦果が得られない中に帰国せざるを得なくなる。しかもこの遠征中、彼は Lancaster 家のヘンリ四世（一三六七—一四一三）に王位を奪われ、翌年悲劇的な最後を遂げた。

その後もマクマロウはイングランド軍に抵抗を続け、一四〇八年にはD城攻略を志したほどの勢力を保っていた。彼の死は一婦人の毒殺によるという。〔訳〕

ショーン・オウニール（Shane O'Neill）（Ir. Seán Ó Neill, 1530?—67）。イギリスの絶対王制に反抗したIr最後の偉大な族長。彼の一生はアルスタにおける覇権獲得のための権謀術数によって彩られている。

一五五九年にイギリスの法律を無視してティロウン伯位を襲って以来、イギリス政府を相手に硬軟両面から巧みに立ち廻り、その間をついてアルスタの他の有力な部族 Tirconnell（Ir. Tír〔=a district〕Conaill〔=of Conall, the ancestor of the O'Donnells in Co. Donegal〕）のO'Donnell 家とスコットランドからの移住者 MacDonnell 家をあるいは制圧し、あるいは懐柔して自己の配下に置き、事実上のアルスタ王として君臨するにいたった。

しかしながら優柔不断なエリザベス女王に対して表面では相変らず随順を装いながらも、信仰を同じくするフランス王シャルル九世（一五五〇—七四）と意を通じて蠢動を繰返すに及び、一五六六年遂に女王も黙視し得ずショーンの討伐を開始した。

これに対し、予てからその権勢と横暴を憎んでいた配下の族長たちが相次いで叛旗を翻し、いまや孤立無援に陥ったショーン軍は次第に勝運にも見放されて、一五六七年五月には仇敵オッドヌルに大敗を喫し、最後の救いを求めたマクドネルにも裏切られて波瀾の生涯を閉じることになる。

かくして天然の要害に拠って永らく護られていたアルスタも、ついにイギリスの軍門に降るにいたった。〔訳〕

ジョン・マーフィ神父（Father John Murphy）（1753?—98）。一七九八年の武装蜂起の際に勇名を轟かせたウェクスフォードの土民軍の指導者のひとり。ウェクスフォード郡の Tincurry（Ir. Tiġ-na-cuipnać=the house of the marsh）で生れ、スペインの Sevilla の神学校で教育を受け、一七八五年に帰国、ウェクスフォード郡中部の Boulavogue（Boolavogue *or* Boleyvogue〔〈Ir. buaile="a temporary settlement in the grassy uplands where the people of the adjacent lowland village lived

during the summer with their cattle, and milked them and made butter, returning in autumn—cattle and all—to their lowland farms to take up the crops" (P.W. Joyce)) 教区の司祭になる。

秘密結社化した United Irishmen の活動に刺戟された政府軍の暴虐に耐えかねて、一七九八年五月二七日ついに農民軍を率いて立上った。Oulart (Ir. Ubaltsortc <abaltsortc=an orchard) Hill の戦いでイギリス軍を破り、余勢を駆って Enniscorthy (Ir. Inis [=anisland] Corthe [=a stone, esp. a memorial stone]) を占領、近くの Vinegar (<Feenagare <Fidh-na-gcaer ="hill of the berries" [P. W. Joyce]) Hill に立籠った。だが圧倒的な兵力と近代的な装備を誇るイギリス軍には抗し得ず、しだいに劣勢に立たされ、遂に六月二一日の戦闘でヴィニガ・ヒルが陥落、次いで Kilcommey (Ir. Cill Connairo=lit. a church of wood) Hill の戦いでも敗退して逃げのびる途中を捕えられ、六月二六日に Tullow (Ir. Tulach Ó bFiaróilmrò=the hill of the territory of Hy Felimy) で処刑された。〔訳〕

オウエン・ロウ (Owen Roe) O. R. O'Neill (1590?—1649)。Ir に生れ、一六〇七年のいわゆる "the flight of the earls" のときに伯父の Hugh O'Neill, 2nd Earl of Tyrone (1540?—1616) とともに大陸に移住。ベルギーの Louvain で教育を受け、その後スペイン領ネーデルランドでスペイン軍の指揮官として活躍する。

一六四一年一〇月末に Ir で起った暴動は北部アルスタから Ir の全土に拡がる勢いを見せ、いまや土着の Ir 人とアングロ・アイァリッシュから成る王党派カトリック勢力と、イギリスのピューリタン議会およびその支持勢力との全面的な衝突の様相を呈するにいたった。これはカトリック側からすれば収奪地奪回作戦ともいうべきもので、根源はエリザベス朝以来の度重なる植民にあった。

一六四二年六月、オゥニールは北アイルランドからの要請を容れて、一族郎党を引率れ、ヨーロッパ各国からの武器弾薬、援助物資のかずかずを何杯もの舟に積んで帰国し、アルスタの最高指揮官になる。そして同年一〇月二四日にカトリック側中央政府が首都キルケニに召集した総会の決議 ("the Confederation of Kilkenny") にしたがって、改めてアルスタ方面軍最高指令官に任命される。

一方ピューリタン国教徒側も、一六四二年四月、歴戦と勇猛をもって聞える Robert Monro (d. 1680?) 将軍の率いる二、五〇〇のスコットランド増援軍をアルスタに送込む。オゥニールは翌一六四三年五月、このマンロウ軍とはじめて対峙し、その野望を打砕く。その後も転戦連勝、敵の拠点をつぎつぎに陥れ同盟軍のために気を吐いたが、同年九月一五日に国教徒＝王党派の James Butler, 1st Duke of Ormond (1610-88) と同盟政府との間に締結された停戦条約によって気勢をそがれることになる。

一六四五年一〇月、ローマ教皇使節 Giovanni Battista Rinuccini (1592-1653) がフランス王からの軍資金と武器をたずさえてIrに到着、オゥニールと意を通じて、カトリック教徒の全面的な解放までは徹底抗戦の決意をする。かくして一六四六年六月五日、リヌツィーニの意を体したオゥニールのアルスタ軍は、アーマー北西のティロウン郡 Benburb (Ir. Ḃeann Ḃoṁb=a proud peak) においてマンロウ軍を相手に一大戦闘を繰りひろげ、敵に大打撃を与えた。

この大勝利は同盟内におけるオゥニールおよびリヌツィーニの勢力を増大せしめたが、いっぽう内紛も絶えず、例えばその後のD城攻略作戦も同盟軍内部の分裂が原因で失敗に帰してしまう。また一六四九年二月に主戦論者リヌツィーニがIrを去ることになったのも、実はこの内紛による孤立化が原因であったのだ。

かかる間にもイギリス本国では議会側のピューリタン革命が成功して、一六四九年一月のチャールズ一世（一六〇〇—四九）の処刑とともに共和国が誕生したが、このことがかえってIrにおける王党派の団結を促し、オゥニールもオーマンド公と運命をともにすることになる。

一六四九年八月末、スコットランドおよび大陸の反革命勢力の機先を制して、新Ir総督 Oliver Cromwell (1599-1658) が一二、〇〇〇の大軍を率いてDに上陸し、一六四一年の暴動の弔い合戦を開始するや、オゥニールはオーマンド軍の支援に六、〇〇〇名の部隊を派遣し、自らも急遽南進を開始したが、Londonderry(London-derry〔=Ir. Doire=an oak-wood]; Ir. Doire Calgaigh=the oak-wood of Calgach〔="a man's name common among the ancient Irish, signifying 'fierce warrior'"], now Doire Choimcille=the oak-wood of St. Colmcille) で持病の痛風に襲われ、その後は病状悪化の一途をたどって、同年一一月六日 Cavan (Ir. An Cabán=the hollow place) 郡の Cloughoughter (Ir. Cloċ Uaċtair=lit. stone-top) 城で死んだ（最後は毒殺されたとの説もある）。〔訳〕

パトリック・サースフィールド (Patrick Sarsfield) (1650?-93)。D郡 Lucan (Ir. Leaṁcan="land producing marsh mallows"〔P. W. Joyce]) 生れの軍人。兄 William との関係で近衛騎兵連隊将校になり、James Fitzroy Scott, Duke of Monmouth (1649-85) のもとで大陸に従軍。一六八八年の名誉革命によって王位を追われフランスに逃れたジェイムズ二世（在位一六八五—八）に従ってフランスへ渡る。新王ウィリアム三世（在位一六八九—一七〇二）を否認し、Irを Jacobite（ジェイムズ派）の基地にしようと考えた Richard Talbot, Earl of Tyrconnell (1630-91) の招きに応じて一六八九年にジェイムズ二世とともに帰国。Athlone (Ir. Áth Luain〔=the ford of Luan]) 、ゴールウェイの戦いで立続けに勝ち、コナハト地方を制圧。だがカトリックのジェイムズ=フランス連合軍とウィリアムのイギリス軍とが雌雄を決した一六九〇年七月一日の Boyne 河 (Ir. An

Bóinn=the Boinn, Irish goddess) の戦いに敗れてのちは市民軍を中心にリマリック城に立籠る。

八月一一日、リマリック南東の Ballyneety (Ir. Baile an Ṁaoirís〔=the town of the Whites)) においてウィリアム軍の攻城砲兵中隊を奇襲、未然に潰滅的な打撃を与える。八月末イギリス軍はいったん攻囲を解く。一六九一年、フランスにあったティアコヌル伯が帰国し、サースフィールドにジェイムズ二世よりの授爵 (Earl of Lucan, etc.) を伝達する。同年七月一日、ゴールウェイ郡の Aughrim (Ir. Eaċdṫuim=a horse-hill) において Louis XIV (reign 1643–1715) によって派遣された St. Ruth (d. 1691) のもとに副司令官として戦ったが、司令官の戦死により士気沮喪、けっきょく敗北。その後ゴールウェイ、Sligo (orig. the name of the river; Ir. Sligeach〔=a shell〕+ach〔=full of〕, i.e. "shelly river"〔P. W. Joyce〕) を失い、リマリックを最後の砦に実質的な防衛の責任を担う。

一六九一年八月二五日、圧倒的な兵力と火器を誇る Godert van Ginkel, 1st Earl of Athlone (1630–1703) のリマリック城攻囲始まる。ティアコヌル伯戦死、続いて司令官 François D'Usson (d. 1714) のもとに最後の抵抗を試みた市民軍を中核とする愛仏聯合軍も九月一七日完全に敗北。一〇月三日リマリック条約調印。発効と同時にウィリアム三世への忠誠を拒否した、サースフィールドを含む一九、〇五七名の愛仏軍がフランスへ渡った（六三頁の「義賊」の注解参照）。

フランスではIr軍団編成とともにIr親衛隊第二騎兵中隊長に任ぜられ、一六九二年二月、ベルギーの Steenkerque (30 km. SW of Brussels〔i.e. Bruxelles〕) における François Henri de Montmorenci-Bouteville, Duc de Luxembourg (1628–95) 元帥麾下のフランス軍とウィリアム三世軍との戦闘において赫々たる勲功を樹てる。翌年三月陸軍少将。七月一九日、ベルギーの Landen (50 km. E of Brussels) における戦闘において重傷を受け、おなじく Huy で波瀾に富んだ生涯を閉じた。〔訳〕

レッド・ヒュー・オウドヌル (Red Hugh O'Donnell) "Red Hugh (Ir. Aodh〔=Hugh〕Ruadh〔=red, red-haired〕" Hugh Roe O., Lord of Tyrconnell (1571?–1602)。Donegal (Ir. Dún na nGall〔=the fortress of the foreigners〕) 郡に生る。*Annals of the Four Masters* (i.e. *Annals of Dunagall*) (1632–6) によれば、母親は the mother of the Machabees, "joining a man's heart to woman's thought" (2 *Machabees* 7:21) (八八頁の「マカベア人の母親」の注解参照) の如き気丈な賢婦で、彼の将来はこの母の訓育によるところが大きいという。一五八七年、国王代理 Sir John Perrot (1527?–92) によって人質として捕えられ、D城に幽閉。このことがますます彼の反英感情を鞏固なものにする。一五九一年一二月脱出に成功、途中九死に一生を得て帰城。翌九二年オッドヌル家を継ぐ。一五九四年ついに出動を決意し、血縁の Hugh Maguire, Lord of Fermanagh (d. 1600) を助けて Enniskillen (Ir. Inis Ceithleann〔=Cethlenn's island; Cethlenn=Balor's wife〕) を陥れる。翌九五年に

はショーン（七二頁の「ショーン・オゥニール」の注解参照）の甥 Hugh 'O'Neill', 2nd Earl of Tyrone (1540?-1616) も叛乱に参加、勢いを得たレッド・ヒューはコナハトを席巻。一五九七年七月自領に侵入した政府軍を撃滅。そして翌九八年八月アーマー市の北、Callan (Ir. An Ċalann) 河畔の Yellow Ford において、Sir Henry Bagnel (1556-98) の率いる四、〇〇〇の政府軍をオゥニール軍とともに撃破、大勝利を得る。

この勝利の影響はIr全土に及び、各地の族長が北部の呼掛けに応じてつぎつぎに挙兵した。イギリス政府も事態の重大さに鑑み、いままでにない兵員と資金を投入。一六〇〇年に Charles Blount, Earl of Devonshire, 8th Lord of Mountjoy (1563-1606) が乗込むや形勢は逆転、北部族長聯合軍は次第に追詰められていった。

一六〇一年九月、Don Juan d'Aquila 麾下のスペイン艦隊が四、〇〇〇の兵員を乗せてコーク郡 Kinsale (Ir. Ceann〔=a head; an end〕 Sáile〔=sea-water〕; i.e. the head of the brine) に到着、だが忽ち政府軍に包囲される。この報に接した北部聯合軍は直ちに南進、一二月下旬キンセイルの近くに陣営を設け、スペイン軍との連繋のもとに戦局の挽回をはかったがかえって大敗。オゥニールは北に徹退し、レッド・ヒューは船でスペインへ逃亡した。

一六〇二年一月一四日スペイン北東岸の海港 Corunna に到着したレッド・ヒューは、歓迎を受けたのち Zamora (in Zamora prov., 64.4 km. N of Salamanca) で Felipe III (1578-1621) に拝謁、援軍の快諾を得たが、その後ネーデルランドにおけるスペイン軍の形勢が不利になり、いっこうに音沙汰なし。業を煮したレッド・ヒューが同年九月、再度懇請に旅立ったが、途中 Simancas (NW 200 km. of Madrid) において毒殺された。下手人はエリザベス女王の密使 James Blake であった。〔訳〕

レッド・ジム・マクダーマット (Red Jim MacDermott) James ('Red Jim') M. (この綽名は彼の髭が赤かったから)。Dublin 市生れの政治家、スパイ。父は法律家（その庶子）とも御者ともいわれる。一八六〇年教皇志願兵団 (Papal *or* Pontifical Zouaves) に参加。Myles William Patrick O'Reilly (1825-80) 指揮下のIr人部隊の一員として転戦、Castelfidardo (17.7 km. S of Ancora) での勲功により聖シルヴェステル十字架勲章を授与されたという。

その後政治運動に身を投じ、Irish Republican Brotherhood (founded 1858) のアメリカ分派である Fenian Brotherhood (founded 1858) の指導者 John O'Mahony (1816-77) に取入り絶対的な信頼を得る。だが、この頃からすでにイギリスの諜報機関と内通していたらしく、一八六三年のシカゴ・フィーニアン代議員会を分裂混乱に陥れ、一八六五年にはフィーニアン同志団の全機密（暗号、武器の在処、極秘書類等）をニュー・ヨーク駐在のイギリス領事に売渡す始末。ためにカナダ沿岸に秘密基地を設け、海賊まがいのゲリラ活動によってひいてはIr本国の独立運動を支援しようとする、一八六六～七一年にかけての度重なるカナ

ダ遠征も失敗に帰し、かてて加えて、一八六七年のロンドンの Clerkenwell 留置所爆破に端を発したダイナマイト作戦では率先その指揮を取り、ニュー・ヨークから特別班を送込んでは当局に売渡すといった悪どさ。しかも彼は徹底的な追及にも拘らず、一八九〇年代まで堂々と活躍を続け、フィーニアン運動を四分五裂せしめたのを始め、臆面もなく利敵行為の数々を繰返したのであった。

この人物（英雄には違いないが）の登場は、民族の英雄気取りの市民を滑稽化するための典型的な一例。〔訳〕

オウエン・オゥグロウニ司祭（Soggath Eoghan O'Growney）（Ir. Sagart Eoghan Ó Gnáthnua; Fr. Eugene O.）（1863–99）。Ir におけるゲール語研究の草分け的存在。ミーズ郡西中部の Athboy（Ir. Áth〔=a ford〕buidhe〔=a. yellow〕）生れ。Maynooth（Ir. Mag Nuadhat's plain）College 卒業、敍品（一八八九）。母校の Ir 語教授（一八九一）。Douglas Hyde（1860–1949）の Gaelic League の設立（一八九三）に John 'Eoin（Ir. Eóin）' Gordon Swift MacNeill（1849–1926）とともに参画、副会長。一八九四年健康を害し、その後渡米。カリフォルニアで死亡。

彼は *Gaelic Journal* の編集者であるとともに Ir 語初等文法の著者であり、中でも *Simple Lessons in Irish*（1891）は彼の代名詞になった。ちなみに Lady Augusta Gregory（1852–1932）もこの文法書を使って Ir 語を勉強した（ただし William Butler Yeats〔1865–1939〕は Ir 語研究には熱心ではなかった）。

U の第九挿話では、この初等文法読本そのままではないが、教科書的な Ir 語のセンテンスが Stephen の意識の流れに浮び出る。その二番目 "Táim imo shagart.（Ir. Táim〔=I am〕i〔=in〕mo〔my〕sagart〔=priest〕.; i.e. 'I am a priest.'）" の "shagart" の英語形が soggart（*or* sogart）である。ジョイスはオゥグロウニに、教権的な意味合いを込めてあえて普通の呼称である "Athair（=Father）Eoghan" を避け、教区司祭を意味する Ir 語の肩書を与え、民族主義とカトリック教会との癒着を諷刺しようとする。〔訳〕

マイクル・ドワイア（Michael Dwyer）（1771–1826）。ウィクロウ山脈中央部 Lugnaquilla（Ir. Log na gCoillach〔=a place of the grove〕山西麓の Glen of Imail（Imaal *or* Imaile）（Ir. Uí〔=in district names; lit. descendants〕Máil〔=of Mann Mal, a brother of a king of Ir. in the 2nd c.〕）（四方を峯々に囲まれた天然の要害の地）生れのカトリック教徒。一七九八年の武装蜂起の際には、二、三〇人の叛徒を連れてプロテスタントの農夫 Joseph Holt（1756–1826）隊と合流。ホウルトが降服後も全イギリス軍を相手に五年間英雄的なゲリラ活動を続け、一八〇三年一二月一七日に自ら白旗を掲げた。その間、一八〇三年七月二三日D市で起った Robert Emmett（1778–1803）の叛乱に際しては、それが自殺行為に等しいことを事前に察知しつつ

も、イーモールから五〇〇名の部隊をつれてD市南郊まで駆付けたが、形勢不利と見て市内突入は見合せた。しかし叛乱に失敗したエメットの逃亡を助け、一時姪の Anne Devlin のところに匿ってやったりした。

ドワイァは降服後軍法会議にかけられたが、人格高潔のゆえに死一等を減ぜられてオーストラリアの New South Wales 州に送られ、Sydney で巡査部長（一八一五）になって死んだ。〔訳〕

フランシィ・ヒギンズ（Francy Higgins） Francis H.（1746-1802）。D市の顔役、名士。ダウン郡からの転居者を父母にDに生る。弁護士書記の父親が地方から裁判の重要な証拠書類を持って帰ってきたところを殺害されて以来、使い走りやら靴磨きなどの半端仕事を転々として少年時代を送る。将来の出世を夢見てプロテスタントに改宗、一七六六年弁護士書記になる。同年一〇月、ダウン郡の地主でD市税務署員だと偽って同市の有力な商人 William Archer の娘 Mary Anne と結婚。しかし翌一七六七年詐欺罪その他で訴えられ、投獄。この時以来 "Sham Squire" という不名誉な綽名（判事 Christopher Robinson が法廷でつけた）で呼ばれるようになる。

一年間の入獄の後賭博場と関係を持ち、また下着商人としても成功。一七八〇年D市弁護士、一流紙 *The Public Register, or Freeman's Journal*（一七六三―一九二三）の社員になる。のち市公安官輔佐、市殺人事件担当検事補（一七八四―七）。一七八八年には『フリーマンズ・ジャーナル』紙を買収、社主になる。爾来同紙は政府の御用新聞として、Henry Grattan（1746-1820）を始め政府反対の愛国者たちを断えず攻撃した。

これに対し、*The Dublin Evening Post* の社主 John Magee（1750?-1809）がヒギンズ一味を諷刺する散文や韻文を盛んに掲載し、また彼の前歴をあばきさえした。かくして一七九〇年にヒギンズは名誉毀損で相手を訴え、Ir高等裁判所主席判事 John Scott, Earl of Clonmel（1739-98）と組んで裁判を勝訴に導いたが、その後裁判手続きをめぐって疑義が生じ、一七九一年検事の資格を失い、次いで一七九四年には弁護士録から除名された。

一七九八年、同年の武装蜂起の首謀者のひとり Lord Edward Fitzgerald（1763-98）の隠れ家を当局に通報、賞金一、〇〇〇ポンドをせしめ、またその功により年金三〇〇ポンドを得た。しかし、さすがの彼も最後に臨んで前非を悔いたのか一世一代の善行をおこない、遺言によって莫大な遺産の大部分を慈善事業に寄付した。〔訳〕

ヘンリ・ジョイ・マックラッケン（Henry Joy M'Cracken） H. J. McCracken（1767-98）。Belfast（Ir. Ḃeal Feirste〔=the ford of the sand-bank〕）生れの Presbyterian。アルスタ州特産のリンネル生地販売商人として叩きあげられたが、二二歳のとき木綿紡績工場の経営を委任される。政治的な関心を抱くようになり、一七九一年にウルフ・トウン〔八八頁の「ティアボールド

・ウルフ・トウン」の注解参照）を理論的な指導者に、トマス・ラッセル（同上の注解参照）らとともに the Society of United Irishmen をベルファーストに設立（これが母胎となって後に全国的な組織に発展した）。一七九六年弟とともに逮捕、一三ケ月の牢獄生活の後に保釈。

一七九八年の武装蜂起に際しては Antrim（Ir. Aontruim〔＝lit. one elder tree〕）郡の最高指揮官として奮戦。紡績工場町アントリムでの戦いに敗れてのちは Ballymena（Ir. An Baile Meadónach〔＝the middle town〕）に退き、近くの山に立籠って数週間抵抗を続け、その後アメリカへむけて出航しようとするところを捕えられる。早速軍法会議にかけられたが頑として口を割らず、七月一七日ベルファーストで処刑された。

誠実で愛情深い Mary Ann との兄妹愛は感動的で、彼女はほとんど最後まで兄に付添った。〔訳〕

ペッグ・ウォフィントン（Peg Woffington） Margaret（'Peg'）W.（1718/1714-60）。D市生れの女優。幼くして煉瓦職人の父を失い、母と妹を助けて街頭で果物と辛子を売り細々と生計を立てる。折しもD市で興行していた有名な綱渡り芸人 Madame Violante に可愛がられ、彼女の率いる児童劇団の一員として初舞台を踏む。時に一〇才。その後も市内の劇場で場数を踏んだのち、一七三七年D市の Smock Alley Theatre で本格女優としてデビュー（Ophelia 役）。一七四〇年 Covent Garden Theatre の支配人 John Rich（1682?-1761）の眼に留り、一〇月ロンドンにデビュー、たちまち市民を魅了。翌四一年にはついに Drury Lane（i.e. Theatre Royal）の舞台に立ち、以後大女優としての華々しい道を歩む。一七四七年夏故国へ錦を飾り、五七年五月舞台上で倒れ引退した。

彼女は当代切っての美人ということで幾多の浮名を流したが、一時イギリス最大の俳優のひとり David Garrick（1717-79）の愛人であったこともある。彼女の女優としての唯一の欠点は声が悪いことで、悲劇には適さなかったといわれている。

一八五二年に Charles Reade（1814-84）と Tom Taylor（1817-80）の共作になる喜劇 *Masks and Faces* がロンドンで上演され大当りを取ったが、これはペッグの生涯のひと齣に取材したもの。リードはこれに気をよくして、翌年には同じ題材で小説 *Peg Woffington* を出版、これもかなりな評判を得た。なお、上述の喜劇はその後半世紀間、どこかの劇場で常時上演されたという。また、彼女の肖像画は数多く残っているが、中でも William Hogarth（1697-1764）, Richard Wilson（1714-82）, Sir Joshua Reynolds（1723-92）, Johann Zoffang（1734/5-1810）といった当時の代表的な画家たちが好んで彼女をモデルにした。〔訳〕

村の鍛冶屋（the Village Blacksmith） *Ballads and Other Poems*（1841）に収められた八聯からなる Henry Wadsworth Longfellow（1807-82）のバラード風の詩の題名。主人公の村の鍛冶屋は二宮金次郎ばりの「修身」の教科書むきの人物。彼は

"a mighty man.../With large and sinewy hands;/And the muscles of his brawny arms are strong as iron bands"で、"Week in, week out, from morn till night" 労働に励む "His brow is wet with honest sweat" であり、学校帰りの子供たちの人気者になる。しかも彼は信心深く、毎日曜は欠かさず教会に通い、自分の娘が聖歌隊で歌う声を聞くと、"It sounds to him like her mother's voice,/Singing in Paradise!" かくて "Toiling rejoicing sorrowing, onward thro' life he goes."

なおこの詩は一八五四年頃イギリスの声楽・作曲家 Willoughby Hunter Weiss (1820-67) によって作曲され、Irはもちろんのこと、ペルシア辺りでも歌われたという。但しわが国の同名の童謡とは別曲。

Irとの関係からいえば、ワイスはIrを代表するD市生まれの作曲家 Michael William Balfe (1808-70) (九〇頁の「カスティールの薔薇」の訳注参照) の弟子。またもうひとりの師 Sir George Thomas Smart (1776-1867) は一八一一年に一連のコンサートを指揮するためD市を訪れたとき、その功績に対して時のIr総督 Charles Lennox, 4th Duke of Richmond (1764-1819) からナイト爵を授けられた。〔訳〕

月光隊長 (Captain Moonlight) この名称がはじめて聞かれたのは、アイルランド民族土地同盟 (六五頁の「山のロリ」の注解参照) の委員長パーネルの口を通じてである。

一八八一年一〇月九日にウェックスフォードで開かれた集会の夜、Richard Barry O'Brien (1847-1918) が差し迫った逮捕について訊ねたときパーネルは "Ah, if I am arrested Captain Moonlight will take my place." (*The Life of Charles Stewart Parnell*. Vol. I, p. 312) と答えたという。

問題の逮捕は数日後の一三日に現実のものとなった。当局のこの行動に対しては一八日の小作料不払い宣言 (i.e. 'No Rent Manifesto')、そしてついにその反動として二〇日には土地同盟の活動禁止へと発展し、パーネルが予言したように "Captain Moonlight" の跳梁となるのである。

ところでこの "Captain Moonlight" の実体については、①地主や小作料を収めた者、あるいは立退かされた小作人の後釜にすわった不埒者に対して送付された脅迫状の署名 (R. Barry O'Brien 説) ②ゲリラ活動を意図する非合法の Land Leaguer らの組織に与えられた総称 (John Howard Parnell 説) などの説があるが、一八八二年一月にIrの各地で頻発した脅迫、放火、暴行、銃撃等の事件を報道する当時の新聞には、"Captain Moonlight" とともに "Moonlighters" の文字が見え、また同年一月二三日にコーク郡で開かれた裁判で組織の内実について語る "Captain Moonlight" こと Daniel Connell の証言などから判断すると、地下組織化しゲリラ化した Land Leaguers を "Moonlighters" といい、その隊長ないしは地区組織の長を "Captain

Moonlight" と呼んでいたようである。もちろん襲撃は深夜に行なわれる。

おそらくこのような名称が、土地同盟が非合法化され過激化したこの時期においては、"Rory of the Hill."（六五頁の「山のロリ」の注解参照）に代ってもっとドスのきいた署名として使われるようになったものと思われる。またゲリラ組織の総称としては、*The Secret Societies of Ireland* の著者 H. B. C. Pollard のいう "Moonlighters" の方が正しいようだ。なお "Captain Right" という署名も使われたらしい。〔訳〕

ボイコット大尉（Captain Boycott） Charles Cunningham B. (1832-97)。すでに述べたように、パーネルの率いる土地同盟のボイコット戦術槍玉第一号に挙った人物（六五頁の「山のロリ」の注解参照）。

彼はイングランド生れの退役将校で、一八七三年に Mayo (Ir. Muṡeó=the plain of the yews) 郡の Mask 湖畔にある John Crichton, 3rd Earl of Erne (1802-85) の領地（二一八四エーカー）の差配人になった。ことの発端は、一八七九年の飢饉による食料不足を考慮してロード・アーンがすでに認めていた地代一〇パーセント減額案をさらに値切ろうとする小作人の要求を頑として聞き入れずに、かえって立退請求の訴訟を起したことによる。ちょうどこの紛争の最中に例のボイコット戦術が発動されたものだから、折から収穫期だというのに農民は全員が手をひき、召使は立去り、近在の商人という商人は不売運動を展開し、郵便配達は拒否され、ためにボイコットは生活必需品を遠路はるばる船で取寄せねばならなくなった。そこで政府に救援を要請するとともにロンドンの『タイムズ』紙に窮状を訴え、やっと一〇月一九日になってアルスタから右翼オレンジ結社員の作業隊五〇名が二門の野砲を伴った九〇〇人の兵隊に護られて到着した。だが、彼らが問題の領地に達するまでがこれまた大変で、メイオウ郡の Claremorris (Ir. Clár〔=a plain〕Clonne Murr〔=Morris〕) までが汽車、それから先二四キロの道程は食料の供給もいっさい受けられずに歩き、かてて加えて到着してみると、軍用テントの鉄杭を置き忘れて来たものだから豪雨のなか全員がずぶ濡れの有様。とどのつまりは飢えのために略奪までおっ始まる始末であった。

その後ロンドン、アメリカへ逃れ、一八八一年の秋になってIrへ帰って来てみるとまたもや騒動に捲き込まれ、例の「山のロリ」署名入りの脅迫状攻撃に悩まされたが、それも一年余りでようやく鎮静した。その後は一八八六年にIrを去ってイングランドの別の差配人におさまった。

なお「ボイコット」が普通名詞化し、さらに動詞化したのは、一八八〇年一一月二〇日号の『タイムズ』紙が大文字で使ったのが最初。〔訳〕

聖フルサ（S. Fursa） (St. Fursey, Fursae, Fursu, Fursæus, *or* Furseus; Ir. San Ḟurṡa, d. 649/650; f.d. 16 Jan.)。大陸

に勇飛したIrの聖人のなかでは聖コルンバン（五四頁の「聖なるマイカンに捧げられし邦」の注解参照）についで有名。

高貴な生れで、一説には父はマンスタ王 Δοτὸ Ὀεαννναιν であったといわれるが詳細は不明。六三〇年代の前半にほかのふたりの兄弟、St. Faolan (Foillan, Fullan *or* Faelán; Ir. Ꝑaoláɴ) (d. 655; f.d. 31 Oct.)、St. Ultan (Ir. Ult́cáɴ) (d. 686; f.d. 1 May) とともにブリテン島に渡り、東 Anglia（五〇〇年頃に建設されたアングロ・サクソン六王国の一で、現在の Norfolk, Suffolk, Cambridge, Ile of Ely の四〔実は五〕州を占めていた）のサクソン人の王 Sigebert (Sigeberht *or* Siggibercth) (d. 637?) に温かく迎えられ、Cnobheresburg (=Cnobhere's Town; i.e. modern Burgh Castle in Suffolk, near Yarmouth) に修道院を建てた。その後六四四、五年頃に国情不安から、また新たに修道に適した僻地を求めてゴールに渡り、とくに Neustria（六～八世紀のフランス北部および北西部を占めていた西フランク王国）の宰相 Erchinoald (Ercanwald, Earconwald *or* Erchinold) (d. 656) の厚い信奉と庇護を受け、王 Chlodewech (i.e. Clovis II) (633-56) から与えられた Marne 河畔の Latiniacum (i.e. Lagny, 25.7 km. E of Paris) の地に修道院を建てた。そして六四九年ないしは五〇年に布教旅行中 Mézerolles で急逝し、遺骸はその後間もなくして竣工した Péronne (27.3 km. WNW of Saint-Quentin) の修道院に葬られた。

聖フルサが大陸で有名で、また現在でも主としてフランスの Amiens 司教管区と南ベルギーにおいて尊崇されている原因は、ひとつには後から述べる彼の幻視家としての特異な体験にもよるが、彼の死後ペロンヌの修道院が巡礼の聖地になり、またそこと密接な関係にあった Fosse (i.e. modern Fosse-la-Ville, 14.5 km. SW of Namur in S central Belgium) や Nivelles (i.e. 27.3 km. S of Brussels) の修道院とともに、大陸におけるキリスト教の学芸ならびに教育の中心地であったことによる。

さて、幻視家としての聖フルサについては、ノーサンブリア王国（四九頁の「美わしきイニスフェイルに」の注解参照）の Bede (Baeda, 673-735) がその *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* (i.e. *A History of the English Church and People*) (fin. 731) で詳細に紹介して以来つとに人口に膾炙している。

聖フルサはIrにいる頃からたびたび生死を彷徨うトランス状態に陥り、天使に導かれて天国に登ったり、彼らから種々なる予言を得ていたようだが、東アングリア滞留中もまたしても不思議な宗教体験をした。一度は世界を焼き尽す四種の業火、つまり欺瞞、貪慾、不和、邪悪の炎を眼の当りに見、またその恐しさを身をもって経験したのである。

これらの火炎がひと塊になって燃え盛る中を通りすぎるとき、悪魔が業火によって責苛んでいたひとりの男を聖フルサに投げつけた。聖人は肩と顎に火傷を負ったが、これは罪の告解を得ないで死んだ、その友人の衣類を形見分してもらったばっかりに罰を受けたのであった。このときの魂の火傷は、蘇生した体のその位置に永久に消えない傷痕となって残った。

この聖フルサの神秘体験が、おなじくビードの著書に収録されている Drycthelm (Drithelm, fl. 650) の同種の、だがより文学的な体験記などとともに、キリスト教の終末観に深甚なる影響を与え、ひいてはダンテの人間地理学の形成に寄与したことは疑い得ない。これはジョイスが *The Mirage of the Fisherman of Aran* (1912) において誇らしげに物語る通りである（次の注解参照）。〔訳〕

聖ブレンダン (S. Brendan) (Brandan *or* Brenainn; Ir. San Bhréanainn) (484-577/583; f.d. 16 May)。通称 Brendan the Navigator (*or* Voyager) という。名門キアルの子孫（五九頁の「キアルの子孫の定住地」の注解参照）の出で、ケリ郡のトラリー湾南岸、Slieve Mish (Ir. Sliab Mis [="the mountain of Mis, the daughter of Mureda, son of Cared" (*Four Masters*)]) 山脈の麓で郡都トラリーに近い Annagh (Ir. Eanach=a marsh) で生れた。

由来ケリ郡の沿岸の住民は漁撈によって生計を立て、また漁民として海、この場合は大西洋の潮風と潮騒に馴れ親しみ、大洋の彼方への憧憬を胸に秘めて育った。しかもIrでも南部に属するこの郡の港ははやくから大陸との交通が開け、外邦の珍しい物語が船荷とともに次からつぎへと齎らされるのであった。したがってこのような環境に生れ育った聖ブレンダンが、後年偉大なる航海者として伝説化されたのも至極とうぜんなことであった。

彼は古くからのケルトの習慣に従ってリマリック郡南西部の Newcastle West (Ir. An Caisleán Nuaḋ=the new castle) の南、Killeedy (Ir. Cill [=a church] Ita; i.e. the Church of Ita) の St. Ita (Ir. San Ité *or* Iteó) のところに里子に出された。そしてその後ははるばるD郡の北端、Clonard (Ir. Cluain [=a meadow] Árd [=a. high]) やゴールウェイ郡の北東部、Tuam (Ir. Tuaim [=a tumulus] na [=of the] Dá [=two] Sualann [=shoulders]; i.e. the tumulus of the two shoulders) に遊学した。そしてその後はトラリーの北西 Ardfert (Ir. Árd [=a height, hill] Fearta [=g. of Fearta, i.e. grave] と、ゴールウェイ郡南東部シャノン川に近い Clonfert (Ir. Cluain [=a meadow] Fearta) にそれぞれ宗教上重要な大修道院を建てるとともに、当時としては驚くほど遠路はるばる船で布教に向った。その航跡はIr沿岸はもちろんのこと、Outer Hebrides, Orkney Isls., Shetland Isls.、スコットランド東西沿岸、ウェイルズ、Brittany、さらには D. D. C. Pochin Mould によれば、北は Iceland, Greenland まで、南は Madeira 島にまで及んだという。

しかし何といっても彼の名を不朽にしたのは、"the *Odyssey* of the Irish Church" といわれる *Navigatio Brendani* (『ブレンダン航海記』) (1050?) の出版である。著者はIr在住のIr人、あるいは大陸在住のIr人ともいわれるが、このラテン語の航海記はたちまち Norman-French, Old French, Middle English, Flemish, Dutch, German, Provençal, Italian, Norse の諸語に訳

され、中世ヨーロッパ全域のベスト・セラーになった。詳細はレイディ・グレゴリの *A Book of Saints and Wonders* (1907) の掉尾を飾る *Brendan's Homecoming* (もっともこれはダイジェスト版) を読んでいただくことにして、ここではこの航海のプレリュードともいうべき出発に至る事情を *Vita Brendani* から補足しておく。その方が物語全体がよりドラマティックになるからである。

トラリーの西にブレンダンに因んで名付けられた、Ir第二の高峯 Mt. Brandon (Ir. Cnoc Ḃṙéanainn という山 (九五四米) がある。この山の頂きは巡礼地だった (最近また祝日には巡礼が集うようになった) ところだが、現在でも聖ブレンダンが建てた小礼拝堂の遺址が残っている。彼は航海にむかうときには必ずこの頂きから四方を遠望して計画を樹てたという。

そんなあるとき the Promised Land (Ir. Tír Tairngire) の幻視を得て、五年間その地を探し求め、けっきょくは失敗してIrに戻って来た。すると聖イタがそれは心掛けが悪いからだ、なぜなら罰当りな curragh (Ir. curach=hide-boat) のような獣皮を用いた舟に乗って出掛ける以上、神の国に到達できるわけがない。もう一度こんどは木造船に乗って船出しろと命じた。聖ブレンダンは指示通りの船で西方の彼方の地を目指し、こんどはエスエフまがいの航海 (往復都合七年) のすえについに憧れのエデンの園 (島とも大陸とも考えられる) に到着し、そこを Ui (Ir. Uí [=in district names], pl. of ó [=a descendant]) Breasail (Ir. Ḃṙéasail, g. of Ḃṙéasal (=a pers. name common in old Ir. <ḃṙéasal=n. ruddle) と名付けた。

その後アメリカ大陸に白人が住むようになって、一体この理想境は何処なのかという議論が起り、ちょうど我国の耶馬台国探し同然の穿鑿がなされた結果、北米か南米かどちらとも決め兼ねているのが実状のようである (アフリカの Canary 諸島だとの説もあるが、一三二五年に始めて記載されて以来一八世紀の諸地図に至るまで、北太西洋上に問題のエデンの園が実在していた)。ただ物語上の自然的条件や動植物の類いから判断すると、南米か、北米でも南部らしいとしかいいようがない。事実としては Newfoundland や合衆国の東岸の一部にキリスト教の古い遺跡があること、また Brazil という地名は先述の ḃṙéasal [brásəl] に由来する (普通は brazilwood [late ME. *brasile*, med.L. *brasilium,-illum*; F. *brésil*, Pr. *bresil*, Sp. & Pg. *brasil*, It. *brasile*] を語源とするというが、そのさらに "unknown origin" はどうやら問題のIr語にあるらしい。なぜなら brazilwood="a hard, red wood, valuable for the preparation of dyes, that was so brightly colored as to seem to be already burning." [Issac Asimov] であるからである) ことを指摘しうるにすぎない。

ところでジョイスは「アラン諸島の漁師の蜃気楼」(八一頁の「聖フルサ」の注解参照) の中で皮肉たっぷりに——

Christopher Columbus, as everyone knows, is honoured by posterity because he was the last to discover America. A thousand years before the Genoese navigator was derided at Salamanca, Saint Brendan weighed anchor for the unknown world from the bare shore which our ship is approaching (i.e. the little port of Galway); and, after crossing the ocean, landed on the coast of Florida. The island at that time was wooded and fertile. At the edge of the woods he found the hermitage of Irish monks which had been established in the fourth century after Christ by Enda (i.e. Enda [Ir. Éanna] of Aran, the father of the great expansion of monasticism in Ir., d. 530?; f.d. 21 Mar.), a saint of royal blood. From this hermitage came Finnian (i.e. Fridian [Frediano *or* Frigidian] of Lucca, fl. 3rd c.; f.d. 20 Mar.; cf. "St Finnian of Movill [d. 579?; f.d. 10 Sep.] is sometimes identified with St Frigidian."), later Bishop of Lucca. Here lived and dreamed the visionary Saint Fursa, described in the hagiographic calendar of Ireland as precursor of Dante Alighieri. A medieval copy of the Visions of Fursa depicts the voyage of the saint from hell to heaven, from the gloomy valley of the four fires among the bands of devils up through the universe to the divine light reflected from innumerable angels' wings. This vision would have served as a model for the poet of the *Divine Comedy*, who, like Columbus, is honoured by posterity because he was the last to visit and describe the three regions of the soul.

と云っているが、先述のようにダンテの場合は別にして(八一頁の「聖フルサ」の注解参照)、フロリダ島だの、そこのIr人の修道者だのはまったく根拠があるわけではない。これはIr人特有の愛国的な悪戯から Trieste の新聞 *Il Piccolo della Sera* (=The Evening Tabloid) の読者を煙に巻いたのである。ただ聖ブレンダンの伝説がコロムブスの新大陸発見のひとつの契機になったことは確かであろう。またコロムブスのクルーにはゴールウェイ出身者がひとりおり、そのために船は実際にまずゴールウェイ港に投錨して新大陸発見のニュースをもたらしたらしい。偶然の一致だが、伝説上の聖ブレンダンも第一報をもたらした相手はゴールウェイ湾内のアラン諸島の住民ということになっている。〔訳〕

マクマホン元帥 (**Marshall MacMahon**) Marie-Edmé-Patrice-Maurice, comte de Mac-Mahon (1808–93)。スイス寄りの Saône-et-Loire 県 Sully 生れのIr系フランス人。教育を陸軍の l'Ecole de Saint-Cyr で受け、一八三三年の Algeria の戦いで始めて華々しい活躍をする。陸軍大佐 (一八四五)、准将 (一八五二)、中将 (一八五五) と順調に昇進し、一八五五～六年の

Crimea 戦争ではマラホフ (Malakov) 高地の攻略に武勲を樹て、Sevastopol 攻撃に参加。一八五九年、イタリアの Magenta (24 km. W of Milan) においてオーストリア軍に戦勝した功により陸軍元帥に叙せられ、同時に Duc de Magenta の爵位を与えられた。一八六四—七〇年アルジェリア総督、七〇年の仏独戦争勃発とともにIr軍団を率いて Alsace の防衛に当るが、悪条件が重なって連敗につぐ連敗、最後には捕虜になる。一八七一年停戦協定成立後フランスに帰り労働者革命政府 (la Commune) からパリ奪回、その結果一八七三—九年大統領。その後はパリ南方 Loiret 県の Le Château de la Forêt に隠棲、そこで死んだ。

彼はけっして偉大な将軍であったわけではないが、それはひとつには Bismarck (1783-1860) や von Moltke (1848-1916) といった稀代の戦術家を相手にしたからであり、また政治家としては共和制反対論者で、内心は帝制を望んでいたといわれる。

Ir にはマクマホンという旧家は北と南にあるが、マクマホン元帥の祖は、直接的にはマンスタ王でIr王であった Murtough (Murtagh, Murtogh, Murcetach *or* Murkertach) O'Brien (Ir. Muircheartach Ó Briain) (d. 1119) の息子 Mahon を初代とする名家である。

ジェイムズ二世が一六八九年のボイン河の敗戦によって再度フランスに逃げのびてのち、サースフィールド (七四頁の「パトリック・サースフィールド」の注解参照) をはじめIr軍の将兵一一、〇〇〇人がフランスへの亡命を許された。この中にはジェイムズ派のマクマホン家のひとびともとうぜん混じっていた。

その後も協定を破ったイギリス政府による苛酷な収奪と政治的な圧迫によってカトリック教徒の亡命は続き、リマリック生れの元帥の祖父 John B. MacMahon (1715-80) も若くしてフランス軍に投じ、勲功により Bourgogne に領地を与えられ、また彼が上王ブリアン (七〇頁の「キンコラのブリアン」の注解参照) の末裔であることを証明したことによって Marquis d'Eguilly を授けられた。なお、ジョンの弟 Maurice もブルゴーニュの Moguien に領地を与えられた。〔訳〕

カール大帝 (Charlemagne) (Carolus Magnus, 742?-814)。フランク王 (七六八—八一四)、西ローマ帝国 (神聖ローマ帝国) 皇帝 (八〇〇—一四)。七六八年父王 Pépin(*or* Pippin)le Bref(714-68) の死によってネウストリア (西フランク王国) と Austrasia (六世紀の初期に建設され、八世紀にネウストリアと併合された東フランク王国) の王。さらに七七一年弟の Carloman (751-71) の死によって全フランクの王になる。七七二年隣国 Saxony (i.e. Sachsen) に対する戦いを開始したが、ザクセン人の指導者 Wittkind の降服 (七八五) 後も叛乱が絶えず、前後三〇数年を費して八〇四年、完全なる征服とキリスト教化を達成した。

これと並行して、七七三年には教皇 Hadrianus I(d. 795) の要請で北イタリアの Lombardy (i.e. Lombardia) 王 Didier Desiderius (d. 775) の討伐にむかい、翌七七四年征服。七七八年には Cordova の caliph, Pader-ar-Rahmanを相手にスペイン北東部

に兵を進めたが利あらず、帰途 Pyrenee 山中で Wascone 人 (Basque 人) に襲われ、*Chanson de Roland* で有名なブルターニュ辺境伯ローランらを失った。

その後は Bavaria の併合 (七八八)、七九一—六年に現在のオーストリア、ハンガリア、ルーマニア地方を領有していた Avar 人を討ち、版図を Raab 河の線まで拡げた。八〇〇年にはローマ人の叛乱を平定するために遠征し、ローマで教皇 Leo III (d. 816) から西ローマの帝冠を受けた。さらに八〇六—一〇年には北東のディン人を征圧。その結果彼の治世の終りごろには、東西は北スペインの Ebro 河からハンガリアおよびオーストリアのラーブ河に至る地域を、また北は Eider 川、つまり現在の西ドイツの Schleswig-Holstein 地方まで、また南はイタリア中南部を流れる Garigliano 川に至る広大な地域を版図とした。

カール大帝は彼自身ラテン語を話しギリシア語を読むことができたが、St. Augustinus (354-430) の *De Civitate Dei* (*The City of God*) (413-26) から啓示を受けて以来、自分をキリスト教国における唯一の守護者で、推進者であると考えるようになった。したがって彼においては、帝国の拡大・統治、キリスト教の伸張ならびに教会改革が並行して行われ、それらが一種の十字軍的な色彩を帯びていた。また父王ペパンの事業をついで、文芸をはじめ教育、産業、商業の発展に力を竭したので、いわゆる "Carolingian (*or* Carlovingian) Renaissance" (フランスでは〔七五一—九八七〕、ドイツでは〔七五二—九一一〕、イタリアでは〔七七四—八八七〕) を開花させるに至った。

すなわち、彼はアングロ・サクソン人で York の司教座聖堂学校長 Alcuin (735?-804) をはじめ、フランク人の歴史家 Eginhard (770?-840)、「イタリアの歴史の父」Paul Warnefridi (Paulus Levita) (720?-800?) 等を招き、そのために Aachen (i.e. Aix-la-Chapelle) に宮廷学校を設立した。

Irとの関係からいえば、アルクィンはもちろんコルムキル (四九頁の「美わしきイニスフェイルに」の注解参照) 以来の学統を受継ぎ、またカール大帝の宮廷にこそIr人の有名な学者はいなかったが、ペパンの時代には St. Virgilius (Ir. Feartsat) of Salzburg (700?-84; f.d. 27 Nov.)、カール大帝の孫 Lothaire I (795-855) の宮廷には Sedulius Scotus (fl. 9th c.)、そして Charles le Chauve (i.e. Charles II) (823-77) の時代には中世を代表する神秘哲学者 John Scotus Erigena (810?-77?) がいた。

カール大帝の治世にはデイン人がIrにも侵入し、破壊と略奪を恣にしていた時代で、Ir人にとってはゴールの地は学問研究のうえからきわめて魅力に満ちていた。また大帝の側からしても、旧ローマ帝国の崩壊以来あい継ぐ外敵の侵入によって衰微した学芸復興のためには、平和裡に文化の爛熟を享受していたIr人の流入は歓迎すべきものがあった。事実当時のカロリング王朝におけるIrの知識人はかなりな数にのぼったようである。彼らは *The Book of Kells* (800?) を産んだ自国の優秀な書写技術を伝え、ギリ

シア語の文法を教え、また該博な知識を売物にした。ただ惜しむらくは、爛熟期の彼等には修道院制度によって鍛えられたあの黄金時代の宗教的な情熱はもはや期待すべくもなかった。〔訳〕

ティアボールド・ウルフ・トウン（Theobald Wolfe Tone）（1763-98）。D生れのIrの革命家、共和主義者。一七八五年トリニティ・カレッジ在学中にのちの愛妻 Matilda Witherington（1768-1849）と恋仲になり、駆落をする。一七八六年トリニティ・カレッジ卒業。翌年法律の勉強のためにロンドンに渡る。この頃の彼は主として雑誌への寄稿によって生活を支えるとともに、海賊や南海諸島、および南アメリカに関する本を片端から読み、対スペイン軍事基地を南海の島に建設することを夢見る。

一七八九年Ir弁護士の資格を得る。しかしフランス革命の影響から政治への関心が高まり、一七九一年、イギリス政府に対抗してカトリック教徒と非国教徒との団結を訴えたパンフレット *An Argument on Behalf of the Catholics of Ireland* によってとくにカトリック教徒の注目を集める。同年 Thomas Russell（1767-1803）, James Napper Tandy（1740-1803）らとともにアイルランド人聯盟（七八頁の「ヘンリ・ジョイ・マックラッケン」の注解参照）を設立。翌九二年 Catholic Commitee の副幹事。一七九三年の対仏宣戦布告以来Ir国内では革命勢力への弾圧が高まり、翌九四年五月アイルランド人聯盟禁止解散、非合法活動に入る。一七九五年Irの革命勢力の動向を探りに来たフランスのスパイ Rev. William Jackson（1737?-95）が逮捕されるに及びトウンとの関係が発覚、家族とともにアメリカへ渡る。翌九六年本国からの要請でパリへ行き、革命政府の執政府を説いてIr侵攻を決意せしめる。同年一二月 Louis Lazare Hoche（1768-97）麾下の一五、〇〇〇の兵、四三隻からなる艦隊の副官として乗込み、Ir南岸の Bantry Bay（Ir. Cuan〔=Bay〕 Ṁeanṁṫaiġe〔=the race of Beann, one of Conor Mac Nessa's sons）に侵入したが嵐のために上陸できず、二九日陸地を指呼の間に望みながら涙を飲んで退散。

一七九八年一〇月、Ir国内での武装蜂起を支援すべく出動した J.-B. François Bompart（1757-1842）麾下の小艦隊に再度乗込み、途中またしても遭遇した嵐を突いてIr北西部ドニゴール郡の入江 Lough Swilly（Ir. Loċ〔Lough〕 Suileaċ〔="abounding in *eyes* or whirlpools"〕）の沖合に到着。強力なイギリス艦隊と交戦ののち捕えられ、D市へ連行、アーバ・ヒル街路の英国連隊の重営倉に入れられた。そして一一月一〇日に開廷された軍法会議で絞首刑を宣告され、四八時間以内の刑の執行を申渡された。彼はフランス軍人として銃殺刑を要求したが容れられず、翌一一日の夜に自ら喉を掻切り、一九日息を引取った。〔訳〕

マカベア人の母親（the Mother of the Maccabees） 旧約聖書最後の「第二マカベア書」（エルサレムにいたユダヤ人およびプロテスタントは外典とする）第七章で物語られるユダヤ教の「殉教者マカベア兄弟」（Fratres Machabaei）の母。

シリア王 Ἀντίοχος IV Ἐπιφανής（i.e. Antiochus IV Epiphanes）（215?-163 B. C.）の治世（前一七五―一六三）に、イスラ

エル民族の内部からイスラエルをギリシア化しようとする動きが起った。それに乗じて帝国内の宗教的、文化的統一を志した王は、武力をもってエルサレムを中心にユダヤ教徒に対して激しい迫害を加えた。これに対して老祭司 Ματταθίας (i.e. Mattathias) (d. 166 B. C.) が反抗を試み、死後父の意を体した第三子 Ἰούδας Μακκαβαίος (i.e. Judas Maccabaeus) (d. 161 B. C.) が兄弟たちの助けを得てシリア軍を破り、エルサレムを奪還した。彼らは神殿を潔め、新しい祭壇を設け、祝日を定めて勝利を祝った（一六四年一二月）。この反抗の動機となったのが「マカベア兄弟」およびその母（聖書にはこの人物の名前は見当らない）の殉教である。

シリア人によって捕えられた七人兄弟とその母親は、モーセの律法に背いて豚肉を食べることを強要されたが頑として拒絶した。怒った王はみなの意志を代弁した長子からつぎつぎに兄弟を殺し、最後に年若い末弟を残すのみとなった。六人の子供を拷問の末に殺され、しかもその一部始終を目のあたりにしていた母親は、見るに見兼ねた王が背教をすすめ、また説得することを頼んだにも拘らず、かえって王を嘲りながら兄たちにふさわしく死ぬようわが子を励ますのであった。

聖書ではこの気丈で誉高い母親のことをこういっている——

> ...the mother was to be admired above measure, and worthy to be remembered by good men, who beheld her seven sons slain in the space of one day, and bore it with a good courage, for the hope that she had in God...
>
> (*2 Machabees* 7:20)

彼らのことは「ヘブル人への手紙」11—三五で賞讃されているが、教父たち、例えば St. (Thasicus Caecilianus) Cyprianus (d. 258) もすでにキリスト教殉教者の鑑だとして称揚の言葉を惜しまない。とにかく、カトリックで旧約の人物のうち聖人と認められ、しかも祝日（八月一日）が指定されているのは「マカベア兄弟」だけである。

なお、マカベア (Gr. Μακκαβαίος, Heb. maqqābāh) は鎚の意で、ユダ・マカベアが無双の勇者で、鎚を振って物を砕くように向うところ敵なき有様であったところから付けられた綽名。本来の家名は Hašmōnay (Hasmon) といい、前一四一～一三四年の間イスラエルを統治した、伝説的な Hashmon (Hashmonia) を祖とする名家であるが、ユダにちなんでマカベアが一族全体の名称として使われるようになった。「マカベア書」のマカベアはもちろんこの意で、ハスモン家の歴史が叙述の骨子になっている。

なお、「マカベア人の母親」および「マカベア兄弟」のマカベアは、「第二マカベア書」に出るという意味で、「第一マカベア

書」1—六五に見える——

And many of the people of Israel determined with themselves, that they would not eat unclean things: and they chose rather to die than to be defiled with mean meats.

の実例として、伝説的な七人兄弟とその母親を登場させたにすぎず、反抗の引金になった同種の事件はあったかも知れないが、それがマカベア一族と関係のある殉教とは限らない。〔訳〕

『カスティールの薔薇』(**the Rose of Castille**) これはD市生れのバリトン歌手で、また生涯に二九曲のオペラを作曲したマイクル・ウィリアム・バルフ(七九頁の「村の鍛冶屋」の注解参照)の代表作のひとつの題名およびヒロイン Elvira の愛称。

この三幕物のオペラは一八五七年一〇月二九日にロンドンの Lyceum Theatre で初演され好評を博した。台本作者は有名なイギリスの興業主 Augustus Glossop Harris (1852-96) とD市生れの劇作家 Edmund Falconer (1814-79) で、彼らは一八四九年五月一八日にパリで上演され注目を集めた、Adolphe Philippe ('Dennery') (1811-99)と Louis-François Nicolaie ('Clairville') (1811-79) の合作になる *Le Muletier de Tolède* という劇に基づいて台本を書いた。

なお、この劇はバルフよりも前に、バレー音楽 *Giselle* (1841) の作者として有名な Adolphe Charles Adam (1803-56) によって三幕物のオペラ・コミックとして作曲され(台本は同じく上記の両名の合作)、一八五四年一二月一六日にパリの Théâtre-lyrique で初演された。

このオペラは、題名が示すようにスペインの Castilla 地方を舞台に展開され、しがない百姓娘と騾馬曳きに変装した相愛のエルヴィラと Manuel を中心に、女王エルヴィラを取巻く三人の男たちとマニュエルとの葛藤を面白おかしく画いたものらしい。中で歌われる代表的なアリアとしては、Uの第七挿話で引用される "'Twas rank and fame" を始め、"The muleteer's song", "The convent cell" などがあり、また三重唱 "I'm not the Queen" もなかなかに忘れ難い曲のようである。

なお、「カスティールの薔薇」、つまりエルヴィラはモリと、またマニュエルはBと照応する。〔訳〕

「ゴールウェイっ子」(**the Man for Galway**) これはD市生れの小説家 Charles James Lever (1806-72) の小説 *Charles O'Malley* (1841) で一座の話がゴールウェイ礼賛に終ったとき、Mr. Miles Bodkin がみなに唄って聞かせる民謡。小説では "very classic ode" ということになっているが、普通はリーヴァ自身の作として詩撰集などに収められている。メロディーは

トマス・ムア(六七頁の「涙と笑いと…眼」の注解参照)の *Irish Melodies* 中の *Wreathe the Bowl* と同じ。一番のみ引用する——

To drink a toast,
A proctor roast,
Or bailiff as the case is,
To kiss your wife,
Or take your life
At ten or fifteen paces;
To keep game cocks——to hunt the fox,
To drink in punch the Solway,
With debts galore, but fun far more;
Oh, that's 'the man for Galway.'
Chorus——With debts, etc.

〔訳〕

「モンテカルロで胴元を倒した男」(The Man that Broke the Bank at Monte Carlo) イギリスの作詞家 Fred Gilbert (1850-1903) のミュージック・ホール・ソング。このバラードのモデルについてはいろいろな説がある。一八九一年にロンドンで金を撒きちらし、自らを "the man who broke the bank at Monte Carlo" といつも吹聴して賭博場のさくらをやっていた Arthur DeCourcey Bower という男 (Sigmund Spaeth 説)、また稀代の詐欺師で、一八九二年にイギリスを追われて逃げ込んだモンテカルロの賭博場で胴元に一日に一二回も元金(もときん)を取寄せさせ、合計六回胴元を倒し、これが評判になって世界中の新聞が毎日カシノでの彼の稼ぎ高を報道したという Charles ('Monte Carlo') Wells (d. 1926) (Christopher Pulling 説) などいろいろあるが、ここには最新の Ivor H. Evans 説を紹介する。

彼によれば、モデルは一八八六年に八日間で二百万フラン以上を稼いだ Joseph Hobson Jagger (d. 1892) という男で、この名うてのいかさま師は一台のルーレットの回転盤の心棒に欠陥があるのを察知して一週間観察させ、その後普通よりもはるかに高い確率で出る数字に賭けてまんまと大金をせしめたという (*Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, Centenary Ed.)。

この歌は一八九一年にスコットランド系コメディアン Charles Coborn（一八五二―一九四五）がロンドンで唄って大ヒットし、翌年には William（'Old Hoss'）Hoey の喉を通じてアメリカでも唄われるようになった。

この歌がコウボーンによって創唱された時期についても、一八九〇年、九一年、九二年説と三通りあるが、コウボーン自身の記入にもとづいた *Who Was Who* の記述にしたがって、ここでは九一年説を採用しておく。もしこれが事実だとすると、'Monte Carlo' Wells のモデル説は疑わしくなる。

その後コウボーンは何百回となく舞台（もちろんD市の舞台にも立ったであろう）でこの歌を唄ったが、一九一九年には同名の「活動写真」に出演し、また *The Man who Broke the Bank*（1928）という自伝も出版している。なお Raymond Mander & Joe Mitchenson: *British Music Hall : A Story in Pictures* には、この歌を演出しているコウボーンの得意満面の舞台姿が掲載されているから一見をお奨めする。

前置きが長くなったが、問題のバラードの一、三番と、最後の四番を Sigmund Spaeth: *Read 'Em and Weep* から引用しておく。メロディーも同書には掲載されている――

As I walk along the *Bois Boolong*, with an independent air,
You can hear the girls declare, "He must be a Millionaire";
You can hear them sigh and wish to die,
You can see them wink the other eye
At the man who broke the bank at Monte Carlo.〔*Chorus* (repeat)〕

・　・　・　・　・　・　・　・

I stay indoors till after lunch, and then my daily walk
To the great Triumphal Arch is one grand triumphal march.
Observ'd by each observer with the keenness of a hawk,
I'm a mass of money, linen silk and starch,
I'm a mass of money, linen silk and starch.〔*Chorus*〕

I patronized the tables at the Monte Carlo hall,
Till they hadn't got a sou for a Christian or a Jew;
So I quickly went to Paris for the charms of mad'moiselle,
Who's the load-stone of my heart, what can I do,
When with twenty tongues she swears that she'll be true? [*Chorus*]

この歌とIrとの関係については、コウボーンの本名がケルト系の Colin Witton McCallum であるということと、前述のように彼がD市でも人気を博したと思われることとが考えられる。〔訳〕

要害を死守する男（The Man in the Gap） これは文学や歌とは関係がなく、現在もIrで使われている句。すなわち P. W. Joyce (1827-1914) によれば、Ir 古代の王たちはそれぞれ自分たちの家族や部族に加えられる外からの侮辱や危害に報復するために、股肱とも頼む大将をひとり抱えていた。彼らはいったん緩急あれば国境いの要害の地（その浅瀬や峠を "gap of danger" という）を死守する任務が与えられていた。このことから "the man in the gap" といえば、およそいかなる主義であれ地位であれ、それを実際に闘って、また言論文書合戦によって死守し、また死守しようとする烈士のこと（*English as We Speak It in Ireland*）。

なお、一九〇七年に Peadar Kearney (1883-1942) が友人 Patrick Heeney (*or* Heaney) (d. 1911) との合作曲に作詞したバラード *The Soldier's Song* (Ir. Amhrán na bPíoblacht=A Song of the Infantry Troop)（これは一九二六年七月政令によって Ir 共和国の国歌と定められた）のコーラス部はこうなっている——

Soldiers are we, whose lives are pledged to Ireland;
Some have come from a land beyond the wave.
Sworn to be free, no more our ancient sireland,
Shall shelter the despot or the slave.
To-night we man the Bearna Baoil,
In Erin's cause come woe or weal;

'Mid cannon's roar and rifles' peal
We'll chant a soldier's song.

五行目のフレーズ "Bearna Baoil" はIr語 beárnaa bóoṡail (=[a]gap of danger) の英語化で、意味はすでに述べた通りである。なおこの歌は国歌としてIr語で唱われ、英語で唱われることはあまりない。〔訳〕

『拒否した女』(**The Woman Who Didn't**) これは (Charles) Grant (Blairfindie) Allen (1848–99) の傾向小説 ***The Woman Who Did*** (1895) の題名をもじったもの。

ヒロインはあらゆる美徳の持主でありながら、女性解放のためには結婚という法律的な軛は破らなければならないと敢えて自由恋愛に踏み切り、それを実行する。

この小説は当時かなりな物議をかもし、その題名は「堕落女」の同義語として使われた。

作者はカナダ生れであるが、一八四〇年にその地に移住したIr聖公会の牧師の息子。〔訳〕

ナポレオン・ボナパルト (Napoleon Bonaparte) (一七六九—一八二一)。ナポレオンは親友の副官 Las Cases (1766–1842) に、もしエジプトの代りにIrに遠征していたらイギリスはいまごろどうしていたろう、と語ったという。

一七九四年に Samuel Hood (1724–1816) 麾下の英国艦隊が当時仏領コルシカ島で起った暴動の支援に出動したとき、その岬の小さな砲塔が熾烈な砲撃に耐えて頑強に抵抗した。その後ナポレオンがイギリス侵攻を企てたとき、時の宰相 William ('Billy') Pitt, the Younger (1759–1806) は早速 National Defence Act (1804) を成立させて、イギリスの南岸とIrの東南岸の各処に同種の砲塔を構築した。Uで有名な Sandycove の Martello Tower もそのひとつ。

反英のIr人の立場からすると、結局イギリスを侵寇することは果せなかったが、少くともイギリスと覇権を争い、重大な脅威を与えたナポレオンは民族の英雄ということになる。〔訳〕

ジョン・L・サリヴァン (John L. Sullivan) J. Lawrence S. (1858–1918)。アメリカ・スポーツ界の生んだ最初の英雄。"Boston Strong Boy", "Great John L." の愛称で呼ばれた。一八八二年にアメリカ・ボクシング・ヘビー級の王座に就いて以来、一八九二年 James Corbett (1866–1933) によって世界ヘビー級チャンピオンの座を奪われるまでの一〇年間、事実上世界のボクシング界に君臨した。

彼はIr移民の子で、しかもそれを誇りとしていた。一八八七年には英諸島を歴訪、とくにD市ではふたつのブラス・バンドが

"See, the Conquering Hero Comes" を奏でてこの民族の英雄を盛大に歓迎した。〔訳〕

三三　「わがいとしの君」(**Savourneen Deelish**) (Ir. 'r〔=abbrev. of agus=and〕a〔=my〕muirnin〔=darling〕oiltr〔=a. faithful〕)。イギリスの劇作家 George Colman, the Younger (1762–1836) のバラードの題名。海外に渡る兵士と恋人との別れ、故国に帰還した彼を待っていたものは恋人の死であった、という内容を詠ったセンチメンタルな哀歌。Ir人の作ではないがIr歌集にはよく収められている。ここには Ed. J. L. Hatton & J. L. Molloy: *The Songs of Ireland* から一番を引用する。メロディーについては同書を参照のこと——

Oh! the moment was sad when my love and I parted,
Savourneen Deelish, Eilee oge (Ir. eiltin〔as pronounced in Munster〕og=young E.)!
As I kiss'd off her tears, I was nigh broken-hearted,
Savourneen Deelish, Eileen oge!
Wan was her cheek, which hung on my shoulder,
Damp was her hand, no marble was colder;
I felt that again I should never behold her,
Savourneen Deelish, Eileen oge!

なお本文後出の画家 Michael Angelo Hayes はこのバラードにもとづく連作を画き、Irish Art Union から賞をもらった。〔訳〕

『ラマムアの花嫁』(**the Bride of Lammermoor**) Sir Walter Scott (1771–1832) の歴史小説（一八一九）の題名。無理強いされた結婚を嫌い、恋人に対する操を護るため新婚の夜に花婿を刺し、自らは発狂して翌日死んだヒロイン Lucy Ashton は烈女の鑑。したがって烈士、烈女を重んずるIr人の志向に投じる。

なおこの小説は Maria Callas (1923–　) の絶唱によって余りにも有名な Gaetano Donizetti (1797–1848) のオペラ *Lucia di Lammermoor* (1835) としてわれわれにも馴染み深い。〔訳〕

いかさま判事ピータ (Peter the Packer) P. O'Brien, Baron of Kilfenora (1842–1914)。クレア郡 Ballynalackan (Ir. Baile

na ʟeacan〔=g. of teaca〕; i.e. the town of the hill-side) 生れのカトリック教徒。トリニティ・カレッジ出身。父はリマリック選出の下院議員であった。Ir弁護士資格取得（一八六五）、王室弁護士（一八八〇）。王室の信頼篤く、重要な事件はほとんど手掛け、以後とんとん拍子に出世。Ir法務次官（一八八七）、Ir法務長官（一八八八）、Ir首席裁判官（一八八九）、一九一三年引退。

土地同盟（六五頁の「山のロリ」および八〇頁の「月光隊長」の注解参照）を始め民族主義の嵐が吹き荒れたこの時代に、英愛合同支持者としてあらゆる罵詈讒謗にも耳を貸さず、毅然たる態度をもって法秩序の維持に努めた唯一の人物といわれる。だが反面、非合法活動を敢てする（せざるを得ない）民族主義者にはきわめて受けが悪く、一時は信用できないと睨んだ陪審員はすべて忌避し、自分の意向にそう「安心な」者のみを集めるというので "Peter the Packer" という綽名で呼ばれ、Ir人の誰ひとりとして知らぬ者はない程であった。〔訳〕

「**黒髪のロザリーン**」(**Dark Rosaleen**) 原詩はヒュー・ロウ・オゥドヌル（七五頁の「レッド・ヒュー・オゥドヌル」の注解参照）の御抱え詩人 Costello of Ballyhaunis（土着化したノルマン人の名家 MacCostello の末裔。一六世紀までメイオウ郡に領地を所有していた）の作とも、また Owen Roe Mac Ward (Ir. ᴍᴀᴄ ᴀɴ ʙᴀ́ʀᴅ〔=son of the bard〕) の名前が示すように代々吟遊詩人の家柄で、しかもオゥドヌル家に仕えた）の作ともいわれる Roiṡín (=dim. of ṙóṡ, i.e. a little rose; pers. name, Rosie) Ḋuḃ (=black-haired)。それをマンガン（四九頁の「美わしきイニスフェイルに」の注解参照）が *Black Rosaleen* という題で英訳し、Thomas Davis (1814-45) らの週刊誌 *Nation* の一八四六年五月三〇日号に発表した。

この場合、「黒髪のロザリーン」とは直接には詩人が恋焦れる憧れの女性であるが、寓意的には "Kathleen-Ni-Houlihan", "Poor Old Woman (Ir. Seaṅ ʟeaṅ ʟoúcc", "Silk of the Kine", "Little Dark (*or* Black) Rose" (Ir. Roiṡín Ḋuḃ の文字通りの訳）などと同様にIrの象徴的な呼称であり、ヒュー・ロウ・オゥドヌルの祖国に対するひたむきな愛情を詠ったものだという。以下に第一聯と第三聯とを引用しておく——

O, My Dark Rosaleen,
Do not sigh, do not weep!
The priests are on the ocean green,
They march along the Deep.
There's wine...from the royal Pope,

Upon the océan green;
And Spanish ale shall give you hope,
My Dark Rosaleen!
My own Rosaleen!
Shall glad your heart, shall give you hope,
Shall give you health, and help, and hope,
My Dark Rosaleen.

. . . . .

All day long in unrest
To and fro do I move,
The very soul within my breast
Is wasted for you, love!
The heart...in my bosom faints
To think of you, my Queen,
My life of life, my saint of saints,
My Dark Rosaleen!
My own Rosaleen!
To hear your sweet and sad complaints,
My life, my love, my saint of saints,
My Dark Rosaleen!

〔記〕

パトリック・W・シェイクスピア（**Patrick W. Shakespeare**）聖パトリック（五四頁の「聖なるマイカンに捧げられし邦」お

よび六九頁の「九人の人質のニアル」の注解参照）とシェイクスピアとの関係については、Uの第九挿話で言及される判事 Sir Dunbar Plunket Barton (1853-1937) がその *Links between Ireland and Shakespeare* (1929) の中で詳細に論じているが、その論議の発端となるのは、これもUの第九挿話で引用されるハムレットの "By Saint Patrick" (*Hamlet*, I. v. 136) という誓言である。

これは *Hamlet*, I. v. 9-13 で明らかにされる亡霊の居場所、つまり煉獄を信じようとしないプロテスタントの Horatio にその存在を知らせるために引合いに出された誓言であると John Dover Wilson (1881—1969) は説明している。そしてその裏にはウィルスンも支持しているように、中世（とくに一三世紀）以来のIrの有名な巡礼地であるドニゴール郡の洞窟 Saint Patrick's Purgatory（ダーグ湖上の Station Island という小島にある）にまつわる伝説への言及が隠されているのである。

この伝説の起源がいつ頃で、またとこの地方を中心に拡がったものであるかいっさい不明であるが、一一八五～一一九〇年頃に、イングランド中東部の Huntingdonshire に住んでいたシトー会士 (Cistercian Monk) Henry of Saltrey (*or* Sawtrey) が書いたといわれる *Tractatus de purgatorio Sancti Patricii Hibernorum apostoli* (i.e. A Treatise about the Purgatory of St. Patrick, Apostle of Ireland) において忽然と現われる。この小著は "Vision of Owayne Miles" あるいは "Vision of Owen the Knight" ともいわれるもので、騎士オウエンの「聖パトリックの煉獄」における不思議な宗教体験の叙述が中心を成しているが、それに問題の伝説も記録されている。

聖パトリックがアルスタ地方で布教していた際に、聴衆の中にどうしても天国と地獄の存在を信じようとしない者がいた。思いあまった彼がそれを証明する手立てを与え給えと祈ったところ、主の導きによって例の洞穴の存在を教えられた。そして、真の信仰に醒め、心から悔悟しようとする者はこの洞窟に入り、一昼夜籠るがよい、必ずやこれまでの一切の罪科が洗い浄められるであろう。また信仰の微動だにしない者は、その眼で地獄の責苦と天国の至福の有様を確かめることができよう、との有難い仰せを給わった。

騎士オウエンは一巡礼者として、一四日間に及ぶパンと水だけの精進生活ののち洞穴に入ることを許され、伝説そのままに具さに地獄の恐怖を体験し、はては奈落の上に掛けられた狭くて滑り易い橋を渡って、天国の前段階である地上の楽園に足を踏み入れることができた。

このオウエンの体験記は中世ヨーロッパのベスト・セラーであって、『ブレンダン航海記』（八三頁の「聖ブレンダン」の注解参照）などとともにダンテの『神曲』の序章的な役割を果したといわれている。だが、聖パトリックとダーグ湖とを結ぶ証拠はいま

のところ何ひとつ見付かっておらず、また彼がその付近に赴いたと考えられる根拠もまったくないというのが実状である。

それは兎に角、問題の聖パトリックの伝説は、"St. Patrick keeps purgatory" (Thomas Dekker 〔1570?-1641?〕: *The Honest Whore* 〔1640〕, Pt. II) という考えを産んだ。ハムレットの誓言に盛られているのはこの煉獄の守護者としての聖パトリックという観念であり、それはとうぜんホレイショも先刻承知のはずなのである。

聖パトリックとシェイクスピアとの関係は、主として以上述べた点に尽きている。もちろん、バートンが上記の著書の中でシェイクスピアの作品の全般にわたって指摘しているように、視野を拡げてシェイクスピアとIrとの関係を問題にするならば、もっといろいろ興味のある接点(例えばこれもUの第九挿話で話題にされる、ハムレットはD王国のデイン人の王子であるとする説など)を挙げうるのであるが、ここではシェイクスピアがケルトないしはIr文化と無縁ではなく、むしろ反対にその土壌にもどっかと根を下しながら、多様な枝葉を四方八方に見事に拡げていることを指摘するにとどめる。〔訳〕

ブリアン孔子、マータ・グーテンベルク、パトリッチオ・ヴェラスケス (Brian Confucius, Murtagh Gutenberg, Patricio Velasquez) これらはパトリック・W・シェイクスピアの例に倣って、今度はIr人やケルト民族とまったく関係のない歴史的に有名な人物を採りあげ、Ir人としてごく一般的な名を冠してIrの英雄の中に取込み、ひいては現代の英雄「市民」(Citizen) を皮肉ったもの。

まずBrianであるが、これはクロンターフの英雄Brian Boru (七〇頁の「キンコラのブリアン」の注解参照) の出現以来、Irではごくありふれた個人名。

また西欧的な綴りで知られるConfucius (551?-479 B. C.) は中国風にはK'ung-tzŭと書き、『論語』であまりにも有名な春秋時代の儒家の始祖、孔子のこと。

孔子は友人Ezra Pound (1885-1972) を通じてジョイスにも親しい存在。ジョイスはFWではパウンドが好んで用いた綴りKung fu-Tzeを用い、その中庸思想に言及して"Kung's doctrine of the meang"などという。

次にMurtaghはIr語名ではMuṁčeaṁtaċ (=sea-director, expert at sea, able navigator〈muṁ=the sea; ceaṁt=n. right, claim) と書き、O'BrienやO'Neill (六九頁の「九人の人質のニアル」と八五頁の「マクマホン元帥」の注解参照) などの旧家ではよく使われる個人名であった (cf. Francis John Byrne: *Irish Kings and High-Kings*)。ただ、Muṁčeaṁtaċはすでに触れた第四七代Ir上王 (マンスタ王) Murtough O'Brienのように、Murtaghのみならず Murtough, Murtaugh, etc. と書かれることもあるから注意する必要がある。

またグーテンベルクは活字印刷の発明者として有名なドイツ人 Johannes Gensfleisch G. (1394/99-1468)のこと。彼の父はFriele zum Gensfleisch、母は Elsgen Wyrich zu Gutenberg といい、「グーテンベルク」は母方の姓を取った俗称であるという。

次に Patricio は Patrick スペイン語形で、Ir の守護聖人にちなんでIr人が好んで用いる洗礼名。

最後にヴェラスケスはスペインの有名な画家 Diego Rodriguez da Silva y Velásquez (1599-1660) のこと。彼の父はポルトガルの貴族 Silva 家の出身で Rodriguez da Silva というが、当時のスペインの習慣に従って母方の姓を名乗った。〔訳〕

ネモ艇長 (Captain Nemo) Jules Verne (1828-1905) の空想科学小説 *Vingt mille lieues sous les mers* (1870)、およびその続篇 *L'Île mystérieuse* (1870) に登場する人間嫌いの義賊、海賊潜水艇 Nautilus 号の艇長の名。

この "Nemo 〈L. ne〔=no〕+homo〔=man〕" はまた Charles Dickens (1812-70) の小説 *Bleak House* (1853) で、退役陸軍将校 Captain Hawdon が法律文書の書記をやりながら細々と暮していたときの名であり、さらには "Ὅμηρος (i.e. Homer) の Ὀδυσσεία (i.e. *Odyssey*), IX, 366 で、Ὀδυσσεύς (i.e. Odysseus *or* Ulysses) が一眼の巨人族 Κύκλωψ (i.e. Cyclops. cf. pl. Κύκλωπες) の Πολύφημος (i.e. Polyphemus) の洞穴に捕えられたとき、偽って告げた自分の名前が "Οὖτις (=Nemo)" であった。

ちなみに、ジョイス自身が作製した概要表によると、この第一二挿話は『オデュセイア』のキュクロープスの洞窟の場面に照応し、また作中の覆面氏 "I" が「ネモ」、つまり覆面のオデュセウス船長に相当する。〔訳〕

トリスタンとイゾルデ (Tristan and Isolde) (E. Tristram〔*or* Tristan〕and Iseult; G. Tristan und Isolde; F. Tristan et Iseut〔*or* Yseult〕)。このあまりにも有名な中世の悲恋物語は、現在の学問的な分類からいえば中世騎士道恋愛物語 (le Roman courtoi) の中のブルターニュ物語群 (le Roman breton)、つまり円卓物語群 (le Roman de la Table ronde) ないしはアーサ王物語群 (the Arthurian Romance) に包括されているが、元来はそれらとは別個のトリスタン物語群ともいうべきものに属している。

英独仏の諸国はもちろんのこと、ほとんどヨーロッパの全域に流布するこれら一連のトリスタン物語の原型がどのような作品であり、また何時、何処で、誰によって書かれたかという問題は、Gertrude Schoepperle の *Tristan and Isolt* (1913) の出版以来欧米各国の学者によって熱心な探求がなされてきた。だが、いまだに結論を得ていないというのが実状である。

しかしながら、アメリカの Roger Sherman Loomis (1887-1966) やIr の James Carney (1914-) らの研究によれば、その起源は紀元後七〇〇～八〇〇年の間にスコットランド、それも南部のケルト人、すなわち the Picts の間で形成されたトリスタン

伝説にあるということになる。すなわち、トリスタンのそもそものモデルはピクト王国の Drust *or* Drest (=tumult *or* din) 王 (fl. 780?) であったが、やがて伝説化し、スコットランドからウェイルズに、さらには Cornwall (i.e. Cornouailles) に伝播した過程において、その伝説に *The Pursuit of Diarmuid and Gráinne* や *The Exile of the Sons of Uisliu* のようなIrの駈落物語 (aitheda) ないしは恋愛物語 (serca) の特徴が加味され、主人公もDrystan *or* Drostan という名で呼ばれるようになった。この名はさらにラテン語の tristis、あるいはフランス語の triste (=sad) と結合して Tristan (Ir. Tristan) になったと考えられている。

ちなみに女主人公イーズールトについては、コナハト王 Guaire Aidne (d. 663) の娘 Créide がモデルであるとの説 (Francis John Byrne) もあるが、その名前に関しては、古くは Essylt *or* Esyllt がウェイルズのキムリ語の人名に現われ、また八世紀の古代ゲルマン語には Isold *or* Isolt (〈is〔=ice〕+vald〔=rule〕) の形が、さらにはラテン語形の名前として Isolda が見られるという (E. G. Withycombe)。またイーズールトの父王 Gormond はスカンディナヴィア系の名前で、このことから彼はIrに定住したデイン人の王であるとの推定がなされている。

一〇六六年にノルマンディ公 William (1027?-87) が英本島に上陸して、そこにノルマン王朝をひらいてからというものはイギリスとフランスとの関係はいっそうの緊密さを加え、軍事的にも政治的にも優位に立つフランスの文化がすさまじい勢いで流入して、イギリスの言語、文化、生活習慣までがすっかりフランス化してしまった。このような英仏両国文化の均質化はとうぜんのことながらイギリス文化の逆移入も伴い、例えば文学においても、アーサ王伝説や円卓伝説などをいわゆる "matière de Bretagne" として採入れることになる。

この潮流に乗ってコーンワァルのトリスタン伝説もフランスに移入され、ブルターニュの Anglo-Norman 人によって悲恋物語としての結構が整えられ（すでに指摘したフランス語の "triste" の影響から)、現在の Joseph Bédier (1864-1938) や André Mary の復元版に見られるような、主人公の生立ちから死にいたるまでを詳細に叙述した物語に成長したと考えられる。もっともベディエの仮説である一二世紀中ばの集大成版というのはあくまでも架空のものであって、現在に伝えられている Thomas (i.e. 'Thomas von Britanje' [Gottfried von Strassburg]) の最古の物語本も断章であるにすぎない。

これらヨーロッパの各地に残存するトリスタン物語本は、いま述べたトマの *Roman de Tristan* (1165-70?) をはじめとして、フランスには、同じく Anglo-Norman 人 Béroul の *Roman de Tristan* (1170 *or* 1180?)、すでに散佚した Chrétien de Troyes (d. 1197?) のもの (1165?)、*La Folie Tristan* という二篇の短詩 (lai) (ひとつは一二世紀末、もうひとつは一三世紀初めの作)、

Marie de France (fl. late 12c.) の物語短詩 *Chèvrefeuille*、それに散文による物語 *Prose Tristan* (1230?) があり、またドイツにはゞルールに依拠した Eilhart von Oberge の *Tristrant und Isalde* (1170?)、トマに依拠した Gottfried von Strassburg (d. 1210?) の未完の *Tristan* or *Tristan und Isold*、そのゴットフリート本をアイルハルト本にもとづいて完成した Ulrich von Türheim のもの (1235?)、同じくゴットフリート本を完成した Heinrich von Freiberg のもの (1290?)、アルザス人の著者による *Tristan als Mönch* (1250?)、さらには *Der niederfränkische Tristan* (late 13c.) があり、ノルウェイにはトマに依拠した Robert という修道士の手になる *Tristramssaga* (1226)、イギリスには *Sir Tristrem* (early 14c.)、イタリアには *La Tavola ritonda* (13c.)というトマ系統の散文物語がある。

ちなみに、イギリス系のトリスタン物語としては先述のもののほかに、Sir Thomas Malory (d. 1471) が *Le Morte Darthur* (1470) において、前述の『散文トリスタン』にもとづいてアーサ王物語の中に組みいれたものが有名。またトリスタン物語を題材にした作品は英独仏の三国だけでもかなりな数にのぼるが、それらを代表するものが Richard Wagner (1813–83) の楽劇 *Trisan und Isolde* (1859) であることは指摘するまでもない。

このようにトリスタン物語はケルト系の伝説が源流になり、舞台もイギリスのコーンワァル、フランスのブルターニュ、Ir の Weisefort というようにケルト民族の王国があった地域を中心に展開され、またとくにイーズールトの郷里がIrの王国の首都であり、一説にはそれがD西方郊外の Chapelizod (〈the chapel of Izod *or* Iseult) (Ir. Séipéal Íriúc〔=the chapel of Isirt)) であると考えられるところから、ジョイスはチャプリゾッド＝イーズールトをFWにおける聖杯探求物語の "Siege(=Seat) Perilous" ならぬ "Chapel Perilous" に仕立てあげる。〔訳〕

「勇敢なる少年兵」(**the Bold Soldier Boy**)　これは両注釈書で指摘されているように、D市生れの小説家、詩人、作詞家、劇作家、画家、作曲家でもある Samuel Lover (1797–1868) の *The Bowld Sojer Boy* という歌の題名およびその主人公への言及。これは三〇〇篇ほどある彼の歌謡の中でも、UやFWで言及される *The Low-Backed Car, The Angel's Whisper, The Land of the West, Rory O'More* などとともに有名なものである。だが、どうしたことか普通のIrの歌曲やバラード集には見当らないので、長くなるが以下に *The Favorite Songster* (Dublin, n. d.) から一、二番と終りの五、六番の歌詞を引用しておく——

Oh, there's not a trade that's going,
Worth showing or knowing,

Like that from glory growing,
    For a bowld sojer boy.
Whether right or left we go,
Sure you know, friend or foe,
Will have the hand or toe
    From the bowld sojer boy.

There's not a town we march through,
But ladies looking arch through
The window panes, will search through
    The ranks to find their joy.
While up the street, each girl you meet
With look so sly, will cry, "My eye,
Oh, isn't he the darling,
    The bowld sojer boy."

. . . . . .

Then come along with me,
Gramachree*, and you'll see,
How happy you will be
    With your bowld sojer boy.
Faith, if you're up to fun,
With me run, 'twill be done

In the snapping of a gun,
    Says the bowld sojer boy.

And 'tis then that without scandle†,
Myself will proudly dandle
The little farthning candle
    Of our mutual flame and joy.
May his light shine as bright as mine,
Till in the line he'll blaze and raise
The glory of his corps,
    Like the bowld sojer boy.

*Ir. gráḋ mo ċroiḋe=lit. love of my heart. † variant of *scandal.*

〔訳〕

『アラナ・ポーグ』(**Arrah na Pogue**)　ダブリン生まれのメロドラマ作者、俳優 Dionysius ('Dion') Lardner Boucicault (1820–90) の三幕物喜劇 *Arrah-na-Pogue : or the Wicklow Wedding* (一八六四年ダブリン初演、一九一一年「活動写真」化) の題名および女主人公 Arrah Meelish の綽名。この綽名の由来については第一幕第三場の次のやり取りを参照のこと——

O'Grady : Thank ye, Shaun ; and may this day that will change the name of your bride never change the heart of Arrah-na-Pogue !

Fanny : Arrah-na-Pogue ! that means Arrah-of-the-Kiss !

O'Grady : Don't you know why she is called so ? Tell her, Arrah.

Arrah : Sure I do be ashamed, sir.

Shaun : Ah ! what for ? It's proud I am of the kiss you gave, though it wasn't meself that got the profit of it.

Fanny: Indeed; and who was the favoured one?

Shaun: Beamish Mac Coul, Miss; her comdaltha—I mane her foster-brother, that is. It was four years ago. He was lyin' in Wicklow Gaol, the day before he was to be hung wid the rest of us, in regard of the risin'.

Fanny: I remember, he escaped from prison the day before his execution.

Shaun: Thrue for ye, miss. The boys had planned the manes (=great part) of it, but couldn't schame any way to give him the office, because no one was let in to see the masther, barrin' (=unless) they wor sarched, and then they could only see his face at a peep-hole in the dure of his cell.

Fanny: Did Arrah succeed in conveying to him the necessary intelligence?

Shaun: She did. Bein' only a dawny little crature that time, they didn't suspect the cunnin' that was in her; so she gave him the paper in spite of them, and under the gaoler's nose.

Fanny: How so? You say they searched her. Did they not find it?

Shaun: No, miss; you see they didn't search in the right place. She had rowled it up and put it in her mouth; and when she saw her foster-brother, she gave it to him in a kiss.

Arrah: And that's why they call me Arrah-na-Pogue.

Fanny: No one but a woman would have thought of such a post-office.

Shaun: And that's the only post-office I mean to get my letters from the rest of my life. (*laugh*)

なおヒロインの名前 Arrah は Ir 語の Arra (=interj. an exclamation of surprise) の英語形で、ちょうど日本語の「アラー!」に当り、苗字 Meelish は Ir 語の Miúr の英語形で、英語名 Miles *or* Myles に相当する。また渾名を Ir 語で書けば "Arra na bPóg (=Ara of the Kiss)" となる。〔訳〕

ディック・ターピン (Dick Turpin) (1706–39)。イギリスの有名な追剝。実際はありふれた悪党にすぎなかったが、他の盗賊の逸話や William Harrison Ainsworth (1805–82) の小説 *Rookwood* (1834) などの影響もあって義賊ロビン・フッドなみに尾鰭が付き、伝説化された人物。処刑後彼の死体は暴徒によって奪われ、ヨーク市の St. George's Church の墓地に手厚く葬られた。なおこの人物はいくつかのバラードや物語に登場するが、バラードのうちもっとも有名なのは P で言及される *Turpin Hero*

（処刑後間もなくの作）である。これは Stephen がいうように一人称で始まり三人称で終る。ここには William Chappell (1809-88) の *Popular Music of the Olden Time* (1855-9) から一番と終りから二番目の一七番を引用しておく。ちなみに最初の事件は、相手がターピンとも知らずに金の隠し場所を教えたばっかりに、法律家があとで有金全部を捲きあげられる話——

On Hounslow heath as I rode o'er,
I spied a lawyer riding before;
Kind sir, said I, ar'n't you afraid
Of Turpin, that mischievous blade?
O rare Turpin, hero, O rare Turpin O.

. . . . .

He ventur'd bold at young and old,
And fairly fought them for their gold;
Of no man he was e'er afraid,
But now, alas! he is betray'd.
O poor Turpin, &c.

なおチャペルによると、Ir のキルケニ郡に伝わるバラードに Dick Turpin の Ir 版 Captain Freney (fl. 17th c.?) を詠ったものがあった。これは問題の *Turpin Hero* の影響を受け、出だしはこうなっている——

One morning, being free from care,
I rode abroad to take the air;
'Twas my fortune for to spy

A jolly Quaker riding by:
And it's O bold Captain Freney,
O bold Freney O.

〔訳〕

『金髪娘』(**Colleen Bawn**) ダイアン・ブーシコウ(一〇四頁の『キスのアーラ』の注解参照)がジェラルド・グリフィンの小説 *The Collegians* (五九頁の「ギャリオウエン」の注解参照)にもとづいて書いたメロドラマの題名。一八六〇年三月二九日ニューヨークの Laura Keene's Theater 初演。あまりの好評にブーシコウはオペラ化を志し、イギリスの劇作家 **John Oxenford** (1812-77) の協力を得て台本を書き上げ、作曲はドイツ生れのイギリスの作曲家 **Sir Julius Benedict** (1804-85) が担当した。これが三幕物オペラ *The Lily of Killarney* (一八六二年、ロンドンのコヴェント・ガーデン初演)である。そのもっとも有名なアリアがまた *The Colleen Bawn* という題名で、よくIr歌曲集にこれだけ独立して収められている。その一番は——

The Colleen Bawn, the Colleen Bawn
From childhood I have known,
I've seen that beauty in the dawn,
Which now so bright has grown.
Although her cheek is blanch'd with care,
Her smile diffuses joy,—
Heav'n formed in her a jewel rare,
Shall I—that gem destroy,
Shall I—that gem destroy?
The Colleen Bawn, the Colleen Bawn
From childhood I have known,
I've seen—that beauty in the dawn
That now so bright has grown

I've seen that beauty in the dawn
That now so bright has grown.

なお "Colleen Bawn" はIr語の cailín (=a girl) bán (=a. fair-haired, etc.) 〔kəlín *or* kɔlín bɔːn〕 の英語形であって、百姓娘のヒロイン Eily O'Connor の愛称。〔訳〕

よたよた歩きのヒーリ (Waddler Healy) テュームの大司教 John H. (1841-1918) のこと。スライゴウ郡南東部 Arrow 湖畔の Ballinafad (Ir. Béal an Áta Fada 〔=the mouth of the long ford〕 生れ。メイヌース・カトリック神学校を優等で卒業、叙品(一八六七)。母校の古典学(一八六七—七〇)および神学教授、Royal University of Ireland (これは全国的な資格検定試験の実施機関ないしは予備教育機関で、ジョイスが学んだD市の Univerity College に本部があった) 評議員、Royal Society of Antiquaries of Ireland 副会長等を歴任。著書に *Insula Sanctorum* (1890), *Maynooth College: Its Centenary History* (1895), *Life and Writings of St. Patrick* (1905), *Irish Essays, literary and historical* (1908) その他がある。

なお、彼は歩き方に特徴があり、神学教授であった Rev. Walter McDonald (1854-1920) が元の同僚を評して、"he was tall, blonde, rough, strongly built, though inclined to waddle in his gait" といったと伝えられている。〔訳〕

主の僕ケルデス (Angus the Culdee) St. Aengus *or* Oengus the Culdee (Ir. Aonghus Céile Dé 〔=a servant of God, f. d. 11 March)。八世紀の後半から九世紀の前半にかけて在世したIrの司教(死亡年時は八一九、八二四、あるいは八三〇年といわれる)。

現在のリーシュ郡中央部の町 Mountrath (Ir. Móin na Ráta=〔the moor of the (circular) fort〕) 東方の Clonenagh (Ir. Cluain 〔=a meadow〕 Eidhneach 〔="*Latibulum hederosum*, the retreat of the ivy" (P. W. Joyce)〕) の修道院 (i.e. founded by St. Fintan 〔d. 603; f.d. 17 Feb.〕 in the middle of the 6th c.) で修道士になり、マウントトラス、ついで郡都 Maryborough の近くの森林 (i.e. Disertbeagh 〔Ir. prob. Díseart Beith (=the wilderness of the birch-tree)〕, on the banks of the R. Nore; now Dysertenos 〔Ir. Díseart Aonghusa (=the hermitage of St. Oengus)〕) の中で厳しい精進修行の後、D郡の Tallaght (Ir. Tamhlacht, "said to mean a plague burial-ground of Parthalon's 〔Ir. Partholón, said to have come to Ir. 300 years after the Deluge〕 people") の大修道院で前歴をいつわって助修士として禁欲的な信仰の生活を送っていたが、七年後に院長 St. Maelruain (Maelrubha *or* Melrua) of Tallaght (d. 792; f.d. 7 July) に見破られた。のちに大修道院長兼司教になり、最後はクロネナの修道院で死んだ。彼はまた韻文による聖人列伝 *Félire* (Mod. Ir. féilire=a catalogue of festivals, an almanac)

の作者として知られている。

なお“céile oé〔kéili δi:〕”というのは八世紀の末頃にIrで起った宗教改革運動で、それはより厳格な修道生活によって宗教心の深化増進を期すると同時に、知的あるいは芸術的な活動の刷新向上をも含んでいた（もちろんイングスに関しては、この運動の担い手の意味で使われている）。上述の聖メイルルーアンはこの主の僕運動の推進者のひとりで、かれが創建したタラハトの大修道院で書かれたと思われる夥しい写本が現在に伝えられ、かつての盛時を物語っている。〔訳〕

ドリ・マウント（Dolly Mount） D市北東部のD湾に面した地域。もとクロンターフの一部。

Weston St. John Joyce によると、ドリマウントは一八三六年までは一邸宅の名前（i.e. Dollymount House）であったが、一八三八年の *Dublin Directory* ではじめて地名として記載された。

クロンターフのこの一帯はオリヴァ・クロムウェル（七三頁の「オウエン・ロウ」の注解参照）の時代以来ノルマンディ出身の名門 Vernon 家の所領（居城がClontarf Castle）で、ドリマウントは Sir George Vernon of Haddon (d. 1567) の跡取り娘で、Thomas Manners, 1st Earl of Rutland (d. 1543) の次男 Sir John Manners と大恋愛の末に結ばれた Dorothy Vernon (d. 1584) にちなんで名付けられたものという。ただしこれには否定的な説もある。〔訳〕

シドニ・パレイド（Sidney Parade） D市南東部の海岸に近い地域。もと Merrion (Ir. Muṁṫeann〔=the sea-shore〕) 村の一部で、内陸から海岸に向う遊歩道の名であったが、鉄道の駅名になって以来メリオン地区全体の代名詞のようにも使われる。シドニ・パレイド（正式には“Sydney Parade”と綴られる）の名の起りについては明らかではないが、エリザベス女王によって何度もIr総督に任ぜられ、またその子孫から何人もIr総督を出した Sir Henry Sidney (1529-86) はときには Sydney と綴られることもあるから、あるいは問題の遊歩道はこのシドニにちなんで名付けられたのかも知れない。〔訳〕

ベン・ホウス（Ben Howth） D湾北部の玄関口を扼する半島ホウスの総称ならびに主峯の名。現在の名称はスカンディナヴィア語 hoved *or* höfud（=a head）の訛ったもので、古くは Hofud, Hofda, Houete, Houeth, *or* Howeth と書いた。

しかし、Ir語の名称は現在でも ḃeann Éadair（=the hill of Edar）といい、ここに葬られた Tuatha Dé Danann（四九頁の「美わしきイニスフェイルに」の注解参照）の族長 Edar にちなむとも、またIrを五等分した Firbolg 族（Ir. Fir ḃolg *or* ḃuiʒ, pl. Feaṁ ḃoʒ〔=a Firbolg or member of the ancient subject race of “bag-makers”〕）（=Gaulish Belgae）の五人兄弟のひとり、Gann の妻 Edar にちなんで名付けられたともいう。

またFWの下敷のひとつになった超常的な知識と予言力の持主、巨人 Finn MacCumhal *or* Finn MacCool (Ir. Fionn mac

Cúmatl, of Dane origin according to Hanmer〔1543-1604〕, but of the race of Πιαόδας Πεαčτ, king of Leinster, according to a chronicle) 伝説によれば、天から墜落した彼の頭がホウス岬になったといわれている。〔訳〕

ヴァレンタイン・グレイトレイクス（Valentine Greatrakes） (1629-83)。Irのウォータファド郡生まれの揉み療治師。一六四一年に父の死と国内の暴動が原因でイギリスに渡り、その後帰国して一六四九年以降クロムウェル（七三頁の「オウエン・ロウ」の注解参照）の議会軍に投じ、一六六〇年の王政復古とともに失職、その後は宗教的な瞑想と禁欲の生活に入る。一六六二年に霊感を得て瘰癧（るいれき）を始め癲（おこり）、リューマチ等の治療に成功、たちまち評判になる。一六六六年にイギリスの Bristol に招かれたのを手始めに、やがてロンドンに出て無料で多数の患者を治療した。彼の療法はマッサージと催眠術とを併用したもので、物理・化学者 Robert Boyle (1627-91)、詩人 Andrew Marvell (1621-78)、哲学者 Henry More (1614-87) など当代一流の人物の後援を得た。一六六六年にIrに帰国後は地主として悠々自適の生活を送った。〔訳〕

アダム・アンド・イーヴ（Adam and Eve） 聖書に出る人類の祖を指すとともに、D市南岸 Merchant's Quay にあるフランシスコ会の教会 "Adam and Eve Chapel" の名。

前身は一六二七年に現在地に近い Cook St. に建てられた礼拝堂。正式には Church of the Immaculate Conception というが、一般には上述の名称で知られている。教会の入口の近くにあった居酒屋の屋号から取られたもの。現在の建物は一八三〇～三二年の建造。〔訳〕

アーサ・ウェルズリ（Arthur Wellesley） 1st Duke of Wellington (1769-1852)。D市生れのイギリスの軍人、政治家。一時政界に身を置いたことはあったがその後陸軍に投じ、ナポレオンの東洋侵略計画を挫折せしめたのを始め、インドにおいてイギリス帝国のために輝かしい武勲をおさめた。一八〇五年に除隊し、翌年政界に復帰、一八〇七年Ir総督府付き一等書記官になったが、同年以降ナポレオンの動向に応じて随時海外に転戦、その功により一八一四年陸軍元帥。そして翌一五年には Waterloo の戦いにおいてナポレオン軍に潰滅的な打撃を与えた。

その後はフランス占領軍の総司令官、一八一七年末には政界に再度復帰し、貴族的な保守党（トリ）員として王の輔弼に任じた。一八二八年首相。翌年カトリック教徒の解放を行ったが、これは主として議会における意見の分裂が原因であって、Ir統治の最後の決手は武力だとの持論にいささかも変更があったわけではない。一八三一年首相を辞任。その後は首相 Sir Robert Peel (1788-1850) のもとで外相（一八三四―五）、無任所大臣（一八四一―六）、四八年侍従武官長。〔訳〕

クロウカ親分（Boss Croker） Richard C. (1841-1922)。ニューヨーク政界の黒幕。Irのコーク郡南岸の Clonakilty (Ir.

Cloč〔=a stone〕na〔of the〕Coillcrò〔=woodland〕*or* Cluain-Uí-Ċaoilce（=O'Keelty's *or* Quilty's meadow〔P. W. Joyce〕）生れ。獣医の息子。Irの有名な大飢饉に際して一八四六年一家を挙げて渡米。初等教育を終えただけで車輌修理工になり、やがて the Fourth Avenue Tunnel Gang のボスを振出しに、選挙区の民主党の親分 Jimmy O'Brien に認められたのが縁で市会議員（一八六八—七〇）、市殺人事件担当検事（一八七三、七六、七九）、市消防庁長官（一八八三）、そしてついに民主党タマニ会の拠点 Tammany Hall のボス（一八八六—九四、一八九七—一九〇三）にのし上った。かたわら市財務長官（一八八九—九〇）などもやり、利権を手蔓に巨万の富を成した。一九〇三年引退。ロンドンで、ついでIrで馬主として悠々自適の生活を送り、一九〇七年ダービィで優勝、D郡の Glencairn（Ir. Baile an Ġarráin〔=the village of the grove〕）で死んだ。〔訳〕

巨人殺しのジャック（Jack the Giantkiller） イギリスに古くから伝わる北欧系民話。基本的には *Jack and the Beanstalk* と同種の物語で、一聯のジャック話の中ではもっとも有名なもののひとつ。アーサ王物語の形成にも寄与したウェイルズの聖職者 Walter Map(es)（1150?-1208/9）の *De Nugis Curialium*（『宮廷遊楽篇』）に初めて見える。

勇敢で機才に富んだ Cornishman の小人ジャックが Cormoran をはじめ、数々の悪事を働く巨人をつぎつぎに征伐し、ウェイルズの平和を回復する。アーサ王の王子にも仕え、最後には生命を救ったさる公爵の娘と結ばれ、めでたしめでたし。彼が巨人から奪った invinsible coat, cap of wisdom, shoes of swiftness（seven-league boots）, resistless sword は有名。

なお、マップはこの譚をフランスの年代記から得たというが、児童文学、児童民俗学の分野で着々とすぐれた業績を挙げている Iona & Peter Opie 夫妻の研究によると、童話として現在の形に纏められたのは *The History of Jack and the Giants*（1711）（但し第一部は散佚）が最初で、その後一八世紀に急速に人口に膾炙したもののようである。またそれを構成するエピソードには、*The Prose Edda of Snorri Sturlason*（1220?）やスウェーデンの民話 *The Herd-Boy and the Giant* やグリム童話 *Das tapfere Schneiderlein* などとも共通のものが見出せるという。もちろんこの物語において、巨人＝英帝国、ジャック＝Ir。〔訳〕

レイディ・ゴダイヴァ（Lady Godiva） *or* Godgifu（fl. 1040-80）。一〇五七年（一〇四〇年説もある）にサクソン人の Mercia 伯で Coventry の領主 Leofric（d. 1057）が小作人に苛税を課した。それを后のレイディ・ゴダイヴァが諫めたところ、白昼全裸で町を乗廻すなら撤回しようということになった。もちろん王はごく軽い気持からこういったのだが、后はそれを言質に取って、さっそく全住民は屋内に閉籠り、窓も鎧戸をおろすように布告を発して後、長い頭髪を唯一の衣裳がわりに——"apparentibus cruribus tamen candidissimis（=but still her very white legs showed）"——王の冗談を実行してしまった。お陰で小作人は苛税を免れ、彼女はその後コヴェントリの守護者として崇められるようになった。

この伝説は Roger of Wendover (d. 1236) の *Chronica* に最初に記録され、Paul de Rapin de Thoyras (1671-1725) の *Histoire d'Angleterre* (1724) で今日のような物語に仕上げられた。

例の禁を破って后の裸を垣間見た仕立屋 "Peeping Tom" は、一七世紀のチャールズ二世（在位一六六〇—八五）のときに付加されたエピソードで、さらに後になって尾鰭が付き、この不心得が祟ってトムは盲目あるいは即死することになる。

実を云うと、歴史上のゴダイヴァとこの伝説上の后とが同一人物なのかどうか確証があるわけではない。歴史上のゴダイヴァは寡婦で、一〇四〇年にレオフリック侯と結婚し、また同年頃に Lincolnshire は Stow の修道院の建設に尽力するほどの信心家であった。

この伝説は民俗学的には男性を除外した豊穣の秘儀と関係があり、"The Flemish women, in rites which were probably those of the great goddess Freija, were semi-naked, and the whole proceedings were denounced by Christian priests as scandalous. In Russia, in Bohemia, the women, even in Christian times, performed their heathen ceremonies in their shifts. The rites of the Gaulish women were equally immodest. British (i.e. Druidic or Pictish) priestesses danced naked painted with woad...In India the great Pongol festival, which is probably in its origin agricultural, is characterised by the indecency of the officiating women. At the Vedic sacrifice of the horse, not only did the queen go through the ritual of symbolic union with the animal, but obscene jests were exchanged between the priests and the attendant women." (Robert Briffault: *The Mothers*) と報告されている。

以上のみよりしても、レイディ・ゴダイヴァとケルトとは何らかの関係があると推定されるが、さらに普通馬上姿で現わされるゴール・ケルトの大地母神 Epona (cf. "*ep(o)*-(*o*-stem) is a common Gaulish name element, cognate with OIr. *ech* 'horse', W., OCorn. *ebol*, Br. *ebeul* 'colt': Skt. *áśva-h*, Gr. ἵππος, Lat. *equus*...Loth argued that *epo*- was the 'cheval attelé' whereas the lexical variant *marca* was the 'cheval monté'." [D. Ells Evans: *Gaulish Personal Names*]) が彼女の祖型であるとの説もある。〔記〕

『キラーニの百合』(**the Lily of Killarney**) サー・ジューリアス・ベネディクト作曲の三幕物オペラ（一〇七頁の『金髪娘』の注解参照）。その粗筋は——

Ir の若い地主 Hardress Cregan が Killarney (Ir. Cill Áirne〔=the church of the sloe-tree〕 *or* Cill Áirneaḋ〔=the church of the sloe-trees〕[P. W. Joyce]) 村の美しい金髪の百姓娘エイリ・オッコナと結婚した。ただこの結婚は内々のもの

で、たまたま富豪の「赤毛の娘」(the Colleen Ruadh〔Ir. cailín ruadh=a red-haired girl〕)ことAnne Chuteと縁組して倒尽した財産を回復する好機が訪れたので、ハードレス母子はエイリを離別しようとする。だが彼女は結婚証明書をどうしても手離そうとしない。そこでハードレスの忠実な傴僂の下僕Danny Mannが彼女を湖水に突落して溺れさそうとする。そこを彼女の身を案じていた貧しい恋人Myles-na-Coppaleenが危機一髪ダニ・マンを射って彼女を助ける。彼女が危く難を免れたことがハードレスを本心に立帰らせ、彼は野望を棄ててエイリとの結婚の公表を決意する。かくてその披露宴の席上、ハードレスの母親Mrs. Cregan はエイリに自分の非を詫び、息子は息子で彼女に愛を誓い、また命の恩人マイルズ・ナ・コパリーンも彼女を譲ってふたりの手を握らせ、ここにすべてがハッピー・エンドで幕を降す。

なお、キラーニはIr南西部ケリ郡中部の風光明媚な町。〔訳〕

邪眼のバラル (Balor of the Evil Eye) Balor (Ir. bʼalar〔báləɾ〕)はIr神話に現われる独眼の巨人、the Formorians (Ir. Fomóraiġ〔fówɔːɾoi〕, pl. of Fomórach〔fówɔːɾəɣ〕)の王。

このフォウォーラ族というのは古来の説によれば、fo〔=fa, prep. on or over〕+muin〔=the sea〕と説明されているように、元来は海賊であって、デイン人同様にスカンディナヴィア(Ir. Lochlann or Lochlann)からIrに侵入して王国を築いた種族である。だが、彼らは本来はアフリカの出身であって、聖書のノアの息子であるハムの子孫ということになっている。彼らは巨人族だが、それはIr語の形容詞 mór (=big) との関聯から考え出された属性。

フォウォーラ族の王であるバラルは、先述のごとく独眼の巨人であるが、その眼はいわゆる「邪眼」(Ir. súil milce)であって、それに睨まれると相手は即死するか石になってしまうという。だが、その眼はさいわいにも普段は閉されており、戦場で敵を斃すときにのみ威力を発揮する。しかしその際も、垂れさがった眼瞼を四人の従者が熊手でかき上げなければならないのである。彼が邪眼になったのは、父王に仕えるドルイド僧たちが釜で霊薬を合成しているときにそれを盗み見たためで、その折の毒性の蒸気が彼の眼に滲みこんだからだといわれている。

この問題の邪眼 (E. evil eye; F. mauvais œil; G. übel Auge; It. malocchio or iettatura) というのは、ヨーロッパのみならず全世界に拡がる俗信である。日本でも猿田彦神はこの邪眼の持主であったとされる(「一の神〔=猿田彦大神〕有りて……眼は八咫鏡の如くして、赫然赤酸醬〔=赤酸漿〕に似れり……時に八十萬の神有り。皆目勝ちて相問ふこと得ず」〔『日本書紀』巻第二〕)が、日本にはその名称がなく(現代の中国語では「凶眼」〔望之將遭惡運〕という)、「邪眼」という言葉は日本の民俗学の父といわれる南方熊楠(一八六七—一九四一)が与えた訳語「邪視」から来ている(いずれも日本の民俗学会では正式の用語と

して採用されている)。もっとも熊楠の博覧によると、仏典『四分律』(大正蔵二二)に「邪眼」の語が見え、また唐の般若三蔵(七三四―八一〇)訳のいわゆる「四十華厳」の巻二八「(入不思議解脱境界)普賢行願品」(大正蔵一〇、七九〇、中)にも「邪視」(「邪視愚智諸女人　見畫像女亦憎惡」)という語があるから、これらはかならずしも彼が案出した訳語ではないことになる。

イギリスのアッシリア、エジプト学者として有名な Sir Ernest Alfred Thompson Wallis Budge (1857-1934) によれば、邪眼ないしは邪視のことは紀元前三千年にスメル人が粘土板に楔状文字で書き記したのが最初だという。つまりスメル語では邪眼のことを IGI-HUL といい、以下のような説明が加えられているらしい――

The roving Evil Eye hath looked on the neighbourhood and hath vanished far away, hath looked on the vicinity and hath vanished far away, hath looked on the chamber of the land and hath vanished far away, it hath looked on the wanderer and like wood cut off for poles it hath bent his neck.

『日本書記』によると、天孫降臨の一行を待受けていた猿田彦の邪視による「見毒」を無効にしたのは、「目人に勝ちたる」天鈿女命が「其の胸乳を露にかきいでて、裳帯を臍の下に抑れて、咲嘘ひて向きて立つ」ことによってである。これはなにも日本に限ったことではないが、邪視には女陰が威力を発揮する。またこの魔除けの力は民俗学でいう "Mano-Fica" (世界共通に女陰を表わす)(六七頁の「クーフリン」の注解参照)にも具わっていると考えられている。例えば佐藤紅霞の『貞操帯祕聞』に、男の嫉妬を鎮静させるための呪文として、「先づ、男の目元を見るふりをして居り乍ら、終始見て居り乍ら心中にて、無花果を澤山おがりよ、と云ふ也、其折笑ふと効なし、數行へば行ふ程よし」というのが挙げられているが、この無花果は現実の果実を指すとともに、明らかに女陰ないしはマノフィカのもつ呪力をも暗示している。ちなみに、問題の屎を象った指の表示に対しても日本語では一定の名称がないようであるが、熊楠が『享保世話』から引用している狂歌「五つ指、人さし指のその間に親指はさんで煮豆をかしき」を読むと、あるいは「煮豆」という名称で呼ばれていたのかも知れない。

それはとにかく、邪視と女陰ないしはマノフィカとの関係については、熊楠が聞いたという一Ir人の愉快な話を引用して終ることにしよう――

今年二月、七十二で死んだ人類学者で名画家サー・チャールス・リード (i.e. Sir Charles Hercules Read, 1857-1929) の直

話に、氏の生国アイルランドでは、今も欣羨、貪慾、憎悪、嫉妬等の念いをもって人や畜(けだもの)や物品をみれば、見らるる者その害を受くと信じ、むかしは邪視の力よく大建築物を焼くとさえ伝えたから、古い大寺の前に女が陰を露わせる像を立てたのがある。人あってその建物を睨み詰めんとするうち、女陰をみてたちまち視力の過半をその方へ減じ去らるべき仕組で、ちょうど落雷の際、避雷柱よく電力を導き散じて災いなからしむるに同じ、と。

（「紀州田辺湾の生物」――『南方熊楠全集6』）

さて、Irの先住民として、後から侵入してきた諸種族を悩まし続けていた怪物フォウォーラ族と、神の種族 Tuatha Dé Danann（四九頁の「美わしきイニスフェイルに」の注解参照）との間で、南方のメイオウ郡と北方のスライゴウ郡に跨る Magtured (i.e. Moytirra *or* Moytura) (Ir. Mag Tuire〈Mag Tuireaḋ＝"plain of the *tuirs* or towers...So called from a number of Cyclopean towers still remaining on the battle-field, erected over the illustrious slain."〔P. W. Joyce〕) の野で再度にわたる決戦が繰拡げられる。

最初のメイオウ郡の戦いで、トゥハ・デ・ダネン族の王 Nuada は右手を失い、それとともに至高の怪力もうせて戦列を離れるが、のちに銀の義手を作ってもらい Nuaḋa Airgeaḋlámh (i.e. Nuada the Silver-handed〔*or* armed〕) と呼ばれるようになる。

次のスライゴウ郡の決戦では、邪眼のバラルがその致命的な眼差しで「銀の腕」のヌアガを撃とうとするが、折よく居合せたトゥハ・デ・ダネン族の、だがバラルの孫でもあるLug (Ir. Cuṡ Saṁiolṫoánaċ〔＝lit. the equally skilled in all arts〕 *or* Luṡ Láṁ-fáḋa〔＝the Long-handed〕) が、ダビデのように投石器でその眼をぶち抜いて殺してしまう。

このバラルの神話はまた民話としても有名で、山室静氏の和訳（『新編世界むかし話集1―イギリス編』〔現代教養文庫〕）もあるから一読をお奨めするが、いずれも予言が的中して孫の手にかかって落命することになる。そういえば、この第一二挿話は『オデュセイア』の一眼の巨人族キュクロープスのひとりポリュペーモスの洞窟の場面に照応する（一〇〇頁の「ネモ艇長」の注解参照）のだから、ポリュペーモス＝市民と考えられ、それはまた問題の独眼邪視のバラルとも等式によって結ばれることになる。ただ、一眼の巨人族にあやかろうと背伸びはしてみたものの、所詮は張子の虎にすぎない市民は投石器の一撃によって化の皮を剝がれるわけで、「邪眼のバラル」の像が彼の護り本尊の中に加えられているということは、孫に殺されたバラル同様に予言的（伏線的）な意味合いを持つものと考えて間違いはあるまい。

最後に結論として、バラルの邪眼について言語宗教民俗学の立場からメスを揮ったトマス・フランシス・オゥライリ（五八頁の

「エルバナ」の注解参照）の基づいて興味のある学説を紹介してこの項を終る ―

Like other peoples in ancient times, the Celts believed that lightning and its accompanying thunder had, like fire in general, their source in the sun. The Sun-god...was not only the god of lightning and thunder; he was also the lord of the Otherworld, and the ancestor (or maker) of mankind. One of his many names in Irish was *Aed*, meaning 'fire'; another was *Eochaid Ollathair*, 'Eochaid the Great Father'.

From its shape and brightness the sun was regarded as the divine Eye of the heavens; hence we understand how the Irish word *súil*, which etymologically means 'sun', and is cognate with Welsh *haul*, Lat. *sol*, etc., has acquired the meaning 'eye'. When conceived anthropomorphically, the deity was often regarded as a huge one-eyed being, and one of his names was *Goll*, 'the one-eyed'. So we find a number of allusions to the single eye of Eochaid, the sun-god....

The lightning issuing from the sun was sometimes conceived as a flashing glance from the god's eye. This idea is exemplified in Irish traditions concerning the one-eyed Balar, whose glance brought destruction. *Balar*, earlier *Bolar*, represents a Celtic **Boleros;* the IE. root is *bhel-*, 'flash', a simpler form of the root *bheleg-* that we have seen in *Bolg*, 'lightning'....

The general idea concerning the lightning-stroke or 'thunderbolt' was that it was a surpassingly powerful missile or other weapon. Thus it was variously regarded as a (fiery) spear, a sword, an arrow, a stone, a hammer, or an iron bar or club....

The lightning-weapon...had its origin in the Otherworld, where it was forged by the Otherworld-god, the divine smith; but in myth we generally find it wielded by a younger and more human-like deity, the Hero, as we may call him. With this weapon the Hero overcomes his enemy, the Otherworld-god, or, as it might be expressed, he slays the god with the god's own weapon. So we find Lug, otherwise known as Lugaid, wielding a mighty spear. 'The spear that Lug possessed' (*an tsleg boi ac Lug*) was one of the marvellous things that the Tuatha Dé Danann brought with them to Ireland. Hence Lugaid is called *Lugaid Lága* and *Lugaid Láigne,* both meaning 'Lugaid of

the spear'.

(*Early Irish History and Mythology*).

〔訳〕

シェバの女王（the Queen of Sheba） Solomon 王（d. 930 B. C. ?）の智恵を試すために、山なす金銀財宝を携えてはるばるエルサレムを訪れたという旧約聖書（「列王記Ⅰ」10―一～一三、「歴代誌Ⅱ」9―一～一二）の女王。聖書にはその名はないが、『コーラン』では Bilqis と呼ばれ、聖書とは別のソロモン王＝シェバの女王伝説が収められている（27―二二～四五）。そこでは女王は邪教（太陽神）を崇拝し、悪魔につかえる呪術師として画かれている。だが、彼女もけっきょくはソロモン王の智恵に負けて、唯一神アッラーのもとに改宗することになる。

聖書や『コーラン』におけるソロモン王とシェバの女王との智恵競べは、『コーラン』によると明らかに呪術師同志の腕競べで、事実ソロモン王は西洋呪術の祖ということになっている。

Eliza Marian Butler（1885-1959）は、聖書（「列王記Ⅰ」11―一～一三、「ネヘミヤ記」13―二六）に述べられているソロモン王の晩年の女色による堕落がシェバの女王の来訪に予兆されているというが、アビシニア（エチオピア）の *Kebra Nagast* によれば、ソロモン王と彼女（Makeda と呼ばれている）とは昵懇の間柄になり、紀元後一二七〇年に始まる新王朝はふたりの間に出来た Menelik の末裔といわれている。

なお、聖書のシェバ、すなわち Saba は古代南アラビアの王国であって、現在のイエメンだと考えられている。

さて、シェバの女王とIrとの関係ということになると、直接両者を結付けるものは何ひとつないといってもよい。ただ、智恵者ソロモン王に関する伝説は東は中近東からインド、さらにはマレイ半島に至るまで、また北はスラヴ諸国、西はIrに及ぶ広汎な分布を示しているから、Irにおいてもソロモン王の随伴者として、何か特別な伝説が伝わっているかも知れない。〔訳〕

アレッサンドロ・ヴォルタ（Alessandro Volta）（1745-1827）。Como 生れのイタリアの物理学者、伯爵。Pavia 大学の物理学教授（一七七九―一八〇四）。彼は電流の理論を発展せしめ、水の電気分解を発見。また電槽、起電盤、ボルタ電池、コンデンサー、検電器等を発明。電圧の実用単位である volt は彼の名にちなんで命名された。

ジョイスは一九〇九年九月中ばに、妹の Eva Mary Joyce（1891-1957）を連れてD旅行から帰国したが、その妹からD市には活動写真の常設館がないと聞かされるや、早速 Trieste の興業主とはかってD市における常設館の開設を計画した。当時トリエステには Edison 館および Americano 館という常設館がふたつもあり、同じくトリエステの興業主が経営しているものに、ルー

マニアのブカレストの Cinematograph Volta があった。

ジョイスらがD市に開設しようとしたのはこの最後のシネマトグラフ・ヴォルタで、彼は一九〇九年一〇月下旬に再度Dに出掛け、一二月二〇日にはどうやら開館に漕ぎつけた。だが、当初の人気はどこへやら、しだいに経営が苦しくなり、翌年の六月には英国資本の the Provincial Theatre Co. に身売りしてしまった。

失敗の原因は、ひとつにはジョイスが事業に対する興味を失ってしまった（一九一〇年一月早々にトリエステに引揚げ、その後は直接タッチすることはなかった）のと、上映のフィルムがあまりにもイタリアものに片寄っていたためといわれる。

ヴォルタとIrとの関係については、おそらくヴォルタの名前を取ったと思われる上述のシネマトグラフ・ヴォルタ（通称「ヴォルタ」）を除いては直接の結びつきは考えられない。ヴォルタを市民をめぐるIrの守護者に加えるあたりにいかにもジョイスらしい茶目気が窺われる。〔訳〕

ジェリマイア・オゥドノヴァン・ロサ (Jeremiah O'Donovan Rossa) Diarmaid (*anglice* Jeremiah) O. R. (1831–1915)。コーク郡南部の町 Rosscarbery (Ir. Ros〔=a wood〕Carbre〔=of Carbery〕; cf. 'formerly a place of great ecclesiastical eminence; and it was "so famous for the crowds of students and monks flocking to it, that it was distinguished by the name of *Ros-ailithir*" (*Four Masters*), the wood of the pilgrims' (P. W. Joyce)) の生れ。幼年時代はIr語しかしゃべれなかったという。初等学校に通うようになってから英語を学び、Ir語の読み書きは父親から教えられた。食料雑貨店に年期奉公に出され、のちに独立、商店を経営。

一八五七年の初めに、ロスカベリの西一六キロの Skibbereen (Ir. An Sciobaireín *or* An Scribaireín〔=the "place frequented by boats" (P. W. Joyce)〕) に the Phoenix National and Literary Society という成人教育の読書会を組織す。翌五八年五月に James Stephens (1825–1901) がやって来て、オゥドノヴァン・ロサを始めフェニックス会のメンバーを次々に the Irish Republican Brotherhood（一八五八年三月一七日に結成。この名称はあとから付けられたもの）に誓約加入させたことによって会は政治結社化し、ロサ自身は熱烈な民族主義者になった。

一八五八年一二月、他のフェニックス会のメンバーとともに逮捕。翌年七月釈放後アメリカに渡る。一八六三年夏、ジェイムズ・スティーヴンズはプロパガンダと資金稼ぎのために週刊誌 *Irish People* を発刊、編集者に、イェイツやダクラス・ハイドらに影響を与えた John O'Leary (1830–1907)、営業担当者にオゥドノヴァン・ロサを当て、Thomas Clarke Luby (1822–1901)、チャールズ・ジョウジフ・キッカム（六五頁の「山のロリ」の注解参照）もスタッフに加わった。

オゥドノヴァンは帰国後 I. R. B. のオルグとしても精力的な活動を続け、一八六五年に予定された武装蜂起にそなえて着々と勢力の増大をはかった。危険を感じた当局は密告者の情報にもとづいて断を下し、同年九月一四日、オゥドノヴァンを始め、オゥリアリ、ルービ、キッカムのスタッフ全員を逮捕、オゥドノヴァンは終身刑を言渡された。

彼は獄中においても闘争を続け、不当な待遇についてしばしば手記を発表し（後に *Prison Life*〔1874〕として出版）、国際的な注目を集めるとともに、恩赦運動支援の示威行為として、一八六九年には入獄のままティペラリ選出の下院議員に当選。一八七一年に釈放後、ふたたびアメリカに渡り、ホテル業を営みながら *United Irishman* を発刊。一八七七年には the Fenian Brotherhood の代表になり、しきりにイングランドにおけるテロ活動を奨励した。だが、この過激な活動はマクダーマット（七六頁の「レッド・ジム・マクダーマット」の注解参照）の背信も手伝って同志の非難を招き、パーネルや議会内闘争を支持する長年の盟友 John Devoy (1842-1928) とも袂を別つにいたった。

このようにして孤立したオゥドノヴァンは、その後は象徴的な存在に終始し、*Recollections, 1838-90* (1898) の執筆などをして淋しい晩年を送ってのち、一九一五年にニュー・ヨークで死んだ。だが、この淋しい死とは反対に、D市における彼の葬儀は盛大を極め、主要な民族主義者がすべて参列し、さながら翌年の武装蜂起にむけての一大デモンストレーションの観があった。〔訳〕

ドン・フィリップ・オゥサリヴァン・ビア (Don Philip O'Sullivan Beare) (1590?-1660)。オゥサリヴァン・ビア家は代々マンスタ地方を領有していた古代ゲールの王族の子孫で、フィリップはヒュー・オゥドヌルらのアルスタの叛乱（七五頁の「レッド・ヒュー・オゥドヌル」の注解参照）の際に勇名を馳せた Donall O'Sullivan Beare (1560-1618) の甥。

コーク郡南西端にある Dursey (*or* Dursy) Is. (Ir. Na Doirtai〔=the doors, gates, passes, *or* approaches〕) の父の居城で生れたが、父とスペイン王 Felipe III (1578-1621) との密約によって、一六〇二年に人質としてスペインに送られた。だが、その後亡命してきた父や家族とその地で再会することになる。

スペイン北西部の Santiago de Compostella で教育を受けてのち、スペイン海軍に編入されたが、興味はむしろ著述にあって、いずれもラテン語で歴史や宗教関係の著書を残した。その中には、エリザベス一世がIrの植民地化のために行った数々の戦役の有様を近親者の口を通じて記録した *Historiae Catholicae Iberniae Compendium* (=A Short History of Catholic Ireland) (1621) や、聖パトリックの伝記 *Patriciana Decas* (=Ten Books on St.Patrick) (1629) などがある。

なお、"Don" はスペインで洗礼名の前につける敬称であるが、もとは高位の者に限られていた。フィリップ・オゥサリヴァン・ビアの場合も、一六六〇年にマドリードで死去した the Earl of Bearhaven (*or* Birhaven) と同一視されている。〔訳〕

あとがき

この『ユリシーズ』第一二挿話（新訳）は、洛陽の紙価を高からしめた「悪い本」『誤訳』の著者W・A・グロータース神父と筆者小川との文字通りの共訳である。グロータース神父によって「誤訳の世界記録」と評された在来の『ユリシーズ』の日本語訳は一字一句といえども参照せず、原文に忠実に、しかも重層的で多彩なそのスタイルの造型と効果を減殺することなく、そのまま日本語によって再現するという（可能か不可能かは別として）きわめて厳しい課題に答えたのがこの訳である。つまりは日本語および日本文の限界に挑戦し、新たな地平を開く試みも含めて、いろいろな工夫を凝してもみた。だから原文と対照してじっくり味読していただくのが最上の読み方であろうが、そうでなくても充分に鑑賞に耐えうるよう最大の努力は払ったつもりである。もちろんまだ未完であるし、百パーセント誤訳や不備がないとはいえまいが（この点では筆者に全面的な責任がある）、これ以上の彫琢は将来に俟つことにして、ひと先ず読者諸氏の批判に委ねることにする。

また割注および注解に関しては、それぞれの分野における学問的な業績を踏まえ、またときには納得のゆくまでそのテーマを追求して、疑問の余地を残さぬよう徹底したつもりである。そのために注解の枠を逸脱した個所もあるが、これもひとつには筆者生来の凝性のためであり、また訳者も含めて、Irの文物、歴史、民俗等に関して余りにも無知な日本の読者のことを考え、ケルト魂ともいうべきIr人の心に尠しでも肉迫しうる縁（よすが）にと、学問的な良心を走らせたためでもある。まだまだ不充分な個所もあり、けっして満足のゆくものではない。また資料と知識の不足は蔽うべくもないが、原稿の締切期限もぎりぎり（前代未聞との声もある）のところまで来ており、予定の項目をすべて消化しえず返すがえすも残念ではあるが、今回はこれまでどうか御容赦を願いたい。

なお、この注釈の仕事についても、筆者の努力ばかりではなく、グロータース神父の語学力と博覧強記に依存するところ頗る大であったことをここに感謝とともに明記しておく。

グロータース神父と筆者とはキリスト教、それもカトリックと仏教（真言密教）との違いはあるが、ともに普遍宗教を信ずる者として、生物たると無生物たるとを問わず、この宇宙上のすべての存在との「縁」に感謝し、それを可能ならしめたキリスト教の神の摂理、および仏教の法界力、ひいては大日如来との加持感応を身に体しつつこの仕事に打込んでいるのであって、われわれの立場からすると、これも宗教活動の一環なのである。ということは、われわれの仕事には生きてそれに従事しうることへの感謝と、仕事そのものに対する祈りとが込められていなければならず、またそれなしには文学も芸術も学問も成立しえないということに外ならない。

率直にいって、現代の文学や芸術にたずさわる者に著しく欠除しているのはこの謙虚な態度であり、自己の存在に対する飽くなき意義の追究ではないだろうか。その意味から今日のわれわれは、松久朋琳氏の体験からにじみ出た次の言葉に一度は耳を傾け、その意味するところをよくよく考えてみなければなるまい——

がんぜない十歳の鼻たれ時代から、こりこり〝木の仏〟を彫りつづけて、ふと気づいてみますと、六十年という歳月が流れておりました。そのあいだわたしは木の中においでになる仏さんに、

「これでよろしゅうございましょうか？」と、おそるおそるおうかがいしながら鑿（のみ）を入れてきたのです。

七十二歳のこんにちまで、わたしが彫りまいらせた仏像は、掌にのるような小さな念持仏から、大阪四天王寺の仁王さんのような大きな仏さんまで、おうよそ、三千躰を越えていると思います。その一つ一つはみ仏と語り合うて生まれてきたもので、世の芸術家のように〝個性の表現〟なぞと、誇りがましゅういえるものは一つもありません。わたしは仏師であって

彫刻家ではなく、仏師には無心のほかに個性なぞというものは必要としないからです。

（『京佛師六十年』）

この文を終るに当って、この仕事を曲りなりにも結実せしめるために、昭和五〇年度の国内研究の機会を与えてくださった明治大学、それも直接の責任にある人文科学研究所の関係者諸氏、こちらの依頼に対して、調査のうえ精確な報告をいただいた英国文化協会および駐日愛蘭土大使館、Ir語について、世界でも珍しいネイティヴ・スピーカーとして数々の御教示をいただいた逗子カトリック教会（聖コルンバン会）のカハル・ガラハー神父、訳文の、特に古文部分について、国文学者としての立場からいろいろ貴重な助言を賜った同僚でもある今泉準一教授、ヒンディー語およびインド哲学関係の用語について、きわめて適切な御教示を賜った大正大学講師北條賢三師、またグリム童話について、面倒な質問にお答えいただいた、これまた同僚の坂下進教授、一般の読者の立場から、また友人としての気安さから率直な感想をいただいた大嶽鋳工所の大浦興三氏、さらには原稿の完成が後れにおくれ、たいへん御迷惑をお掛けしたにもかかわらず、予算その他について色々な方策を講じていただいた『教養論集』の関係者諸氏に対し、この機会を借りて心からの謝意を申し述べさしていただく。